

那覇空港内大嶺地区 埋蔵文化財分布調査報告

2012（平成 24）年 3 月

那覇市教育委員会



巻首図版 1 那覇空港大嶺地区一帯の空中写真 (2010年撮影)

(S=1:10,000)



巻首図版 2 大嶺地区遠景 南から



巻首図版3 大嶺地区遠景 北から



巻首図版 4 大嶺地区遠景 西から
大嶺地区近景 東から



巻首図版5 て-105・106 ロ ピット及び遺物出土状況
に-120 石列検出状況



巻首図版 6 と-95 耕作痕及び植栽痕検出状況
と-98 那覇飛行場に係る建築物及び耕作痕及び植栽痕検出状況



巻首図版7 そ-99口 小祿海軍飛行場 石灰岩礫敷検出状況
(上：平面 下：断面)



巻首図版 8 大嶺海岸のようす

序

本報告書は、平成 19 年度から平成 22 年度にかけて実施した那覇空港の総合的な調査に伴う埋蔵文化財分布調査の成果を収録したものです。

今回の分布調査はその特殊な環境により、これまで埋蔵文化財の確認をされてこなかった那覇空港大嶺地区で初めての埋蔵文化財の調査となりました。文献資料でしか見えなかった集落の痕跡を実際に遺構や遺物という形で確認することができました。

また、大嶺地区のもう一つの側面として、昭和 6 年には旧日本軍による飛行場建設のための用地接収により小禄飛行場と姿を変え、昭和 18 年には小禄海軍飛行場となりました。戦後は米国空軍・那覇航空隊管理のもと那覇飛行場となり、日本復帰以降は運輸省所轄の那覇空港と改められ、自衛隊基地も設置されました。

那覇空港大嶺地区における近世から現代までの歴史的経緯を、分布調査において確認できた事は、那覇市の歴史の 1 つとして貴重な財産になることと思われま

す。那覇空港の新滑走路建設が現実味を帯びてきている中、当報告書が今後の那覇空港拡張整備計画における遺跡の保存のための基礎資料として、また、市民の皆様はもとより多くの方々に活用される事を切望いたします。

末尾になりましたが、発掘調査および資料整理にあたり、ご指導・ご助言を賜りました諸先生方、並びに事業の実施にあたりご協力を賜りました関係各位の皆様に深く感謝申し上げます。

平成 24 年 3 月

那覇市教育委員会
教育長 城間 幹子

例 言

- 1 本報告書は、平成 19～22 年度に実施した那覇空港大嶺地区（西側管理区域）における埋蔵文化財分布調査の成果を収録したものである。現地における分布調査は 4 年度にわたり、平成 19 年度は平成 19（2007）年 11 月 7 日から平成 20 年 2 月 29 日にかけて、平成 20 年度は平成 20（2008）年 5 月 20 日から同年 12 月 12 日、平成 21 年度は平成 21（2009）年 5 月 25 日から平成 21 年 1 月 25 日、平成 22 年度は平成 22（2010）年 8 月 24 日から平成 23 年 2 月 28 日にかけて実施した。
- 2 本分布調査は那覇空港拡張整備における埋蔵文化財の分布状況を把握するための予備調査で、国・県からの補助を受けて那覇市教育委員会が実施した。
- 3 本分布調査は、那覇市教育委員会の管理・指導のもと、調査現場での掘削・測量・写真撮影等の調査作業に伴う業務を民間発掘調査支援組織へ委託した。平成 19 年度は有限会社ティガネー、平成 20 年度は株式会社イーエーシー、平成 21 年度は株式会社パスコ沖縄支店、平成 22 年度は株式会社アーキジオ沖縄に各々委託し、分布調査業務の補助を受けた。
- 4 平成 19 年度より開始した那覇空港内大嶺地区埋蔵文化財分布調査に先立ち、字大嶺向上会及び字大嶺自治会の皆様より遺跡名について「字大嶺村」とご教示頂き使用してきたが、今回の報告書作成にあたり、文献資料では「大嶺村」「小禄間切大嶺村」「小禄村字大嶺」のみの確認であることから、遺跡名は「大嶺村跡」とすることにした。
- 5 この報告書では、大嶺村：王府時代～明治 41 年、字大嶺：明治 41 年～戦中、那覇飛行場：戦後～復帰、那覇空港：復帰後～現在と大きく 4 つに区分して使用している。なお、大嶺村～字大嶺に伴う遺構及び遺物包含層を「大嶺村跡」と捉えている。
- 6 本書に掲載した地形図及び試掘地点の座標値は世界測地系である。
- 7 巻首図版 1 及び第 7 図の空中写真（2010 年撮影）、図版 1・2 の 1945・1947・1977 年に米軍により撮影された空中写真は、国土地理院発行のものを複製して使用した。
- 8 第 2 図及び第 3 図は国土地理院により平成 21 年 11 月 1 日発行された那覇市地形図（25000 分の 1）を複製して使用した。
- 9 第 4 図は編集 那覇市企画文化振興課『那覇市史 通史篇 第 1 巻 前近代史』昭和 60 年 8 月の 25 ページを拡大加筆・トレースして作図したものである。

- 10 第 5 図は那覇市企画部市史編集室作成の『旧小禄の歴史・民俗地図』を縮小加筆したものである。
- 11 第 6 図は那覇市文化局歴史史料室作成の『小禄、垣花地区旧跡・歴史的地名地図』を縮小加筆したものである。
- 12 第 7 図は 2010 年撮影の大嶺地区に字大嶺向上会発行『大嶺の今昔』(2008) 付属資料の「昭和 16 年当時の字大嶺民俗地図」を重ねたものである。字大嶺向上会の皆様には掲載を許可して頂き、感謝申し上げます。また、他資料についても参考資料として掲載を快諾して頂いた。合わせて感謝申し上げます。なお、本図は考古・民俗学習に資するために作成したものであり、土地・境界・所有権等の諸問題とは一切の関わりを持たない。
- 13 第 19 図の遺跡の推定範囲については、試掘坑周辺 30m を調査成果の有効範囲として作成している。ただし、平成 21 年度に調査を行った 109・111・113 ラインの試掘坑については、周辺の状況から、60m を有効範囲とした。
- 14 第 20 図は「昭和 16 年当時の字大嶺民俗地図」と分布調査成果を重ねたものである。本図は考古・民俗学習に資するために作成したものであり、土地・境界・所有権等の諸問題とは一切の関わりを持たない。
- 15 分布調査で検出した各発掘坑での土層の色調に関しては、『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務所監修) に準拠し表記した。遺物の色調表記に関しても、『新版標準土色帖』を主に使用している。
- 16 本報告書の執筆・編集は、北條真子が行った。その際、島弘、仲宗根啓、當銘由嗣の助言・協力があった。記して感謝申し上げます。
- 17 おもに調査報告書の刊行を目的とした資料整理業務は、下記のメンバーで行った。
 - <平成 22 年度>
 - 宮城 舞子
 - <平成 23 年度>
 - 富里 歩美・平良 明子・仲井眞 美佐枝・宮城 みさこ・城間 孝子・高嶺 昌也
- 18 出土遺物の写真撮影及び図版データの編集作業は、富里 歩美・平良 明子・高嶺 昌也が行った。
- 19 出土遺物は、那覇市教育委員会文化財課で保管している。

目 次

序

例言

目次

挿図・挿表・図版 目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	4
第Ⅲ章 調査計画	16
第1節 調査目的	16
第2節 調査方法	16
第3節 調査組織	17
第Ⅳ章 調査経過	20
第Ⅴ章 調査成果	22
第1節 層序	22
第2節 遺構	33
第3節 遺物	89
第Ⅵ章 大嶺海岸踏査	124
第Ⅶ章 まとめ	127
報告書抄録	129

挿 図 目 次

第 1 図	那覇市の位置	2
第 2 図	大嶺村跡および那覇市内の遺跡	3
第 3 図	調査範囲図	5
第 4 図	那覇市の古海岸線	6
第 5 図	昭和初期頃の地図	7
第 6 図	昭和 10 年代(戦前)の地図	8
第 7 図	昭和 16 年当時の字大嶺民俗地図と 大嶺地区 (2010)	9
第 8 図	大嶺地区の地形測量図と 縦横断面位置図	12
第 9 図	A~I, Q, V ライン縦横断図	13
第 10 図	J~P, R~U ライン縦横断図	15
第 11 図	グリット設定図	16
第 12 図	調査予定箇所	21
第 13 図	土層堆積状況 (く~す)	23
第 14 図	土層堆積状況 (せ~た)	25
第 15 図	土層堆積状況 (ち~と)	27
第 16 図	土層堆積状況 (な~ね)	29
第 17 図	土層堆積状況 (の~ふ)	31
第 18 図	調査成果	34
第 19 図	遺跡の推定される範囲	35
第 20 図	昭和 16 年当時の字大嶺民俗地図と 調査成果	36
第 21 図	せ-96 出土遺物	39
第 22 図	た-96 出土遺物	42
第 23 図	て-105・106 口出土遺物 (1)	46
第 24 図	て-105・106 口出土遺物 (2)	47
第 25 図	と-98 出土遺物	50
第 26 図	に-96 出土遺物 (1)	55
第 27 図	に-96 出土遺物 (2)	56
第 28 図	那覇飛行場に係る出土遺物	84
第 29 図	中国産磁器・褐釉陶器・本土産磁器(1)	103

第 30 図	本土産磁器 (2)	104
第 31 図	本土産磁器 (3)	105
第 32 図	本土産磁器 (4)・本土産陶器	106
第 33 図	沖縄産施釉陶器 (1)	109
第 34 図	沖縄産施釉陶器 (2)	110
第 35 図	沖縄産施釉陶器 (3)	111
第 36 図	陶質土器	113
第 37 図	沖縄産無釉陶器 (1)	115
第 38 図	沖縄産無釉陶器 (2) 容器・銭貨	116
第 39 図	円盤状製品 (1)	118
第 40 図	プラスチック製品・木製品	122
第 41 図	青銅製品・貝製品	123
第 42 図	大嶺海岸踏査に伴う遺構・遺物等 プロット図	125
第 43 図	大嶺海岸表採敲石・磨石類	126
第 44 図	ボーリング位置図	128

挿 表 目 次

第 1 表	遺構一覧	33
第 2 表	せ-96 出土遺物観察一覧	39
第 3 表	た-96 出土遺物観察一覧	42
第 4 表	て-105・106 口出土遺物観察一覧	45
第 5 表	と-98 出土遺物観察一覧	50
第 6 表	に-96 出土遺物観察一覧	54
第 7 表	那覇飛行場に係る出土遺物 観察一覧	83
第 8 表	調査成果一覧	86
第 9 表	平成19年度出土遺物一覧	89
第 10 表	平成20年度出土遺物一覧	90
第 11 表	平成21年度出土遺物一覧	93
第 12 表	平成22年度出土遺物一覧	95
第 13 表	獣骨・魚骨・ウミガメ出土一覧	97
第 14 表	貝類出土一覧 (二枚貝)	98
第 15 表	貝類出土一覧 (巻貝)	99

第16表	貝類生息地別一覧	99	図版17	沖縄産施釉陶器(2)	110
第17表	中国産磁器観察一覧	100	図版18	沖縄産施釉陶器(3)	111
第18表	中国産褐釉陶器観察一覧	100	図版19	陶質土器	113
第19表	本土産磁器観察一覧	101	図版20	沖縄産無釉陶器(1)	115
第20表	本土産陶器観察一覧	102	図版21	沖縄産無釉陶器(2) 容器・銭貨	116
第21表	沖縄産施釉陶器観察一覧	107	図版22	円盤状製品(1)	118
第22表	陶質土器観察一覧	112	図版23	円盤状製品(2)	119
第23表	沖縄産無釉陶器観察一覧	114	図版24	円盤状製品(3)	120
第24表	容器観察一覧	114	図版25	プラスチック製品・木製品	122
第25表	銭貨観察一覧	114	図版26	青銅製品・貝製品	123
第26表	円盤状製品観察一覧	117	図版27	大嶺海岸のようす	124
第27表	プラスチック製品観察一覧	121	図版28	大嶺海岸表採敲石・磨石類	126
第28表	木製品観察一覧	121	図版29	ボーリング成果	129
第29表	青銅製品観察一覧	121			
第30表	貝製品観察一覧	121			

図 版 目 次

図版1	大嶺地区の変遷(1)	10
図版2	大嶺地区の変遷(2)	11
図版3	調査の流れ	18
図版4	せ-96 出土遺物	39
図版5	た-96 出土遺物	42
図版6	て-105・106 口土遺物(1)	46
図版7	て-105・106 口土遺物(2)	47
図版8	と-98 出土遺物	50
図版9	に-96 出土遺物(1)	55
図版10	に-96 出土遺物(2)	56
図版11	那覇飛行場に係る出土遺物	84
図版12	中国産磁器・褐釉陶器・本土産磁器(1)	103
図版13	本土産磁器(2)	104
図版14	本土産磁器(3)	105
図版15	本土産磁器(4)・本土産陶器	106
図版16	沖縄産施釉陶器(1)	109

第 I 章 調査に至る経緯

那覇空港は昭和 47 年に本土復帰するまでは米空軍・那覇航空隊と、復帰後は自衛隊と共用で使用されているが、航空需要の拡大に伴い、共用することの危険性が指摘されてきた。空港整備計画によって、急増する航空需要に対処するべく、空港基本施設の整備が着々と進められ、滑走路 2,700m から 3,000m の延長工事を昭和 57 年 10 月より着手し、昭和 61 年 3 月 13 日には滑走路 3,000m の供用を開始した。これに伴い沖縄県は昭和 55 年 8 月大那覇空港建設構想を運輸省に提出し、国際空港への格上げを計画した。この構想は沖合にもう 1 本の新滑走路を建設し、現在の空港を沖合に展開させる計画であった。その後は平成 14 年 12 月の交通政策審議会の答申において「主要地域拠点空港」として位置づけられるとともに「既存ストックの有効活用を図りつつ、滑走路増設等を含めた抜本的な空港能力の向上方策について、幅広い合意形成を図りながら、国と地域が連携し、総合的な調査を進める必要がある」ことが示された。そのため、国と沖縄県は那覇空港調査連絡調整会議を設置し、平成 15 年度より空港施設の有効活用方策や滑走路の増設の必要性について「那覇空港の総合的な調査」を進めている。

滑走路増設の検討にあたっては、事業着手後の手戻りが無いよう、周辺の環境、文化財等の状況を十分踏まえる必要があった。しかし、大嶺地区の文化財については、その特殊な歴史環境のため施政権返還時に現地踏査が実施された程度で、埋蔵文化財については所在が不明であり、参考とすべき資料がないのが現状であった。特に空港・自衛隊基地周辺は一般の立入りや開発が制限された地区であったため、これまで埋蔵文化財の照会がなされてこなかった。平成 20 年以降に予定された構想段階の絞込み作業においては、詳細な検討を行い、事業実施可能な案を選定していくことから、文化財についてもより詳細な情報が必要とされた。

平成 17 年 9 月 14 日那覇市教育委員会文化財課に那覇空港沖合展開に関する大嶺地区文化財調査への対応についてヒヤリングが行われた。その後、現地踏査を行い分布調査の期間・工程・調査方法等の検討を行い、調査期間は、5 ヶ年を予定し、1 年目から 4 年目までで現地調査を実施、2 年目から 5 年目までで資料整理・調査報告書を作成することが決定された。また、国土交通省及び防衛施設局との諸調整については沖縄県交通政策課が調整役となることが決定された。

なお、調査予定地に関する「発掘承諾書」については、那覇空港事務所からの承諾書を調査年度ごとに当教育委員会で収受している。

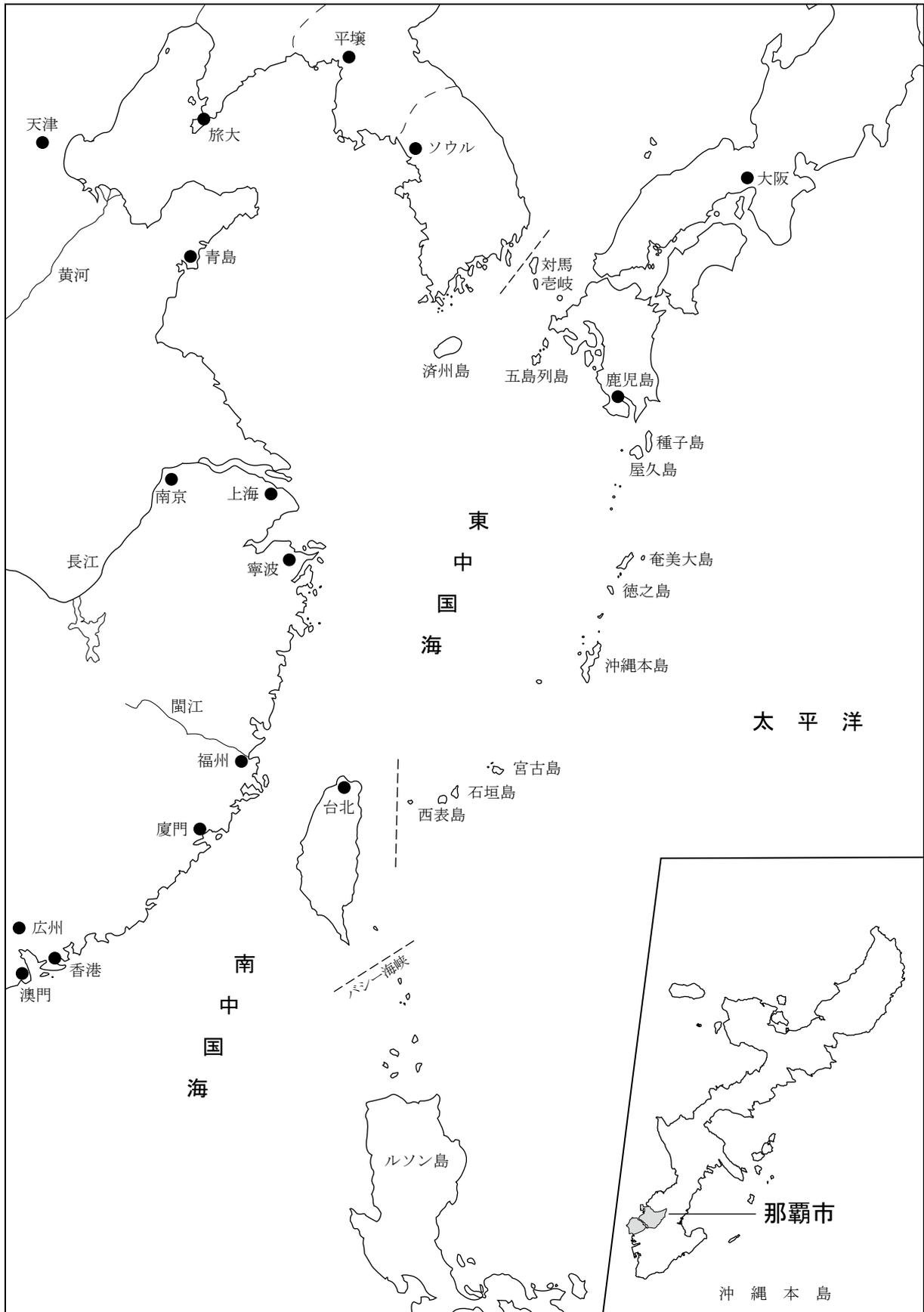
平成 19 年 12 月 12 日より調査を開始した。

《引用文献》

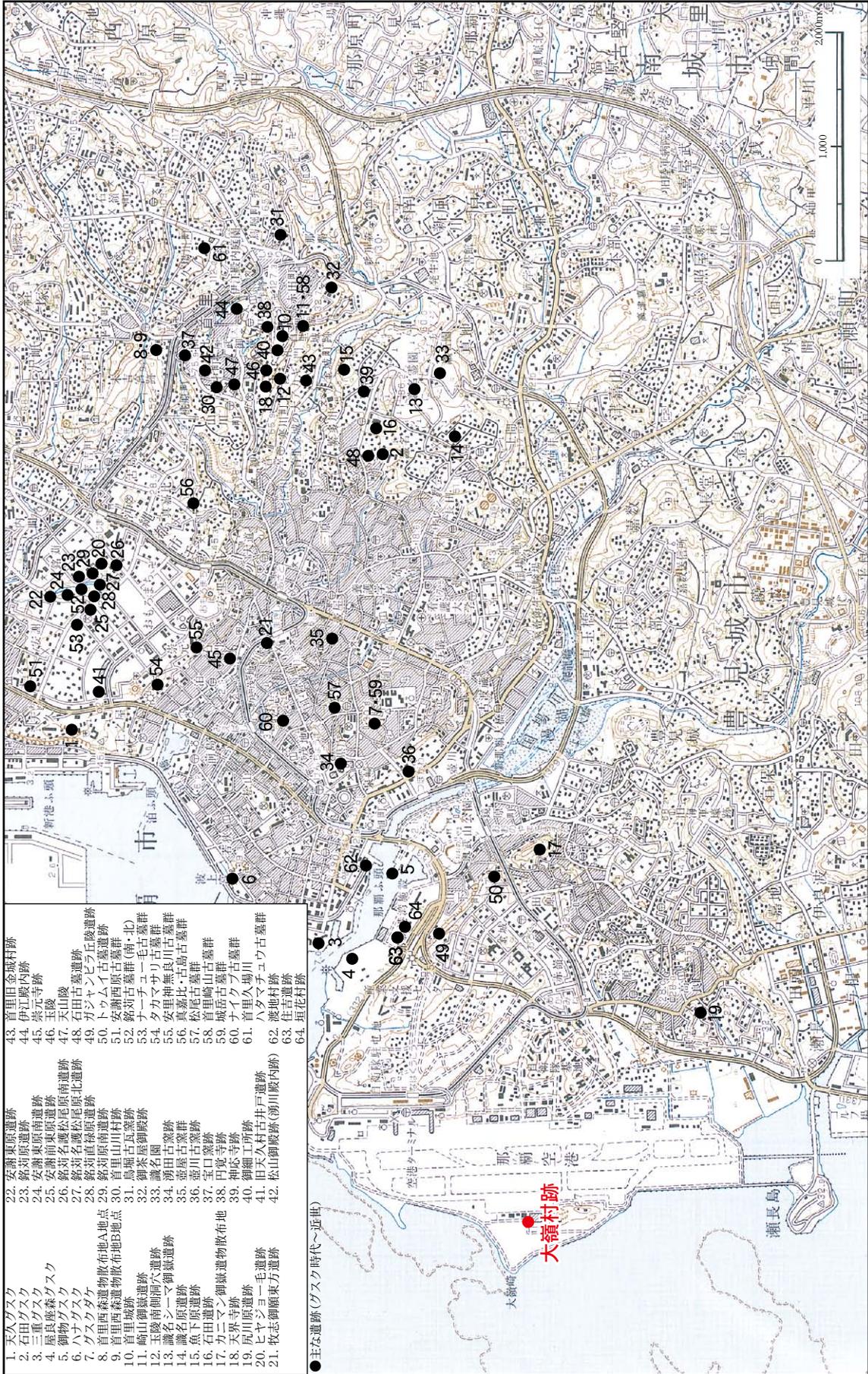
角川日本地名大辞典 47 沖縄県 1986 角川書店

那覇港湾・空港整備事務所 HP「空港の歴史」

那覇空港調査連絡調整会議「那覇空港の調査報告書」1～3 2005～2007



第1図 那覇市の位置



- 1. 天久ノクスク
- 2. 石田ノクスク
- 3. 三重ノクスク
- 4. 産良産森ノクスク
- 5. 御物ノクスク
- 6. ハナノクスク
- 7. ハナノクスクダケ
- 8. 首里西森遺物散布地A地点
- 9. 首里西森遺物散布地B地点
- 10. 嶋山御鋸遺跡
- 11. 嶋山御鋸遺跡
- 12. 玉陵南側内穴遺跡
- 13. 識名ノニヤ御鋸遺跡
- 14. 識名原遺跡
- 15. 識名原遺跡
- 16. 石田遺跡
- 17. カニマヤ跡
- 18. 天界寺跡
- 19. 房川原遺跡
- 20. ヒヤジョー毛遺跡
- 21. 牧志御鋸東方遺跡
- 22. 安謝東原遺跡
- 23. 銘苜原遺跡
- 24. 安謝前東原遺跡
- 25. 銘苜名護松原北遺跡
- 26. 銘苜名護松原南遺跡
- 27. 銘苜直線原遺跡
- 28. 銘苜原南遺跡
- 29. 銘苜山山ノ村遺跡
- 30. 首里山ノ村遺跡
- 31. 島原屋御鋸遺跡
- 32. 識名園
- 33. 勇田古窯跡
- 34. 勇田古窯跡
- 35. 壺屋古窯跡
- 36. 壺屋古窯跡
- 37. 壺屋古窯跡
- 38. 壺屋古窯跡
- 39. 神心寺跡
- 40. 御鋸工村古井戸遺跡
- 41. 田天人村古井戸遺跡
- 42. 松山御鋸跡(湧川内跡)
- 43. 首里旧金城村跡
- 44. 伊江殿内跡
- 45. 崇元寺跡
- 46. 玉陵
- 47. 天山陵
- 48. 石田古窯遺跡
- 49. ガジャンヒラ古窯遺跡
- 50. トウムイ古窯遺跡
- 51. 安謝西原古窯群
- 52. 銘苜古窯群
- 53. カカマナリ古窯群
- 54. 安里神無良川古窯群
- 55. 真嘉比古島古窯群
- 56. 真嘉比古島古窯群
- 57. 松尾山古窯群
- 58. 松尾山古窯群
- 59. 城岳古窯群
- 60. 首里久場川
- 61. ハタマチユウ古窯群
- 62. 渡地村跡
- 63. 住吉遺跡
- 64. 住吉村跡

第2図 大嶺村跡および那覇市内の遺跡

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

地理的環境 沖縄県那覇市は沖縄本島南部の西岸に位置し（第1図）、面積 38.99 平方km、総人口 319,589 人(2011 年 8 月末現在)を擁する県庁所在都市である。

位置 大嶺村は那覇市の最西端である大嶺崎周辺に所在し、集落の西側には格好の漁場となる遠浅の海が広がり、北側、南東側には肥沃な農地が広がる豊かな集落であった。

地質 那覇市は下位から上位へ島尻層群、琉球石灰岩、沖積層の3つの地層群から成り立っている。

那覇空港の東縁から国場川までの間には、鮮新・更新統島尻層群の泥岩・砂岩からなり、標高 10～40mの起伏をなす丘陵が広がる。その海側に広がる平坦な海岸低地では、現地地表下数m以浅に島尻層群の半固結泥岩・砂岩と琉球層群石灰岩が分布し、部分的には、海成段球面あるいは段丘化していない潮間帯の波食面など、12 万年前の最終間氷期と、縄文海進期（おそらく 7～8000 年前）以後に形成された地形面や最終氷期の開析谷が伏在し、海岸とその後背地のおもに砂質堆積物からなる薄い沖積層に覆われていると考えられる。大嶺崎付近では鮮新・更新統が地表下で認められ、縄文時代の海域拡大期には、低平な島状の地形をなしたと思われる。大嶺村跡の遺構をのせる沖積層は、おもに海浜の枝サンゴ片や貝殻片、細粒の砂からなるバックリーフ堆積物で、それらを基盤とする遺構検出面あるいは包含層直下では浜堤をなし、縄文海進以後の比較的新しい時期に形成されたようである。

歴史的環境 小禄間切は寛文十二年（1672）に真和志間切の小禄、儀間、金城の三ヶ村と豊見城間切の大嶺、赤嶺、安次嶺、当間、具志、高良、^{ツシ}卒宮城、宇栄原の八ヶ村の計十一ヶ村を小禄親方盛聖に賜ったのが始まりであった。小禄間切時代は農地で稲、雑穀（麦・粟等）、野菜等を栽培し、海で食用の魚介類や農作物の肥料となる海草やウニ類等を採って生活をしていた。大嶺村に関する最も古い記録は尚敬王年間の正徳三年（1713）の「琉球国由来記」の巻 12 である。大嶺村の土帝君・年中祭祀・御嶽について記載されている。明治四十年（1907）には島嶼町村制が発布され、小禄間切が小禄村に改称された。それまでの村は字となり、大嶺村は字大嶺となった。小禄間切時代から小禄村時代の初期にかけては砂糖製造、野菜栽培、漁業、織物・帽子編み業で換金し、日常の食生活はサツマイモと魚介類でまかっていた。

大嶺崎周辺は大嶺平野と呼ばれているほどの平坦地であり、西側には埋土として最適な砂丘があったため、昭和 6 年 8 月 17 日測量用地の赤旗が立てられ旧日本海軍による飛行場建設の測量が始まった。これが旧日本軍による農地接收の始まりである。昭和 8 年には「小禄海軍飛行場」として建設され、同 10 年 6 月 1 日からは逓信省航空部管理の「那覇飛行場」となり内臺航空路として本土と台湾を結ぶ中継基地として整備拡張された。この時期は軍民共同で使用されていたが、同 17 年には戦局に合わせて飛行場の拡張工事が行われ、海軍輸送部管理の「海軍小禄飛行場」となった。昭和 18 年には国家総動員法により字大嶺一帯が接收され「小禄海軍飛行場」として拡張された。字大嶺では合計 5 回の土地の接收を受け、その面積は 22 万坪以上となった。

1945 年 3 月 26 日「米国海軍軍政府布告第 1 号」が公布され、それ以来沖縄では米軍の占領状態が続く。旧日本軍に接收された土地は日本国有地として米国民政府琉球財産管理官事務所の管理するところとなり、米空軍・那覇航空隊管理「那覇飛行場」として大々的に拡張整備された。

1972 年 5 月 15 日、沖縄の本土復帰にともない、飛行場は長い間の米軍管理の手を離れて、運輸省所管の

第二種空港に指定（運輸省告示 236 号）され、名称も「那覇空港」と改められると同時に整備拡充が行われたが、現在においても住民の立入りは制限されている。

・小禄海軍飛行場

1945 年 1 月の航空写真（図版 1）より当時の大嶺地区を確認してみると、日本軍のものと見られる 3 本の滑走路とそれに付随する誘導路や駐機場が確認できる。大嶺村のあったとされる部分を拡大してみると、画像は判然としませんが、村落部分や南側の畑部分などはその存在が確認できる。

・那覇飛行場時代

1945 年 12 月の航空写真（図版 1）を見てみると南北方向（現在の空港滑走路の方向軸）に滑走路が 1 本整備され、大嶺崎に斜めに走っていた滑走路は駐機場や倉庫として使用されているようである。村落部分は削平もしくは盛土され、平坦に整地されているようである。

1947 年 5 月の航空写真（図版 2）では滑走路や駐機場などの施設部分は白く、1945 年 12 月の段階で何らかの施設が建設されていなかった部分は黒く写っているようである。使用頻度が低い部分は草木の繁茂が起こったのかもしれない。村落部分を拡大してみると、1945 年 12 月の整地が行われた部分は何本かの道路のような白い部分を確認できるが、そのほかは黒く写っている。整地はされたがそれほど使用頻度は高くはなかったかもしれない。

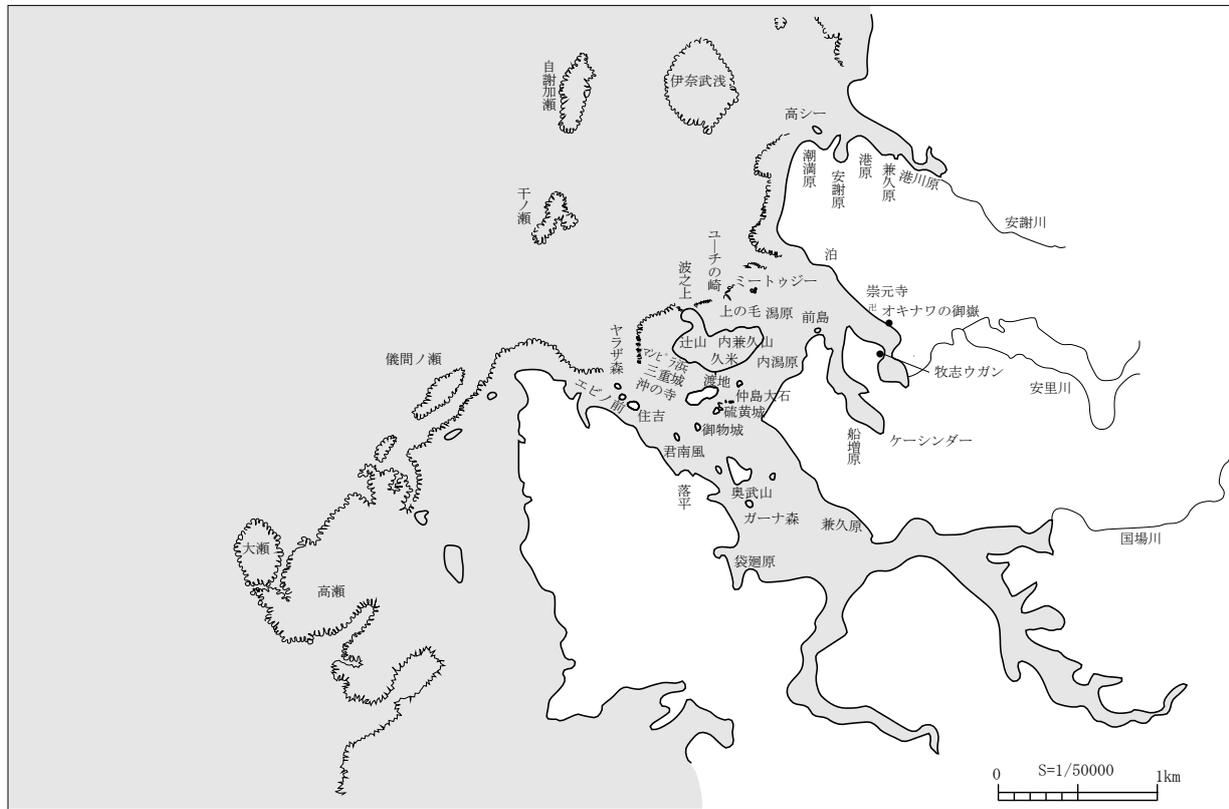
・本土復帰後

1977 年の航空写真（図版 2）では駐機場が東側に整備され（写真平面観で凸状）、上ヌモー（現在の航空自衛隊施設地）にも新しい設備が整備されている。村落部分は平地で土や礫が置かれている。

2010 年の空中写真（巻首図版 1）では、東側の駐機場は無くなり、新しい施設が整備されている。村落部分は高さ 15m 程の盛土に覆われ草木が繁茂している（地形測量図（第 9-10 図））。



第 3 図 調査範囲図



第4図 那覇の古海岸線 (上：1700年頃・下：1451年以前)



第5図 昭和初期頃の地図



第 6 図 昭和10年代(戦前)の地図



第7図 昭和16年当時の字大嶺民俗地図と大嶺地区 (2010)



図版1 大嶺地区の変遷(1)



1947. 5. 12



1947. 5. 12 拡大

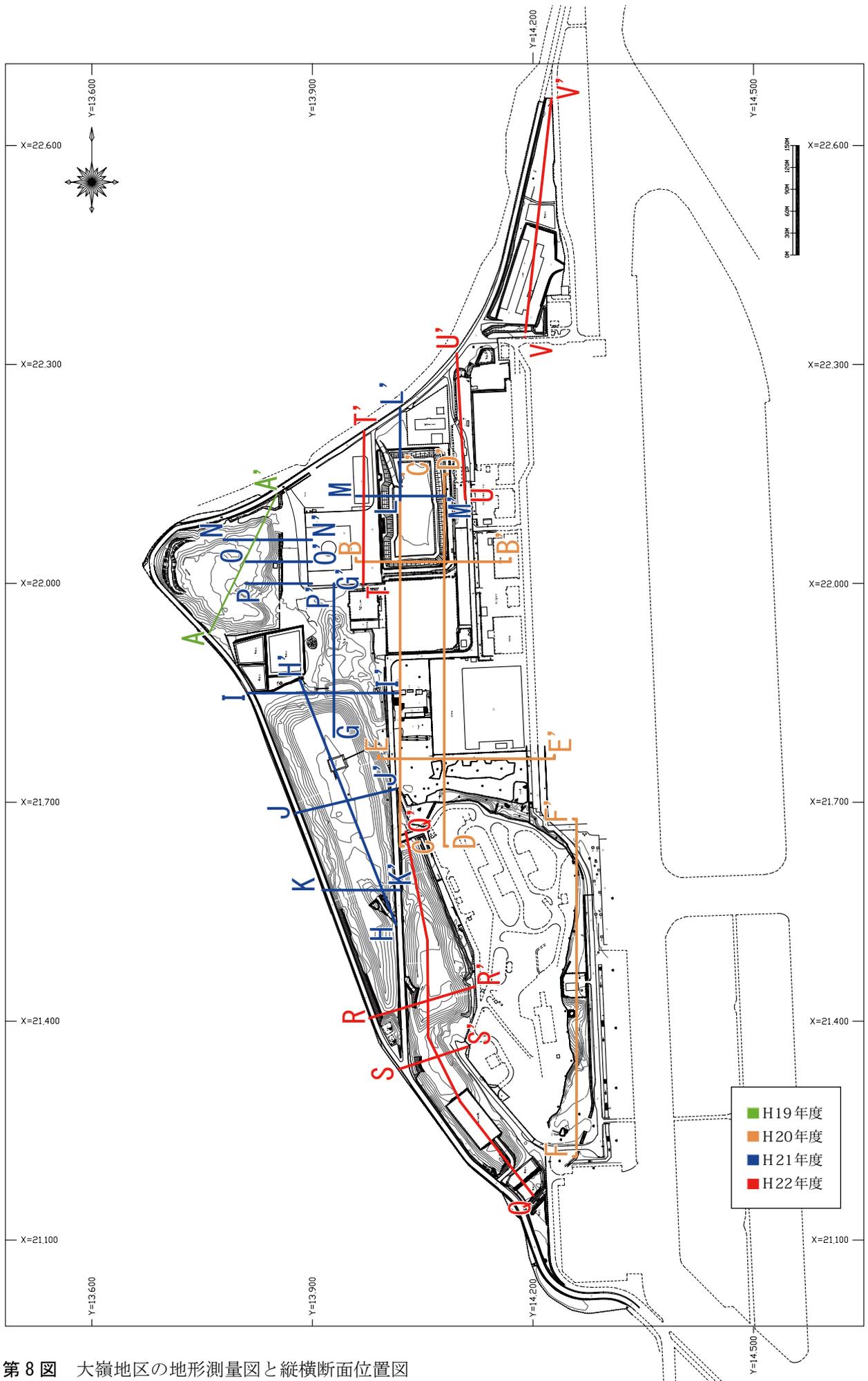


米軍作成の地形図 (1948)

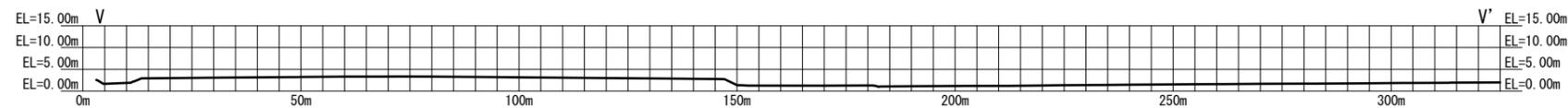
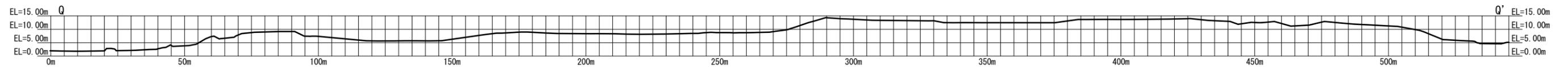
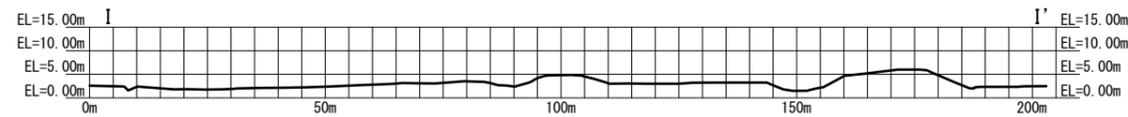
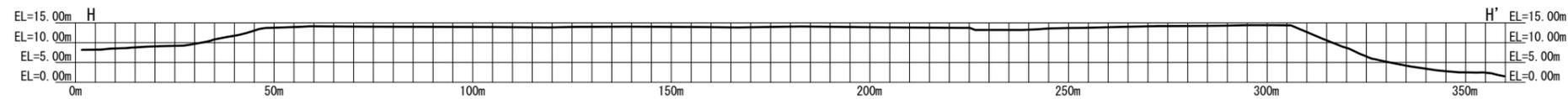
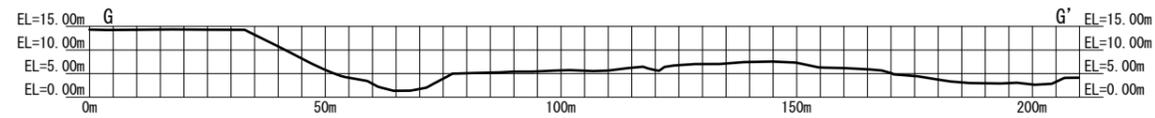
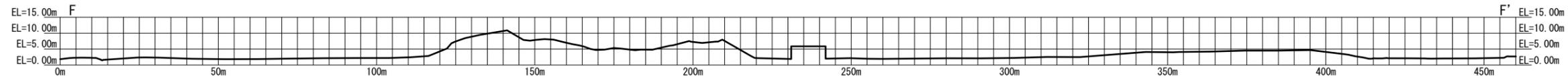
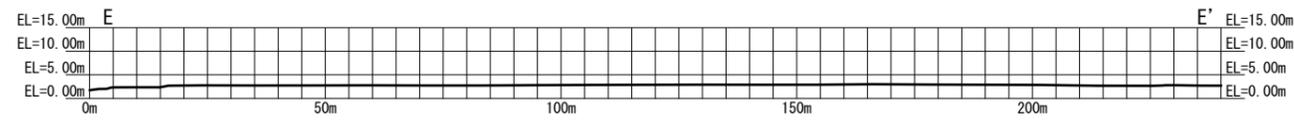
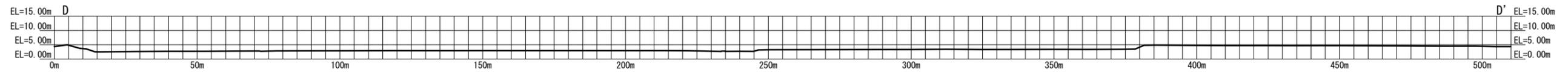
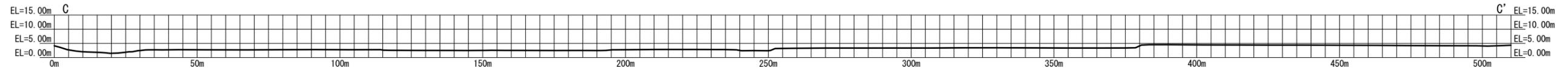
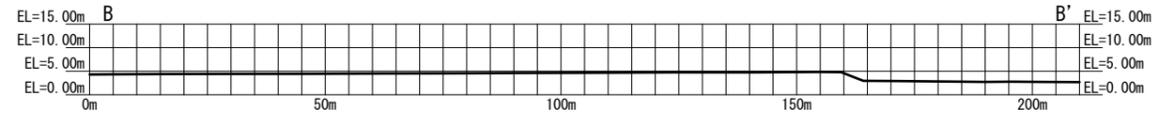
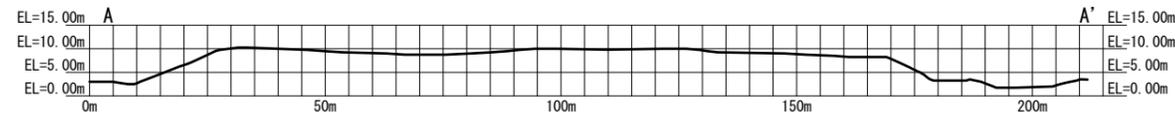


1977. 12. 23

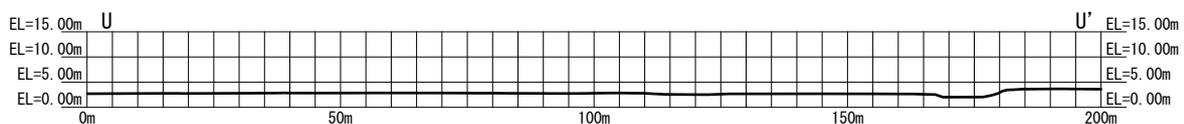
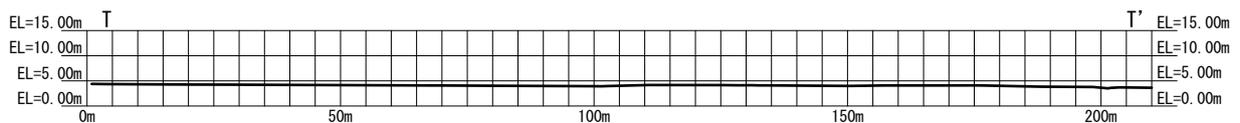
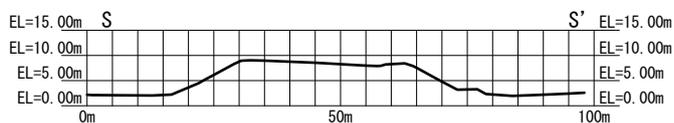
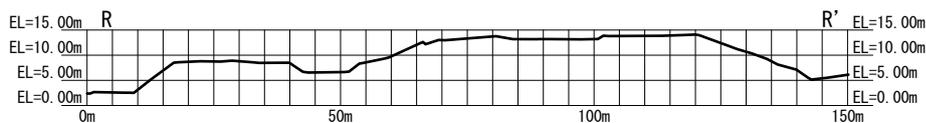
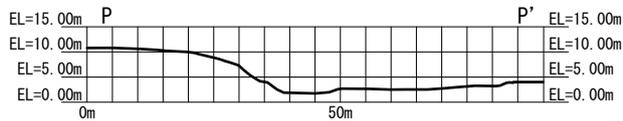
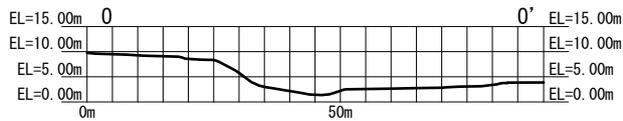
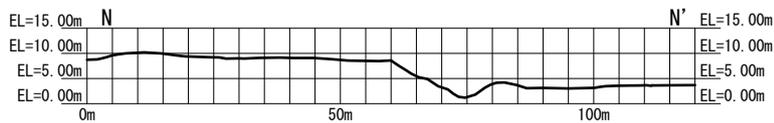
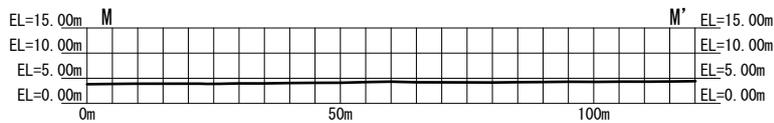
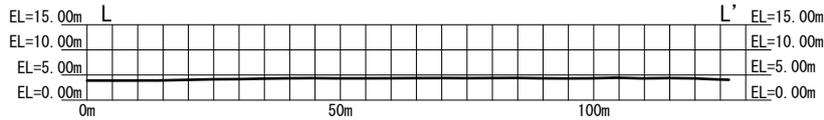
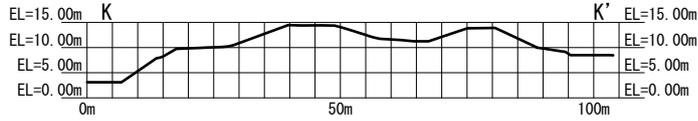
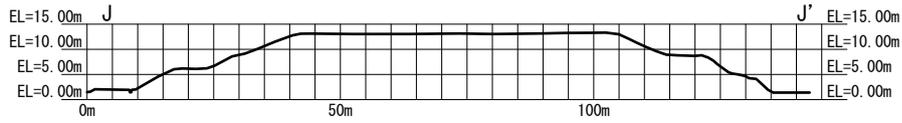
図版 2 大嶺地区の変遷 (2)



第 8 図 大嶺地区の地形測量図と縦横断面位置図



第9図 A～I, Q, Vライン縦横断面図



第 10 図 J ~ P, R ~ U ライン縦横断図

第Ⅲ章 調査計画

第1節 調査目的

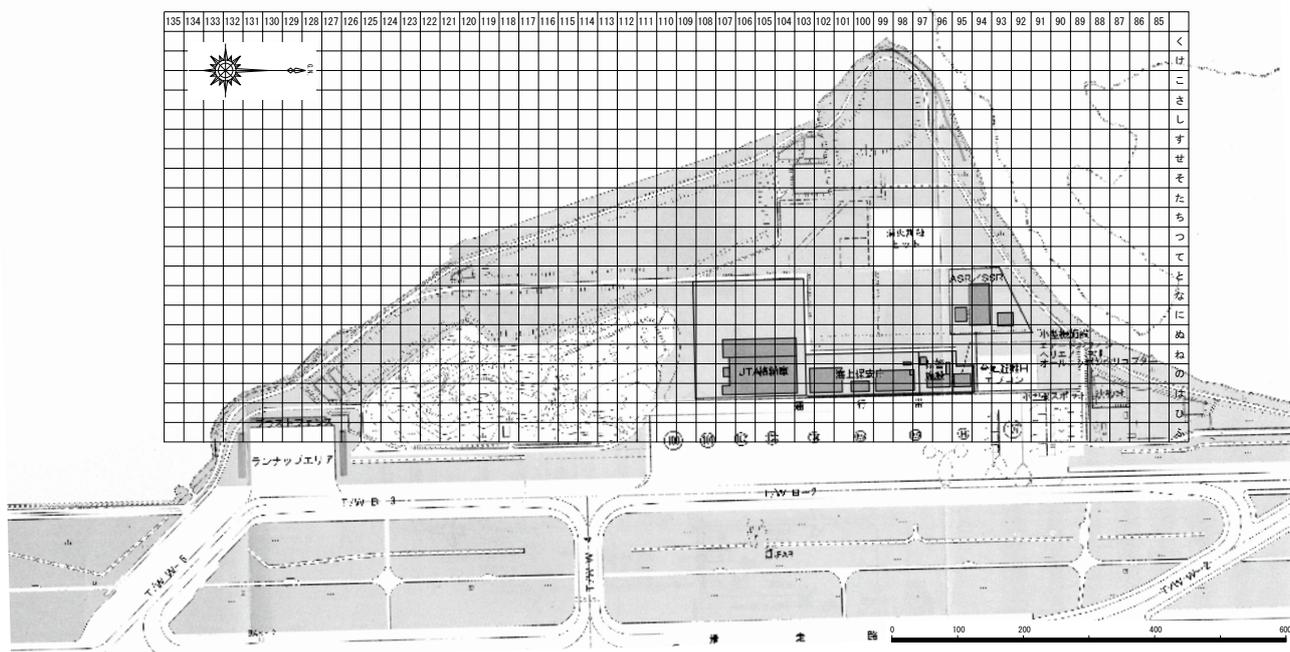
那覇空港内大嶺地区埋蔵文化財分布調査は那覇空港拡張整備における埋蔵文化財の分布状況を把握するための予備調査である。試掘調査により遺跡の詳細な分布状況を明らかにし、当該地域における埋蔵文化財の保護のための資料を作成する事を大きな目的とし、合わせて埋蔵文化財の基本的な所在を把握することで予定されている那覇空港拡張整備の事業計画を円滑に進めようとするものである。

第2節 調査方法

那覇空港大嶺地区（西側管理区域）を30mメッシュで区切り、その交点に試掘坑を設定することとした（第11図）。西から東に向けてく～ふ、北～南に向けて85～135の番号をふり、試掘坑は原則30mメッシュ交点を基準に南東側に設定した。ただし、埋設物や障害物の有る場合など、状況に応じて位置をずらした。また、試掘坑の大きさは底面が2m×3mになるように、現地表面の標高に応じて2m×3m、3m×4m、20m×20m、30m×30mの規格で設定した。

掘削は基本的には表層から基盤層まで行うが、遺構等が確認された場合には、そこで調査は終了することとし、調査を開始した。まず掘削作業に先立ち磁気探査を行い、異常点や埋設物の有無を確認した後、重機により戦後の造成土を除去した。磁気探査は掘削深度1mごとに行った。その後、土層の堆積状況や遺構・遺物検出に注意を払いながら重機及び人力による掘削を行った。

遺構か遺物包含層が検出された時点で壁面と床面を清掃し、図化及び写真撮影による記録作業を行った。図化は基本的に写真測量にて行ったが、状況に合わせて実測作業も行った。また、崩落の危険のあ



第11図 グリット設定図

る試掘坑や盛土のみの試掘坑などについてはトータルステーションを用いての測量を行った。試掘坑は当日中に埋め戻す事が原則であったため、1日に調査できるのは平均2箇所であった。

図版3では調査の流れを紹介する。

第3節 調査組織

本遺跡の調査組織は、次のとおりである。

調査責任者	那覇市教育委員会	教 育 長	桃原 致上 (平成18年度～)
〃	〃	〃	城間 幹子 (平成22年度～)
調 査 総 括	那覇市教育委員会文化財課	課 長	古塚 達朗 (平成15年度～)
調 査 事 務	那覇市教育委員会文化財課	副 参 事	島 弘 (平成19年度～)
〃	〃	主 幹	田端 睦子 (平成20年度)
調 査 事 務	那覇市教育委員会文化財課	主 幹	内間 靖 (平成21年度～)
調 査 事 務	那覇市教育委員会文化財課	主 査	田端 睦子 (平成19年度)
〃	〃	〃	會澤 一大 (平成23年度～)
〃	〃	主任主事	赤嶺 増美 (平成19年度)
〃	〃	〃	仲宗根 健 (平成21年度～)
〃	〃	主 事	新里真知子 (平成20年度)
調 査 員	〃	専門員主査	玉城 安明 (平成19年度～)
〃	〃	〃	北條 真子 (平成19年度～)
〃	〃	主任専門員	仲宗根 啓 (平成19年度～)
〃	〃	〃	樋口 麻子 (平成19年度～)
〃	〃	〃	當銘 由嗣 (平成19年度～)
〃	〃	専 門 員	知念 政樹 (平成18年度～)

平成19年度分布調査支援組織〔有限会社 ティガナー〕

照屋 吉光 (代表取締役) 川端 博明 (調査員) 東當 美和 (調査補助員)

平成20年度分布調査支援組織〔株式会社 イーエーシー〕

大石 哲也 (代表取締役) 赤嶺 信哉 (調査員) 山城 直子、喜納 政英、菊池 恒三 (調査補助員)

平成21年度分布調査支援組織〔株式会社パスコ沖縄支店〕

池内 浩見 (支店長) 木口 裕史 (調査員) 松本 拓 (調査補助員)

平成22年度分布調査支援組織〔株式会社アーキジオ沖縄〕

細川 俊之 (所長) 天久 朝海 (調査員) 本村 麻里衣 (調査補助員)



調査開始に先立ち安全祈願を行う



試掘坑の設定後、磁気探査を行い、
重機による掘削を開始する



旧表土確認後、試掘坑の設定を行う場合もある



試掘調査と並行して地形測量を行う



図面に記載されていなかった埋設管検出の際には、
那覇空港事務所の立会のもと、その取扱いに
ついて協議を行う



台風前には伐採樹木の飛散等を防止するために
対策を行った

図版 3 調査の流れ



重機掘削後、人力による精査を行い、遺構の有無を確認する



土層堆積状況及び遺構の実測作業を行う



土層堆積状況及び遺構の写真測量及び撮影



埋め戻し作業（30cmごとに輾転を行う）



調査終了時には種子吹き付けによる赤土流出防止対策を行う



調査終了後には、宇大嶺自治会にて調査報告会を開催した

図版 3 調査の流れ

第IV章 調査経過

調査実施年度における作業過程を以下に述べる。

平成 19 (2007) 年度

分布調査初年度は9月3日の沖縄県交通政策課との調整に始まり、その後の現場踏査、調査箇所を選定、那覇空港内立入り申請（工事用腕章及び那覇空港西側管理区域工事用立入運行証）手続き、那覇空港事務所との調整（発掘承諾書及び現場事務所の設置申請）等を経て、現地調査は12月12日に開始した。大嶺崎周辺の17箇所で分布調査を行った。調査開始に合わせて、字大嶺向上会、字大嶺那覇空港拡張整備に関する地域対策協議会あて分布調査開始を連絡した。予定していた分布調査だけでなく、大嶺海岸踏査や基盤層確認のため急遽ボーリング調査等も取り入れながら、平成20年2月6日に現地調査を終了した。戦前の生活層と小禄海軍飛行場の一部を確認した。

平成 20 (2008) 年度

平成20年度は前年度末に大阪航空局より制限区域内における消防車庫新築工事に伴う「埋蔵文化財事前審査願」が提出された事から、分布調査箇所を制限区域内まで広げた。そのため、那覇空港の立ち入りに際して、前年度の手続きに加え、新たに那覇空港西側管理区域立入承認証・工事用車輛標識旗の申請が必要となった。また、調査開始前には調査範囲に所在する各事業者（航空自衛隊、沖縄総合事務局、海上保安庁、警察航空隊、JTA、那覇空港事務所関係各課等）に向けて工事説明会を行い、航空管制運行情報官による安全講習会も受講した。現地調査は7月2日に開始し9月12日まで那覇空港大嶺地区の中央部分を中心に52箇所で分布調査を行った。那覇飛行場の駐機場の一部と戦前のピットを確認した。調査終了後の平成21年2月7日には字大嶺自治会館において分布調査報告会を行った。

平成 21 (2009) 年度

平成21年度も大阪航空局より那覇空港拡張整備の施設計画に伴い分布調査地区について要望があったことから、当初の予定箇所を変更して調査箇所を設定した。また、那覇空港事務所より分布調査に伴う伐採樹木の場合持ち出しと埋め戻し後の種子吹き付けの指示があったため、再度調査箇所の変更を行った。当該年度からは調査範囲が1,000㎡を超す事から、沖縄県中央保健所に赤土流出防止対策計画書を提出し、承認を待った。那覇空港内立入り申請手続き、那覇空港事務所との調整等を経て、6月26日に西側地区事業者に対する工事説明会を行い、現地調査は7月6日に開始した。西側管理区域の盛土部分の調査箇所を減らして、周辺部を中心に52箇所で分布調査を行った。戦前の耕作痕を伴う植栽痕を確認した。

平成 22 (2010) 年度

平成22年度は調査範囲が6,120㎡であった。平成22年4月より土壤汚染対策法についての改正があり、3000㎡以上の土地の形質変更には申請が必要（掘削面積の合計ではなく、調査範囲が対象となる）となったため、赤土流出防止対策計画書に合わせて、一定規模以上の土地の形質の変更届出書を沖縄県中央保健所に提出した。提出後1ヶ月は申請地において掘削作業は認められないので、その間、調査範囲の伐採や測量を行った。那覇空港内立入り申請手続き、那覇空港事務所との調整等を経て、9月16日に那覇空港西側管理区域所在の事業者を対象とした工事説明会を行い、11月2日より現地調査を開始した。航空自衛隊周辺部分と誘導路設置予定箇所を中心に83箇所で分布調査を行い、12月18日に終了した。



第 12 図 調査予定箇所

第V章 調査成果

第1節 層序

今回の分布調査は調査範囲が広く、また、試掘坑は原則 30m 間隔に設置することから、調査区全体による層序の検討、統一を行うことは困難と考え、調査にあたっては各試掘坑で分層し、上から順に 1 層、2 層、3 層…と算用数字で表記し所見を記載する方法をとった。しかし、多くの試掘坑で出土遺物や土層確認レベル等、近隣の試掘坑との比較により、ある程度の時期を想定することができる土層が計 4 枚（Ⅰ～Ⅳ層）確認できた。そのため今回は算用数字で記載した各試掘坑の層序とは別に時期や統一堆積層として検討できた層序を基本土層としてローマ数字で記載する。なお、今回の調査では先史時代からグスク時代までの遺構・遺物包含層は確認されていないことから基本土層では割愛した。第 13～17 図では各試掘坑で検出された土層の堆積状況を西から東（く～ふ）、南から北（132～80）の順で図示した。特に遺物包含層のみが確認できた試掘坑については p60 から土層の堆積状況について詳細に述べている。

以下、基本土層の特徴について記す。

基本土層

Ⅰ層：現代の盛土・造成土・表土

昭和 47（1972）年の日本復帰から現在の表土の土層。那覇空港拡張時の造成土や新ターミナル建設時の盛土が相当する。ニービとクチャの混成土やコンクリートやアスファルトの瓦礫が多く混じった攪乱土、路盤材や輾転土等が確認された。

Ⅱ層：那覇飛行場時代の造成土（戦後～1972 年）

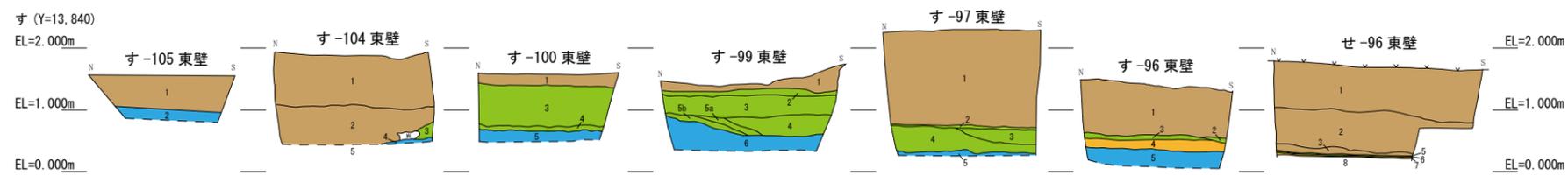
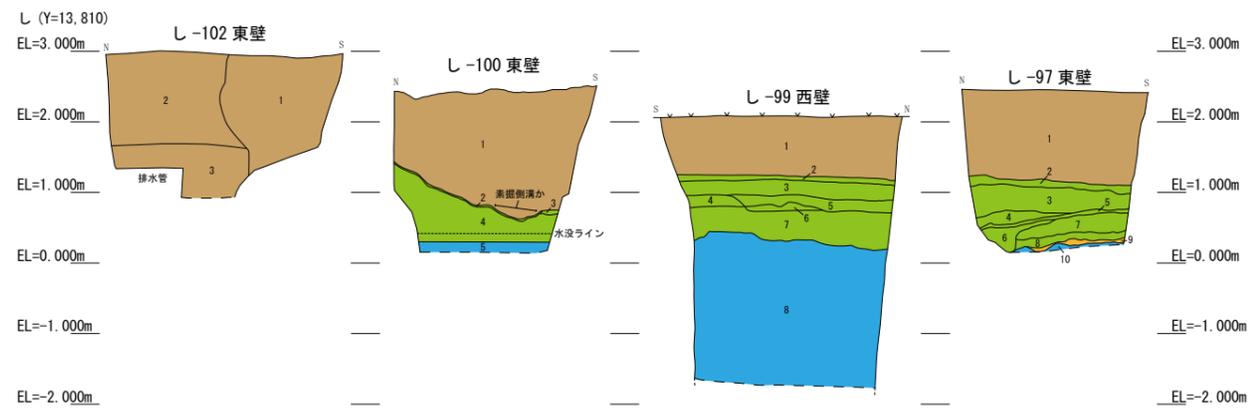
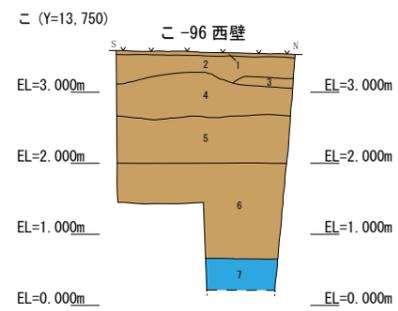
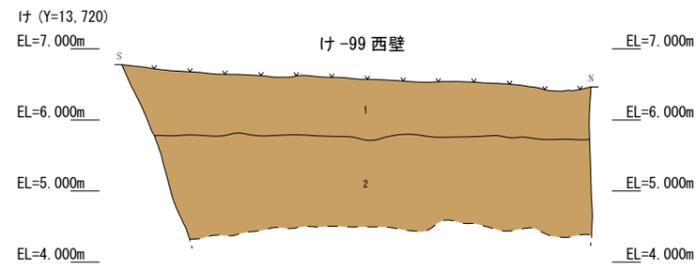
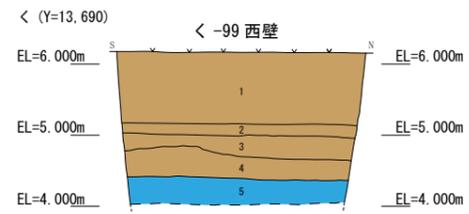
主に米軍国空軍・那覇航空隊共同管理時代の土層である。那覇飛行場時代にタールを塗布して表面を塗り固めた表土、駐機場として使用していた際の建築物であったコンクリートやアスファルトの層、路盤材として使用されたクラッシャー、コーラルの層、人頭大の礫を補強材として敷き詰めた層、「大嶺村」の土層が移動されて堆積した層等が確認された。

Ⅲ層：遺物包含層（近世～戦中（小禄海軍飛行場含む））

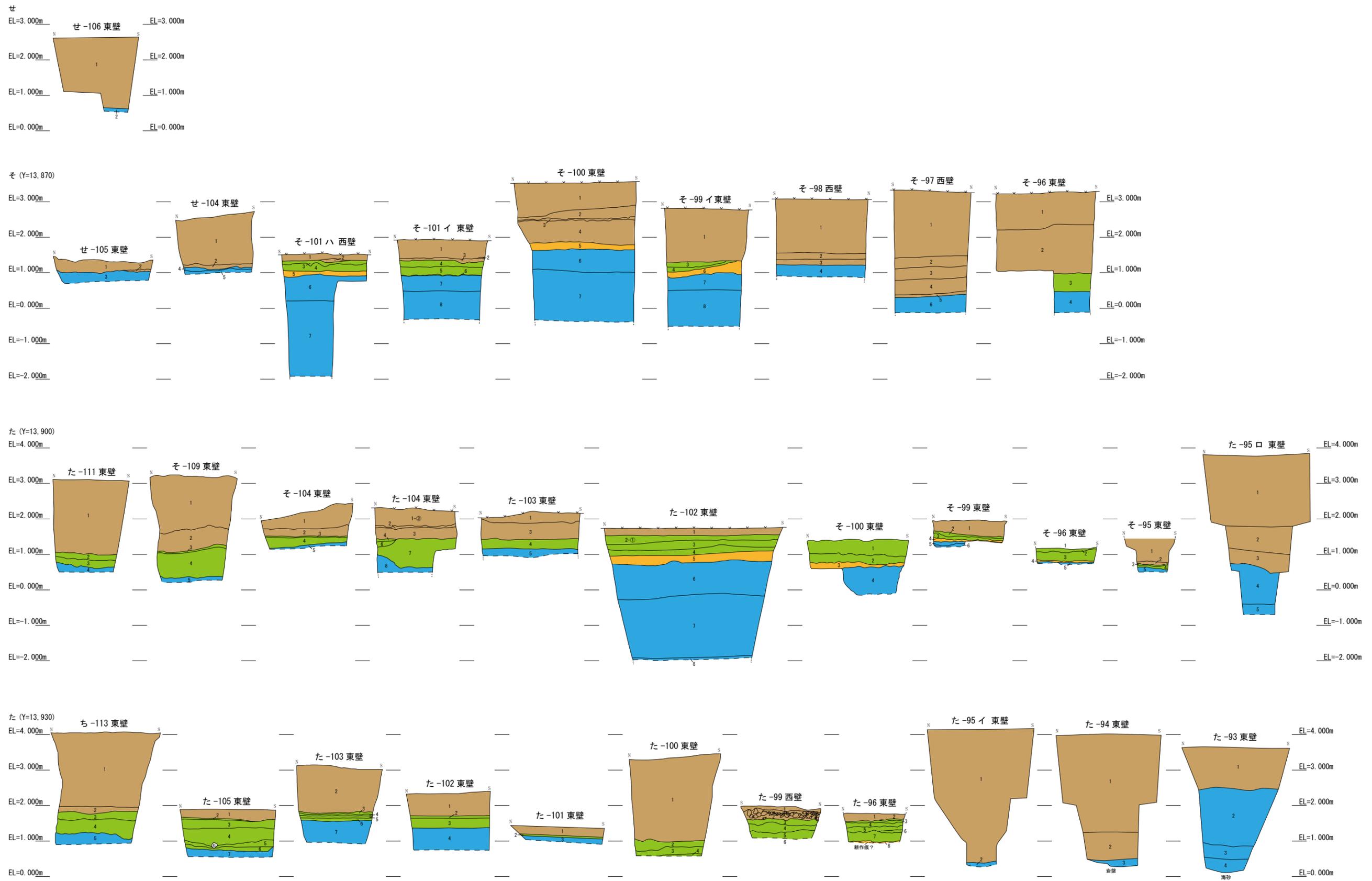
有機物による黒色化が見られ、大嶺村～字大嶺に由来する遺物を包含し、しまりがあり、後世の影響を受けていないと思われる堆積層を遺物包含層として扱った。遺物包含層上面是那覇飛行場の造成で削平されていると考えられ、明確な層厚は不明である。また、この時代の遺構としてピットと耕作痕・植栽痕と思われるシミ状の堆積が検出できた。小禄海軍飛行場に伴う遺構も含める。

Ⅳ層：地山（海浜砂・岩盤・ビーチロック・ニービ・クチャ）

自然堆積層。海浜の砂層で混入物があまりみられないさらさらした砂、サンゴ礫や貝を多く含む砂が確認されている。色調は概ね明黄褐色、灰色をなす。

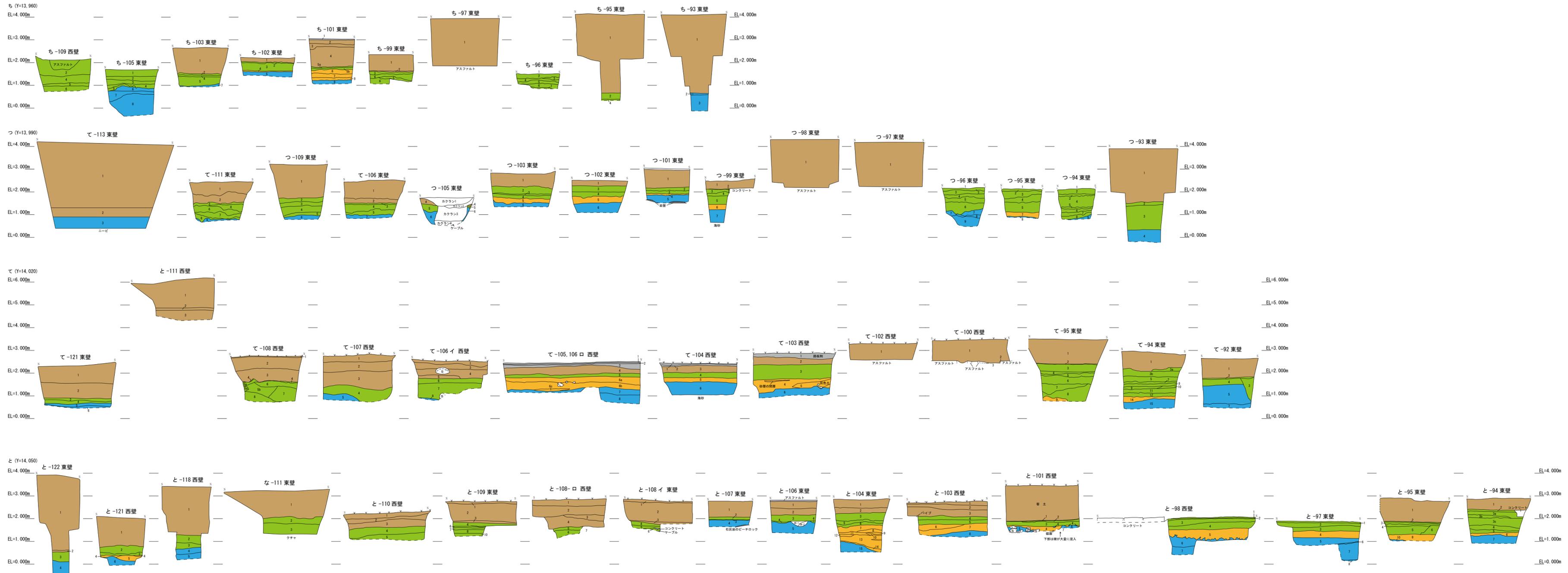


第 13 図 土層堆積状況 (く～す)

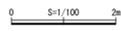
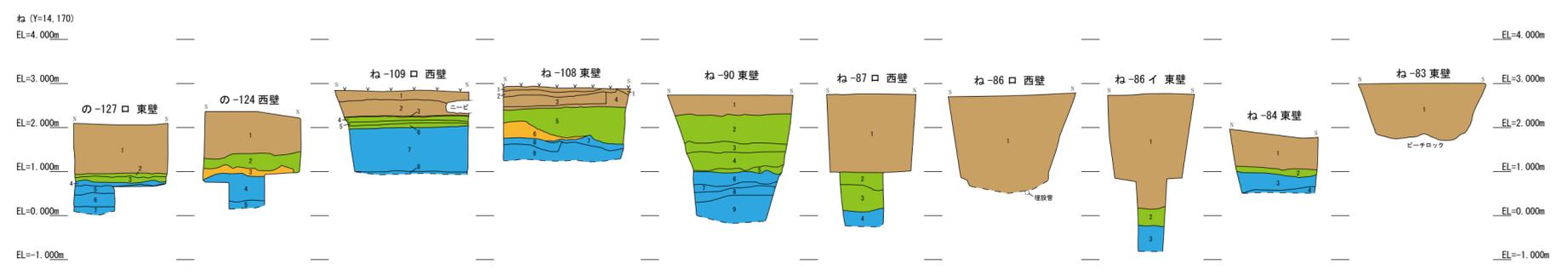
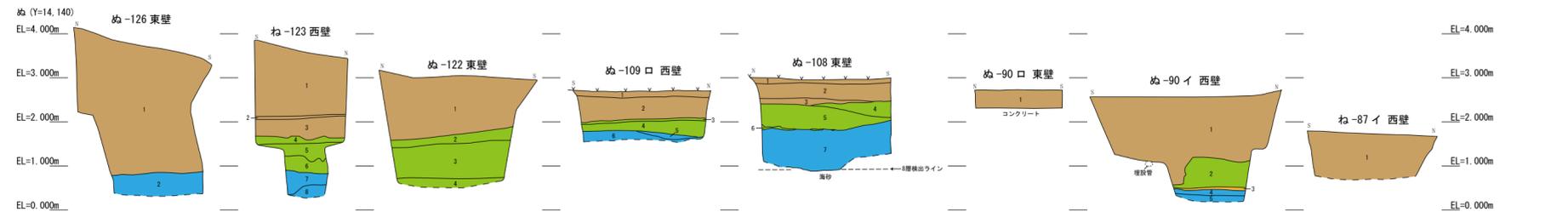
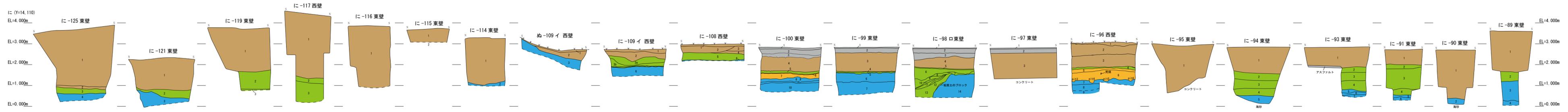
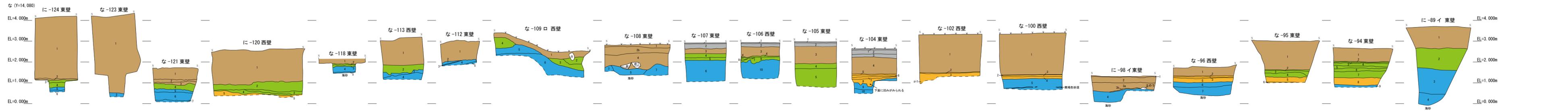


第14図 土層堆積状況(せ～た)

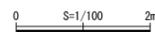
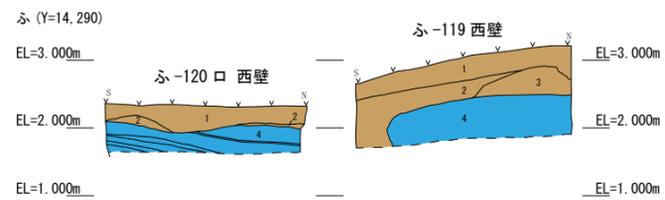
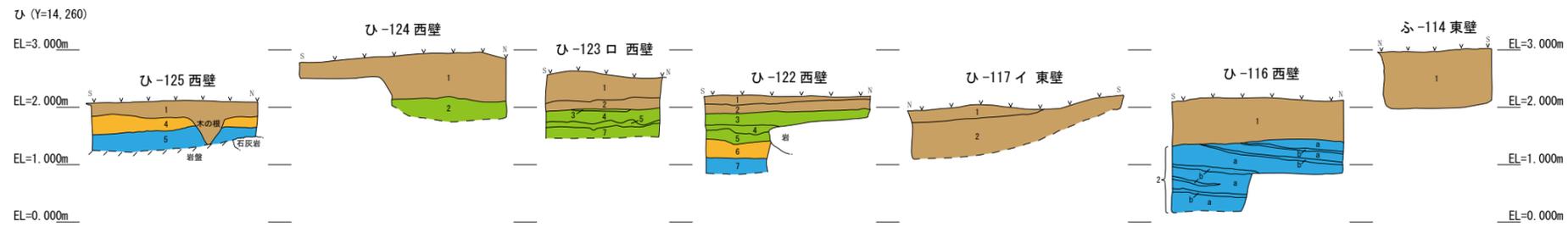
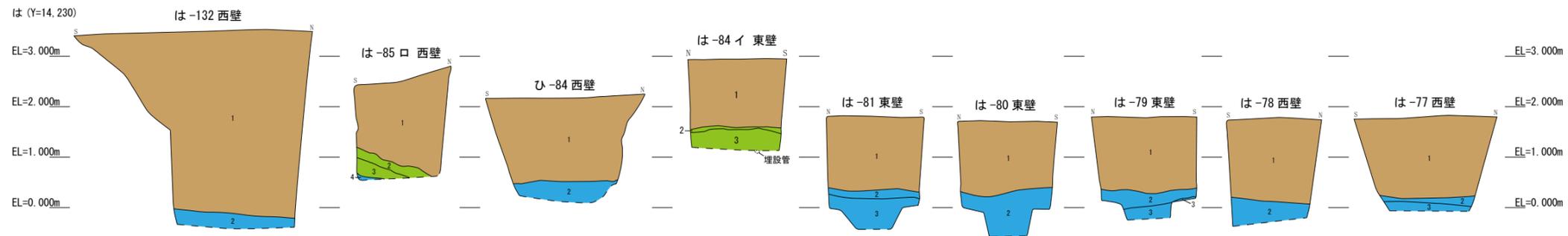
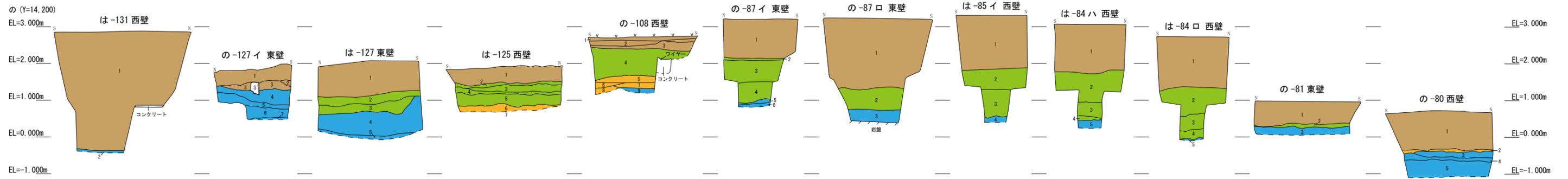
0 1/100 2m



第 15 図 土層堆積状況 (ち〜と)



第 16 図 土層堆積状況 (な～ね)



第 17 図 土層堆積状況 (の～ふ)

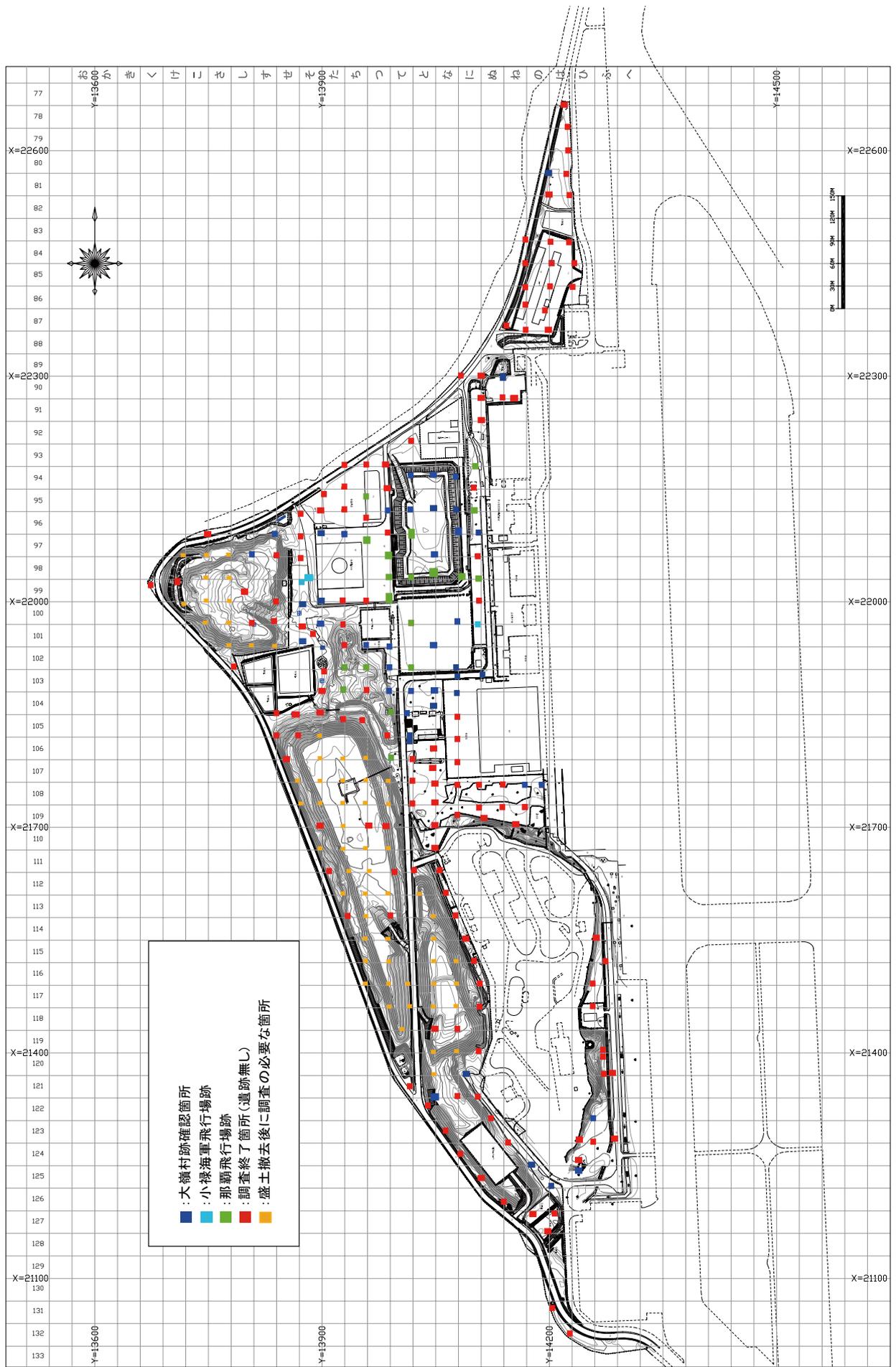
第2節 遺構

今回の調査では、第1表に示したとおり、大嶺村～字大嶺の遺構や遺物包含層（大嶺村跡）に係る試掘坑：50、小祿海軍飛行場に係る試掘坑：3、那覇飛行場に係る試掘坑：18を確認した。第18図は試掘坑ごとの結果を図示し、第19図では遺跡の広がる可能性のある範囲を示した。現在のところ大嶺村跡は大嶺地区の中心部より北側に広がるようである。また第20図では調査結果と昭和16年当時の字大嶺民俗地区とを重ねることで、今回の調査で検出した耕作痕及び植栽痕は畑の広がる場所である事、また、ピットや石列は家屋に伴う可能性がある事が確認できた。

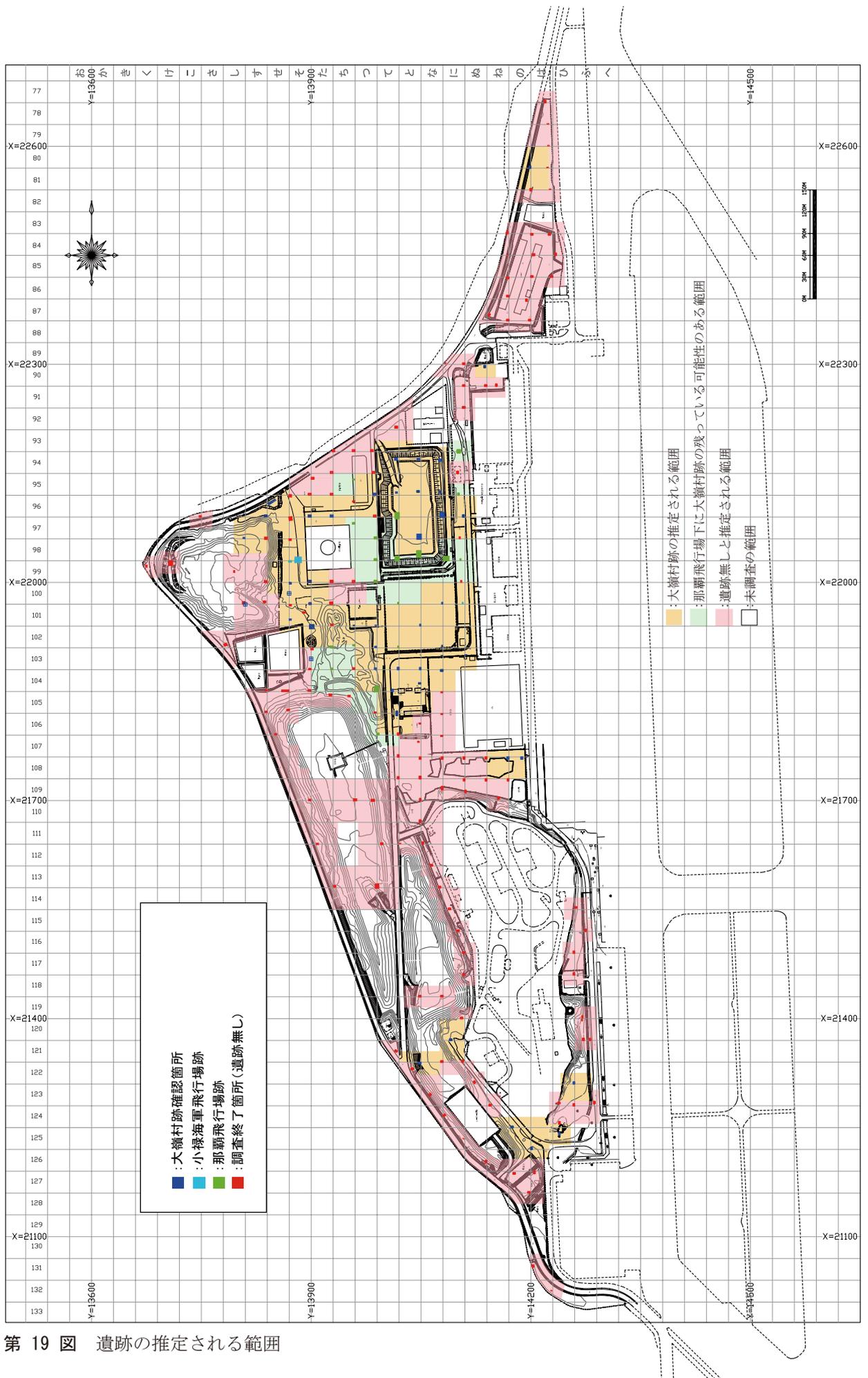
ここからは大嶺村～字大嶺の遺構が検出された試掘坑ごとに位置図・遺構検出状況・土層堆積状況・出土遺物を合わせて紹介する。続いて大嶺村～字大嶺の遺物包含層の確認できた試掘坑について土層堆積状況、小祿海軍飛行場に係る遺構、那覇飛行場に係る遺構の様子を紹介する。

第1表 遺構一覧

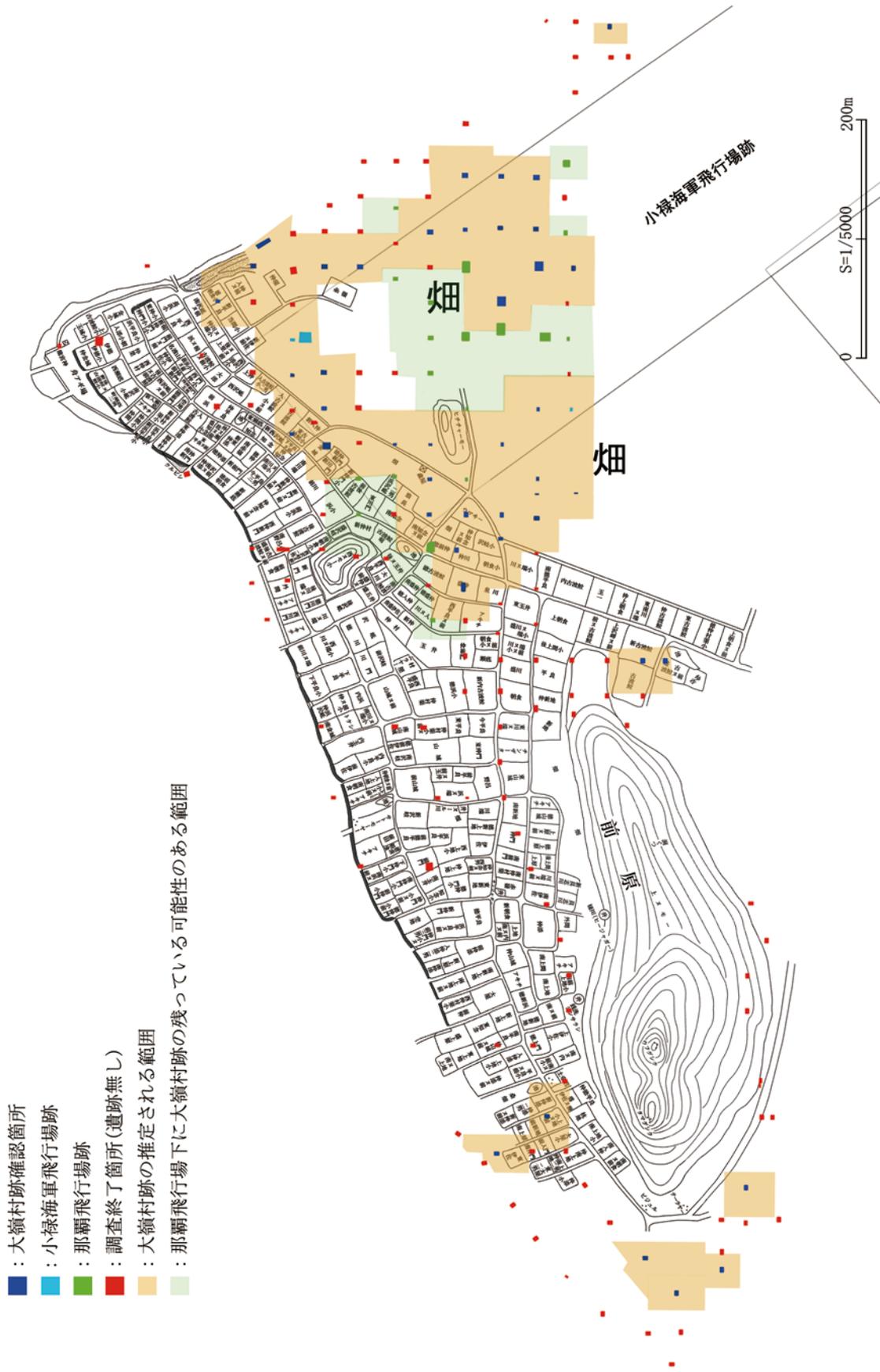
種別	試掘坑名	遺構	種別	試掘坑名	種別	試掘坑名	種別	試掘坑名	遺構				
大嶺村～ 字大嶺に かかる 遺構	す	96	船着場？	遺物 包含 層	し	97	飛小 行祿 海軍 場軍	そ	99イ	那覇 飛行 場	た	102	アスファ ルト敷き
	せ	96	船着場？		す	96		そ	99ロ		た	103	構築物
	そ	96	旧表土		そ	96		に	100		ち	95	構築物
	そ	99	シミ (耕作痕？)		そ	99イ			ち		97	構築物	
	そ	100	旧表土		そ	100			ち		102	構築物	
	た	96	耕作痕？		そ	101ハ			ち		102	構築物	
	た	102	旧表土		た	102			つ		97	構築物	
	て	105 ・106ロ	ピット		ち	101			つ		98	構築物	
	と	95	耕作痕		つ	95			つ		99	構築物	
	と	98	耕作痕		つ	101			つ		104	駐機場	
	と	104	湿地		つ	102			て		96	駐機場	
	な	95	耕作痕		つ	103			て		98	駐機場	
	な	102	耕作痕		て	94			て		100	駐機場	
	な	103	ピット		て	95			て		102	駐機場	
	な	104	耕作痕		て	104			て		106	土坑	
	に	96	ピット		て	103			と		98	構築物	
	に	120	石列？		と	94			に		93	構築物	
	ぬ	90イ	旧表土？		と	97			に		95	構築物	
	ぬ	103	耕作痕		と	101			に		98イ	構築物	
	の	80	旧表土		と	103							
の	124	耕作痕？	と	121									
は	125	シミ (耕作痕？)	な	94									
			な	96									
			な	100									
			ね	108									
			の	108									
			ひ	122									
			ひ	125									



第 18 図 調査成果



第 19 図 遺跡の推定される範囲

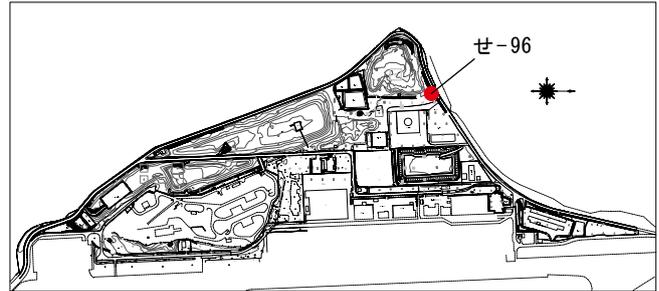


第 20 図 昭和16年当時の字大嶺民俗地図と調査成果

せ-96

試掘調査はおよそ 12×3mの範囲で行なったが、地表面よりおよそ-1.5mの掘削を行ったところで、表面をはつたような痕跡のある石灰岩がほぼ全域で見られた。石灰岩上面には灰白色の海浜砂が薄く堆積していたが、輾転された様子は見られなかった。字大嶺出身者からの聞き取りでは、舟は白砂上に置かれていたとの事であるため、舟着き場の跡ではないかと考えた。一部石灰岩の無い箇所があり、そこから水が湧いてきたので、ポンプで排水しながらの調査となった。

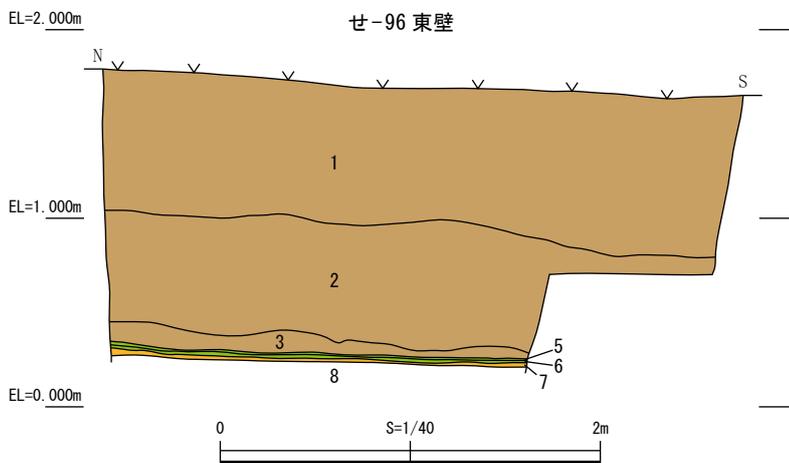
遺物は各層より若干の本土産磁器や沖縄産陶磁器が出土しているが、造成土からの出土であるため、混入したものだと考えられる。7層(Ⅲ層:(石灰岩直上))からは沖縄産施釉陶器の碗底部と本土産磁器(印文)碗底部と香炉の口縁部、煉瓦片が出土した。



せ-96 東壁



せ-96 石灰岩岩盤検出状況

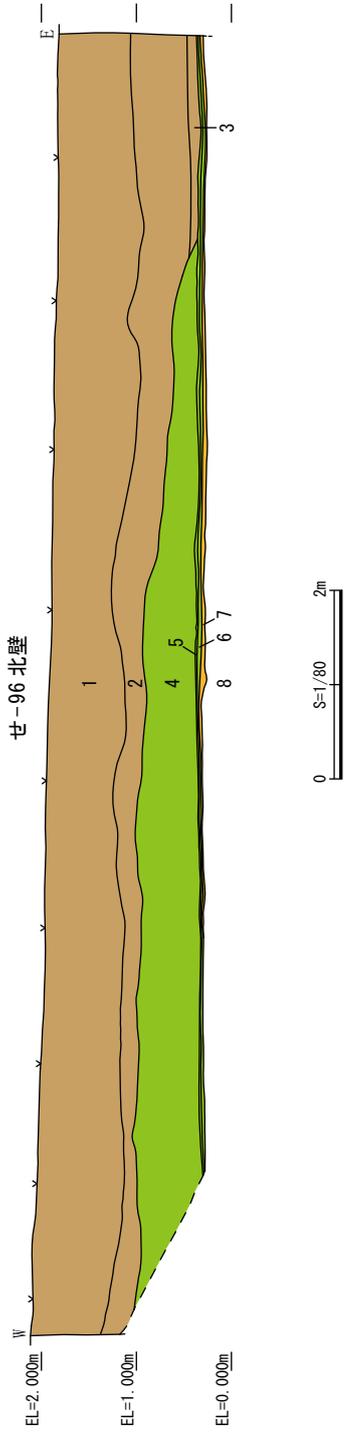


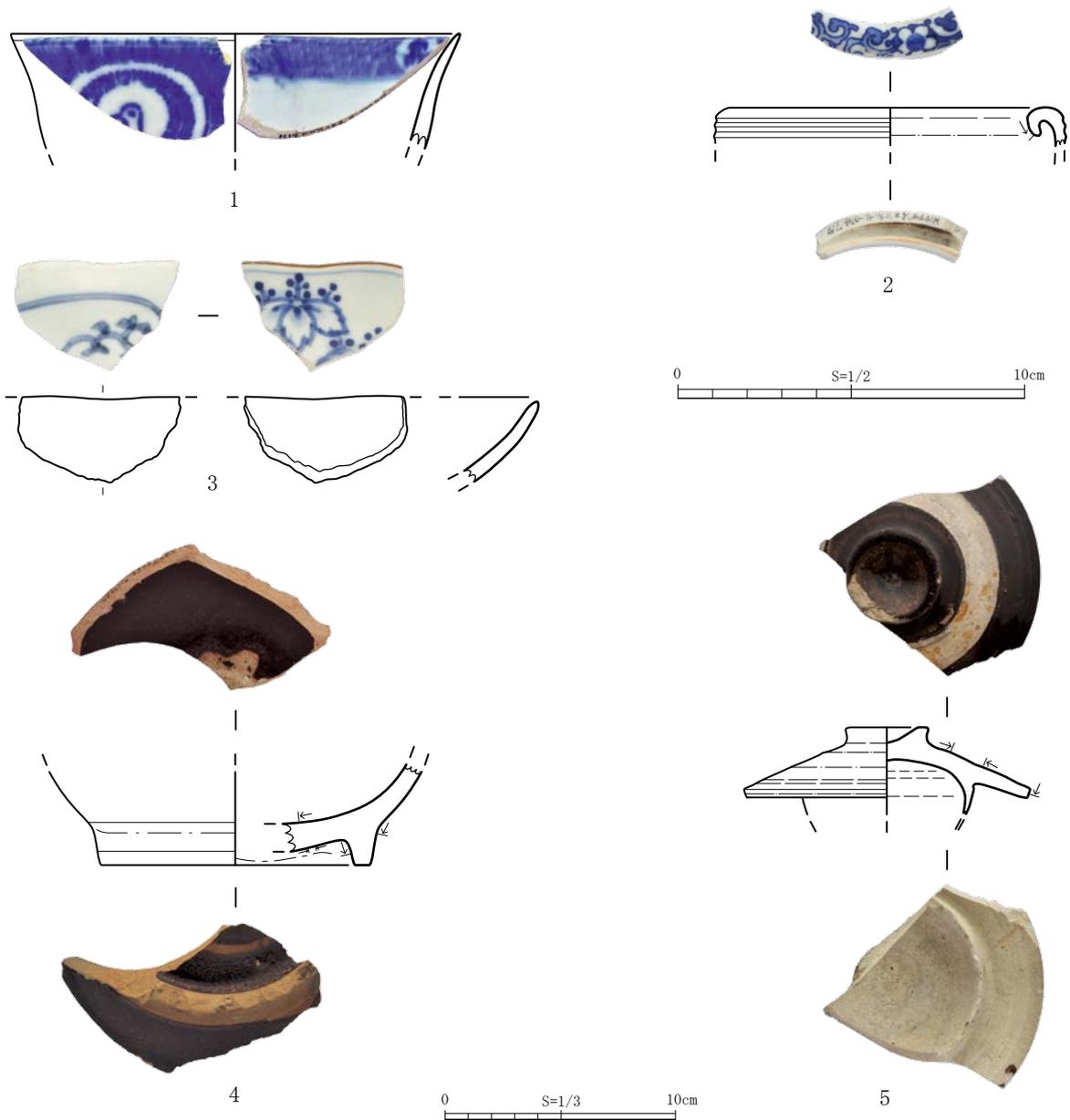
<土層注記>

- 1層 - 黄褐色(2.5Y5/4)砂礫土:陶磁器片が出土。
- 2層 - オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗砂:磁器片が出土。
- 3層 - 灰色(5Y6/1)粗砂。
- 4層 - 灰白色(2.5Y8/1)粗砂の盛土。
- 5層 - 黄色(5Y7/6)粗砂。
- 6層 - 灰白色(5Y4/1)海砂。
- 7層 - 灰色(5Y6/1)粗砂:ガラス片、磁器片、木片が出土。
- 8層 - 灰白色(2.5Y7/1)石灰岩。



せ-96 北壁





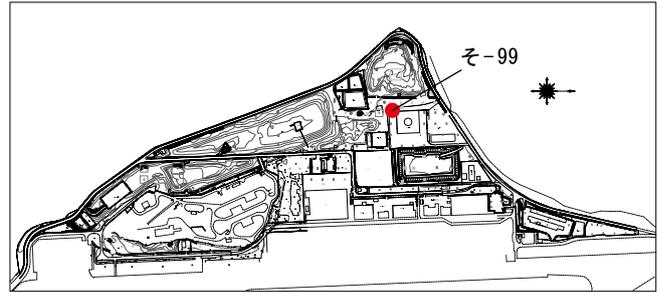
第 21 図 (図版 4) せ-96 出土遺物

第 2 表 せ-96 出土遺物観察一覧

挿図番号 図版番号	種類	器種/部位	法量(cm/g)	胎土・材質	観察事項	出土層
第21図 1 図版4の1	本土産磁器	碗 口縁部	口径 13.0	白色 微粒子	肥前系。型紙刷り。 外反碗。円の中に鶴丸を描く。	4層(Ⅱ)
第21図 2 図版4の2	本土産磁器	香炉 口縁部	口径 10.0	白色 微粒子	瀬戸美濃系? 口唇部に唐草文と花文(梅?) を描く。	7層(Ⅲ)
第21図 3 図版4の3	本土産磁器	皿 口縁部	—	灰白色 微粒子	肥前系。口鑄を施す。内外面ともに呉須で 草花文を描く。	4層(Ⅱ)
第21図 4 図版4の4	沖縄産 施釉陶器	油壺 底部	底径 11.6	浅黄橙 細粒子 (10YR8/4)	内外面ともに鉄釉を掛ける。	2層(Ⅰ)
第21図 5 図版4の5	沖縄産 施釉陶器	油壺 蓋	口径 12.4	灰白 微粒子 (7.5Y7/1)	外面は鉄釉を掛けた後、蛇の目状に釉の搔 き取りを行う。 内面は露胎。	2層(Ⅰ)

そ-99

5層(Ⅳ層)上面において灰黒色の砂による不規則なシミ状の堆積が確認できたので、耕作痕の可能性があるのでないかと考えた。しかし、戦後の盛土・整地時の輾転による荷重痕の可能性も否めない。4層(Ⅲ層)からは本土産磁器、陶質土器、瓦、炆器が出土した。



そ-99 南壁



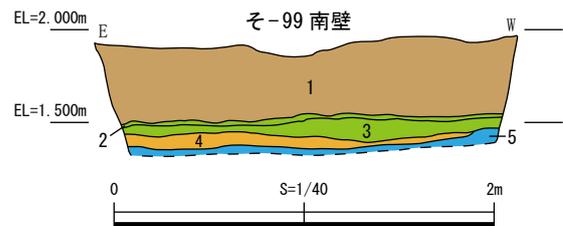
そ-99 東壁



そ-99 平面(南から)



そ-99 南壁(拡大)



<土層注記>

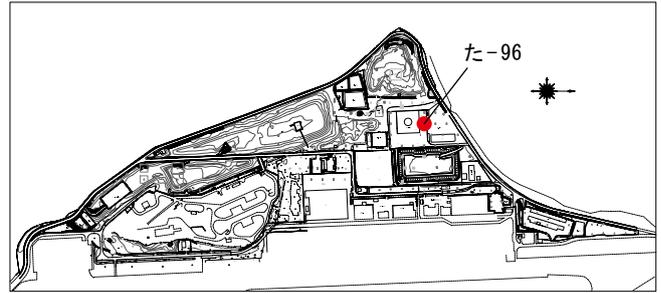
- 1層 - 客土(-) クチャ・ニービによる造成土。
- 2層 - 黒褐色砂層(2.5Y3/2) 根が生えており、やや粘性あり。
那覇飛行場の旧表土層。しまり弱い。
- 3層 - 暗褐色混砂利土層(10YR3/4) 2層とともに那覇飛行場の旧表土層と思われる。粘性ややあり。しまり弱い。
- 4層 - 灰オリーブ色砂層(5Y6/2) 遺物・炭を含む。粘性なし。しまり弱い。
- 5層 - 灰黄色砂層(2.5Y7/2) 海浜砂。やや粗めの砂。灰黒色の砂がシミ状に見られる(耕作痕の可能性あり)。
サンゴ礫含む。粘性なし。しまり弱い。
- 6層 - 灰白色砂層(2.5Y8/2) 海浜砂。粗砂。サンゴ礫、貝含む。粘性なし。しまりあり。



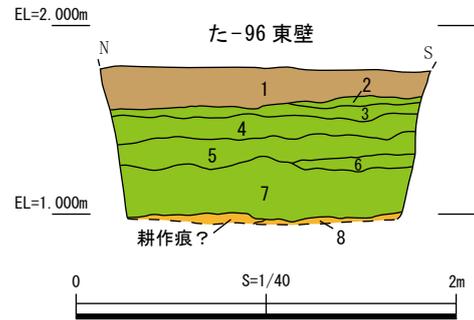
そ-99 耕作痕?

た-96

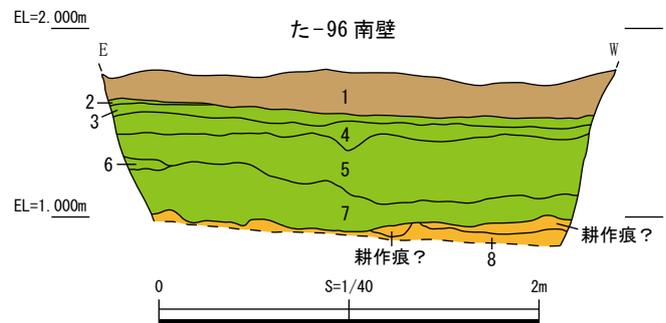
砂層上面に不規則ではあるが、そ-99 よりも明瞭な、黒っぽいシミのようなものが確認できた。民俗地図（第7・20 図）からも、当該地は畑であった可能性が高いことから、耕作痕ではないかと考えた。8 層（Ⅲ層）からはいずれも破片であるが、クロム青磁、沖縄産施釉・無釉陶器、陶質土器、瓦が出土している。



た-96 東壁

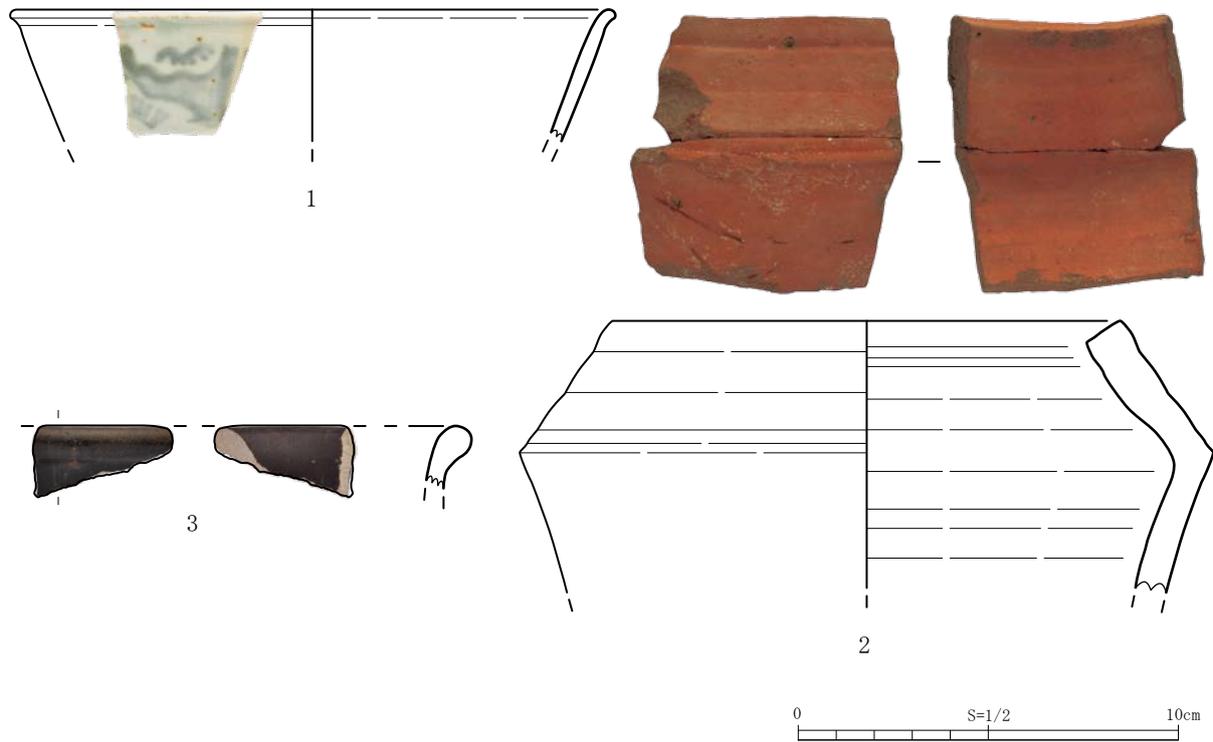


た-96 南壁



た-96 平面

- <土層注記>
- 1層 - 客土(-) クチャ・ニービによる造成土。
 - 2層 - 灰白色砂層(5Y8/1) 3層が那覇飛行場の旧表土と考えられることから、その時に流れ込みなどで堆積した海浜砂。粘性なし。しまり弱い。
 - 3層 - 黒褐色砂層(2.5Y3/2) 根が生えており、やや粘性まじり。那覇飛行場の旧表土層。しまり弱い。
 - 4層 - 灰白色砂層(5Y8/1) 根が生えているが3層の影響と思われる。炭、サンゴ礫含む。海浜砂を利用した埋土の可能性あり。粘性なし。しまりやや弱い。
 - 5層 - 灰オリーブ混砂土層(2.5Y4/4) 石、サンゴ礫含む。粘性あり。しまりやや弱い。
 - 6層 - 灰白色砂層(5Y8/1) サンゴ礫・石含む。壁面全体にみられるのではなく部分的なものであることから、一度表土になっている可能性がある。粘性なし。しまりやや弱い。
 - 7層 - 暗オリーブ砂質土層(5Y4/3) やや粘質のある砂質土層。クチャ・オリーブ粘土、明黄褐色粘土がブロックで混じる。
 - 8層 - 灰黄色砂層(2.5Y7/2) 海浜砂。粗砂。灰黒色の砂がシミ状にみられる(耕作痕の可能性あり)。サンゴ礫含む。しまり弱い。



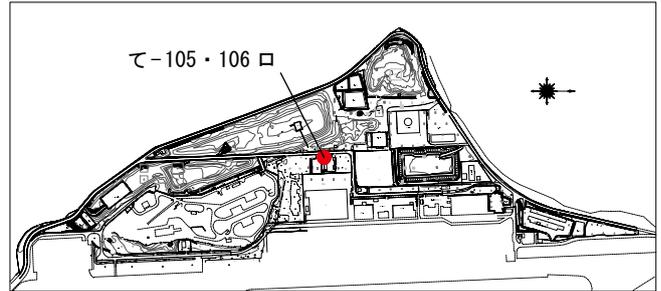
第22図 (図版5) た-96 出土遺物

第3表 た-96 出土遺物観察一覧

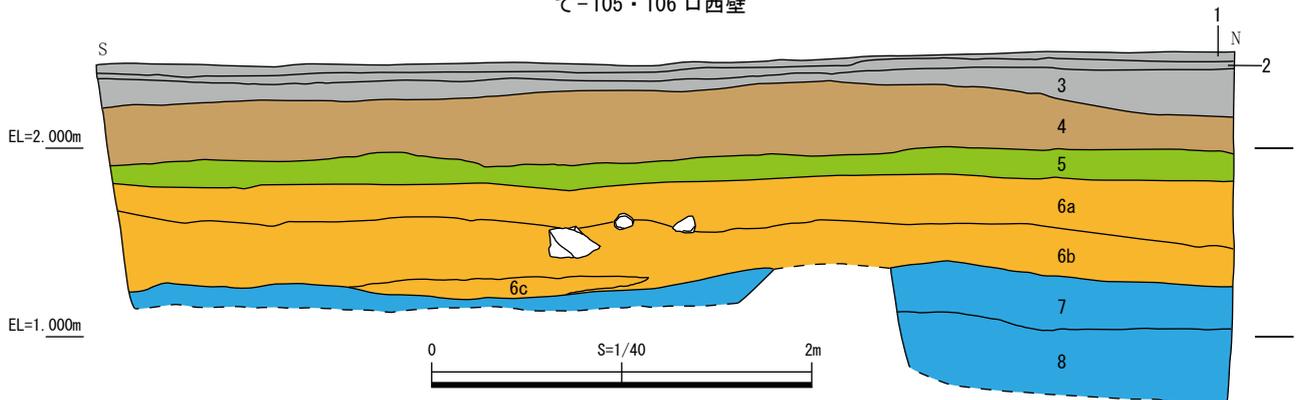
挿図番号 図版番号	種類	器種/部位 貝種/貝名	法量(cm/g)	胎土・材質	観察事項	出土層
第22図 1 図版5の1	中国産染付	碗 口縁部	口径 16.0	白色 微粒子	端反り。胴部を区画し梅花散し文。内面口縁部に圈線を施す。18世紀。福建系。	3層(Ⅱ)
第22図 2 図版5の2	沖縄産 無袖陶器	火炉 口縁部	口径 12.4	赤褐色 微粒子 (10R4/4)	内面には回転擦痕とナデ。外面には把手がつくと思われる。	3層(Ⅱ)
第22図 3 図版5の3	沖縄産 施釉陶器	壺 口縁部	—	灰白 微粒子 (7.5Y7/1)	内外面ともに鉄釉を掛ける。	8層(Ⅲ)

て-105・106 口

6層よりピットを確認した。両者の間隔はおおよそ2.75mで、ちょうど1.5間である。また、周辺には瓦片が多数散乱していたため、柱穴ではないかと考えた。遺物は中国産・本土産・沖縄産陶磁器類、瓦、硯、貝製品が確認できた。なお、1.5mほど北側では地山まで造成を受けた様子を確認した。



て-105・106 口西壁



<土層注記>

1層 - アスファルト(-)

2層 - 淡黄色砂コーラル混じり(2.5Y8/4) 路盤材。

3層 - 明黄褐色(2.5Y6/8) 約5~15cmの石灰岩層。

4層 - 褐色土(10YR4/4) シルト質で2~5cmの石灰岩礫多く含む。

5層 - 灰白色砂コーラル混じり(5Y7/1)

6a層 - 暗褐色砂(10YR3/3) 遺物を包含する層。明黄褐色(10YR7/6)や褐色(10YR4/1)砂が不規則にマープル状に堆積。しまりは良。

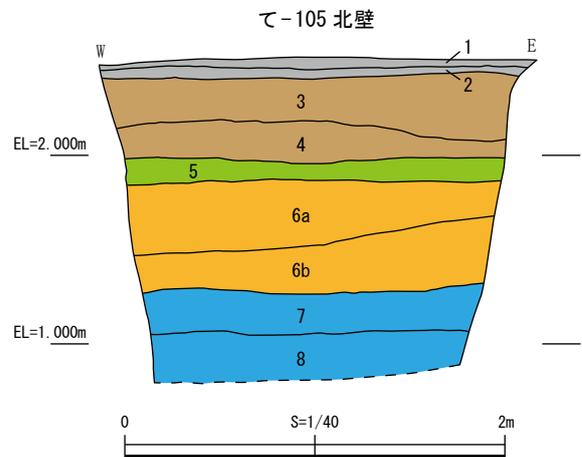
6b層 - 暗褐色砂(10YR3/3) 基本的には6a層との違いはみられないが本層上面でPitを検出。

6c層 - 褐色砂(10YR4/1) 6a層で混入している褐色砂と同様のものが比較的厚く堆積しているために仮に6c層とした。

7層 - 灰白色砂(2.5Y8/2) 8層 - 灰白色砂(10Y7/1)



て-105 北壁



て-105・106 口



て-105・106 口 平面



pit1 (て-106 口)



pit 間



pit2 (て-105)



pit2 半裁

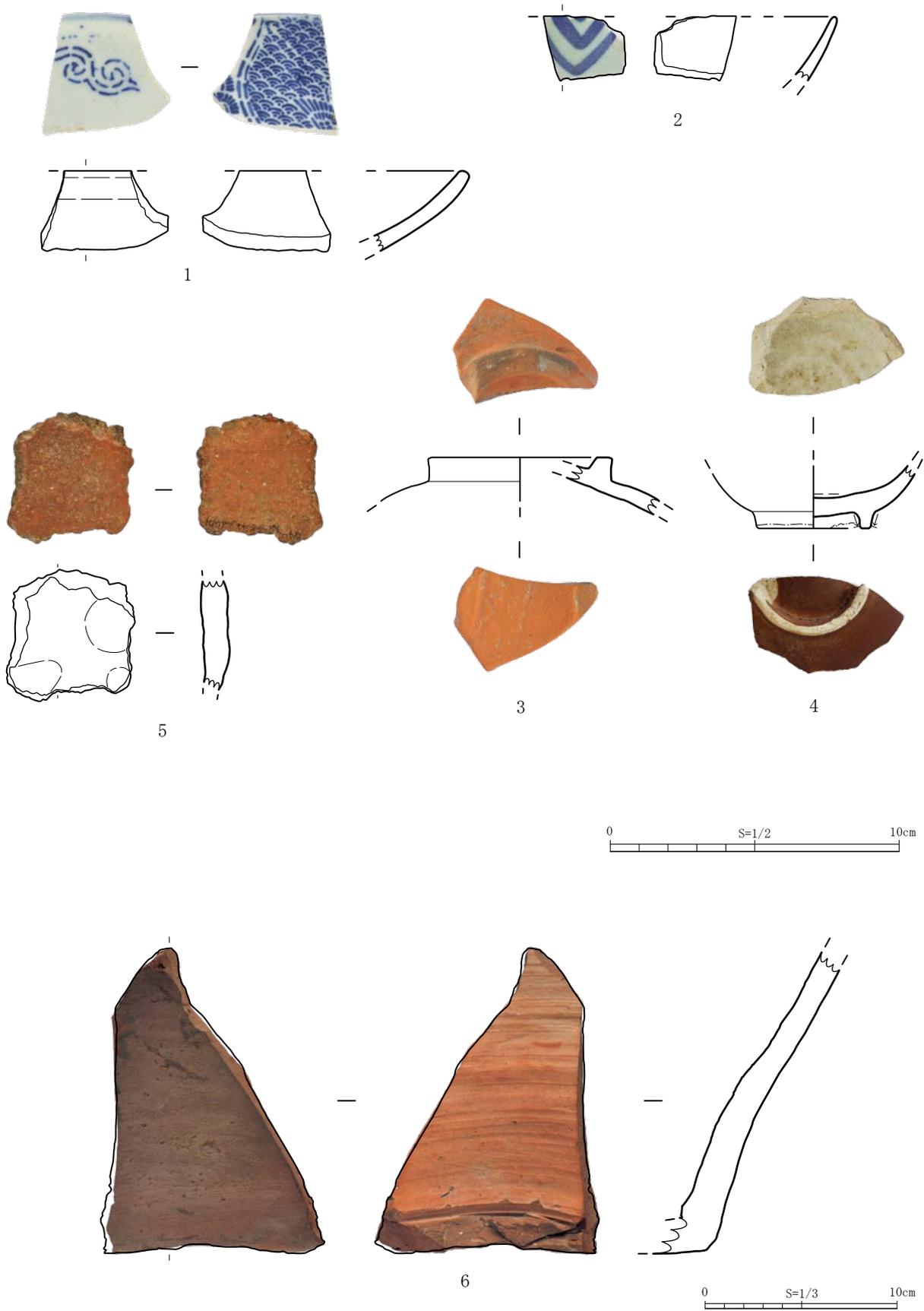


て-105・106 口

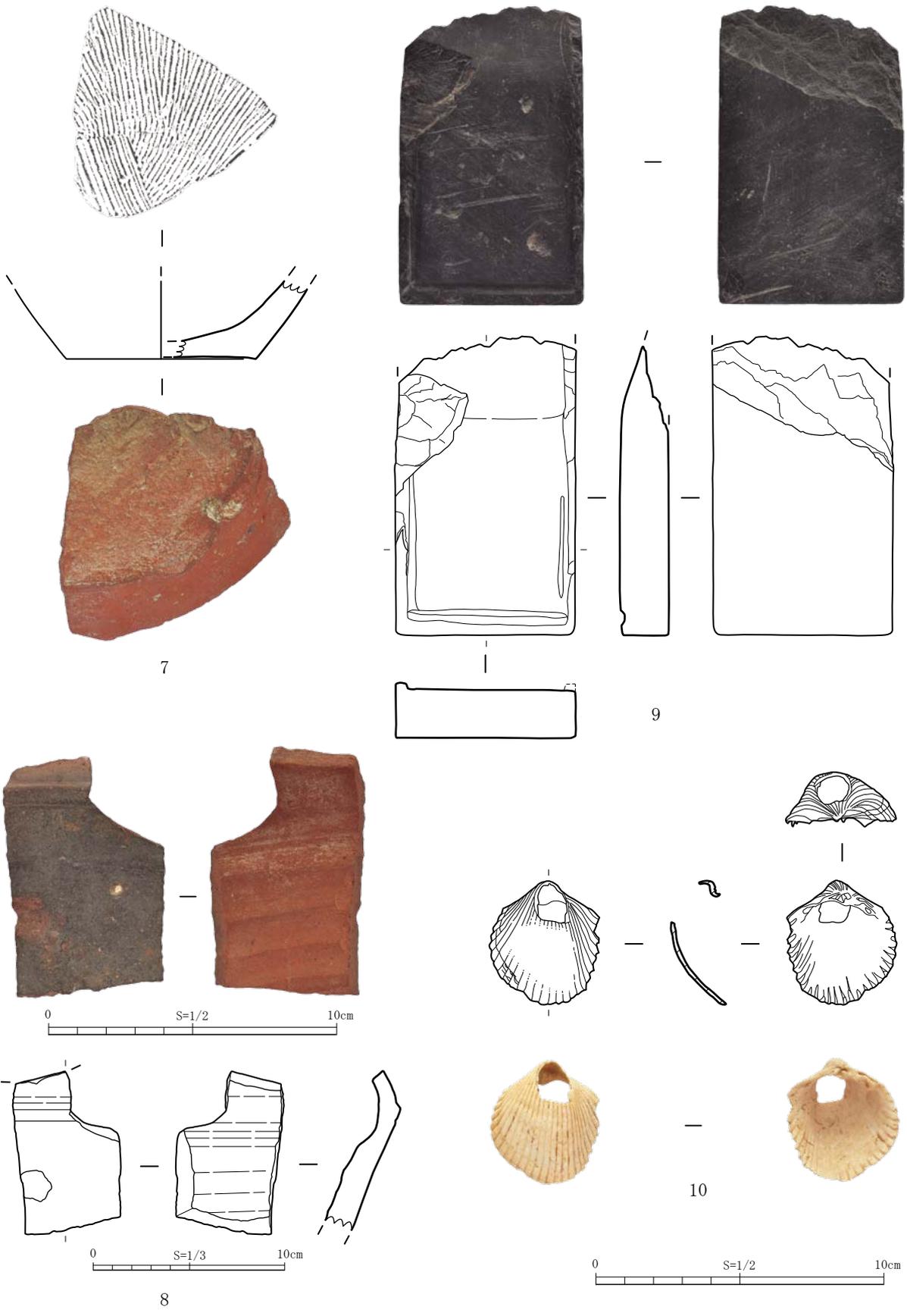


第4表 て-105・106 口出土遺物観察一覧

挿図番号 図版番号	種類	器種/部位	法量(cm/g)	胎土・材質	観察事項	出土地点
第23図 1 図版6の1	本土産磁器	皿 口縁部	—	白色 微粒子	瀬戸美濃系。型紙刷り。内面は波濤文、外面は唐草文。口藍を施す。	て-105 6層(Ⅲ)
第23図 2 図版6の2	本土産染付	小碗 口縁部	—	白色 微粒子	クロム青磁。外面にはコバルト使用のゴム印にて笹を押印。	て-106 6層(Ⅳ)
第23図 3 図版6の3	陶質土器	鍋 蓋	径 6.4	にぶい赤橙 (10R6/4) 微粒子 赤色粒混	内面にはナデの痕が残る。外面には煤が付着。	て-105 6層(Ⅲ)
第23図 4 図版6の4	沖縄産 施釉陶器	小碗 底部	底径 3.5	灰白 微粒子 (2.5Y8/2)	外面：鉄釉、内面：白化粧の掛け分けの碗。蛇の目釉剥ぎは無い。	て-106口 6層(Ⅲ)
第23図 5 図版6の5	土器	不明	—	赤黒 (10R2/1)	内外面ともに指圧痕が残る。内面には輪積みの痕も残る。	て-106 6層(Ⅳ)
第23図 6 図版6の6	沖縄産 無釉陶器	甕 胴部	—	赤褐 微粒子 (10R4/4) 白色粒混	外面はへら削りの痕、内面にはろくろ痕が明瞭に残る。自然釉による発色	て-105 6層(Ⅲ)
第24図 7 図版7の7	沖縄産 無釉陶器	播鉢 底部	底径 10.0	赤褐 微粒子 (10R4/4) 赤色粒混	外面：ろくろ痕をナデ消す。オロシ目は10本を一組とする。	て-106口 6層(Ⅲ)
第24図 8 図版7の8	沖縄産 無釉陶器	火炉 口縁部	—	赤 微粒子 (10R5/8) 気泡多し	外面：混入物の焼きはぜあり。内面：ろくろ痕が明瞭に残る。	て-105 6層(Ⅲ)
第24図 9 図版7の9	石製品	硯	全長 9.5 高さ 1.9 横幅 6.2	頁岩	幅が6.2cmであることから、3寸企画の製品と思われる。縁を平に削り取っているため、あるいは砥石への転用品かもしれない。	て-105 6層(Ⅲ)
第24図 10 図版7の10	貝製品	ザルガイ科 カワラガイ	孔径縦1.0 横1.1 殻幅 3.8 殻長 4.3 殻高 1.9	—	孔は殻頂よりの前背縁側に内側から穿たれる。主歯と殻長の中央部分が特に摩耗している。	て-106口 6層(Ⅲ)



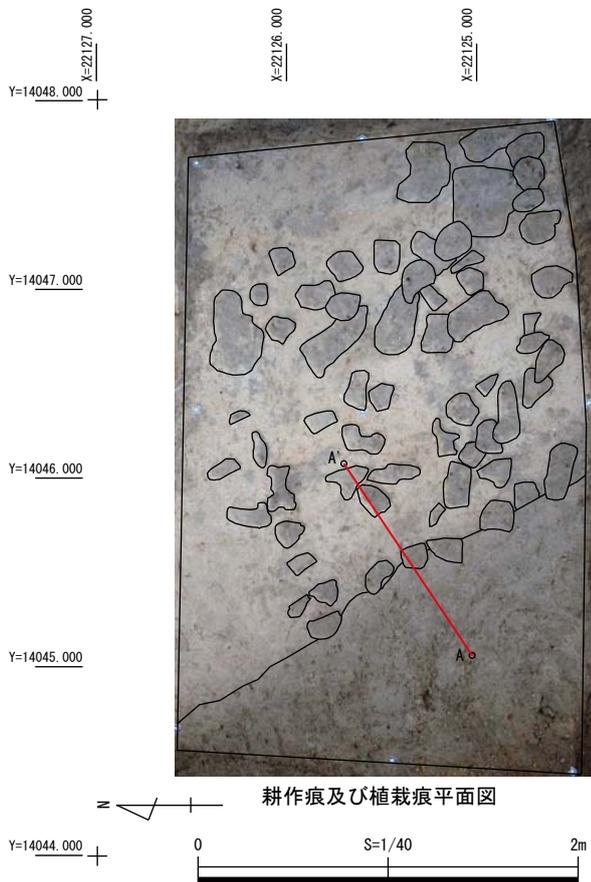
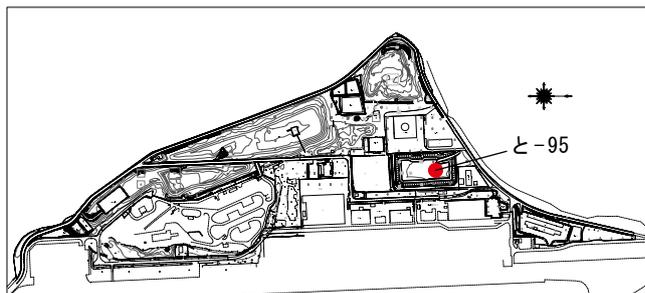
第23図(図版6) て-105・106口出土遺物(1)



第24図(図版7) て-105・106口出土遺物(2)

と-95

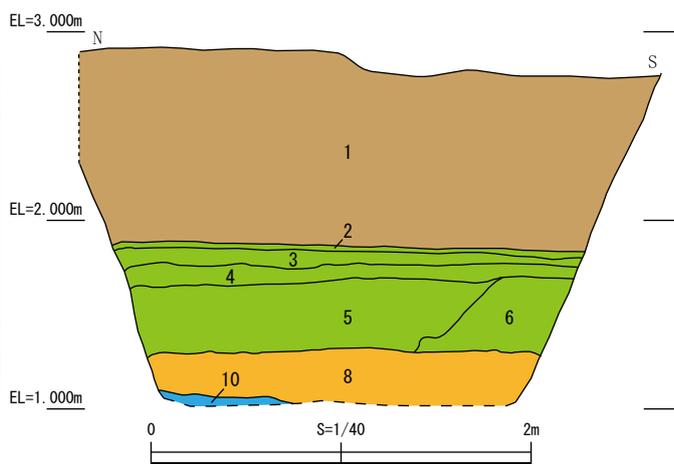
10層直上より耕作痕及び植栽痕を確認した。砂質に適した植物(カガンジデークニ)が栽培されていた可能性は高いと思われる。8・9(Ⅲ層)より碗・皿・土鍋の破片が確認できた。



耕作痕及び植栽痕



東壁



<土層注記>

1層 - 表土(-)盛土。 2層 - アスファルト(-)

3層 - 暗オリーブ褐色土層(2.5Y3/3) 砂質強いが、しまりあり。造成時に輾転されたものか。

4層 - 黄褐色土層(2.5Y5/3) 砂質強くところどころ青灰色の粘土ブロックが混じる。

5層 - 浅黄色粗砂層(2.5Y7/3) しまりなく乳白色の砂岩ブロック多く混じる。

6層 - 灰白色砂層(7.5Y7/1) 5層、7層と同じく砂岩ブロックが混じるが、やや砂の目がそろっている。

7層 - 浅黄色粗砂層(2.5Y7/3) 5層と同等の層。

8層 - 灰色砂層(N6/) しまりなくφ5mmほどの炭化物、近世陶磁器片が混ざる。

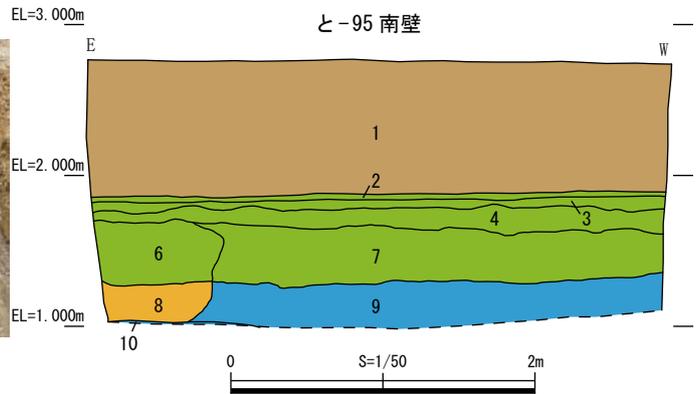
9層 - 灰色砂層(7.5Y5/1) 近世陶磁器多く出土。東へ向かって下がっている。

10層 - 灰白色砂層(7.5Y8/1) 海砂層。枝サンゴ、貝など混じる。表面に耕作痕が確認された。

と-95

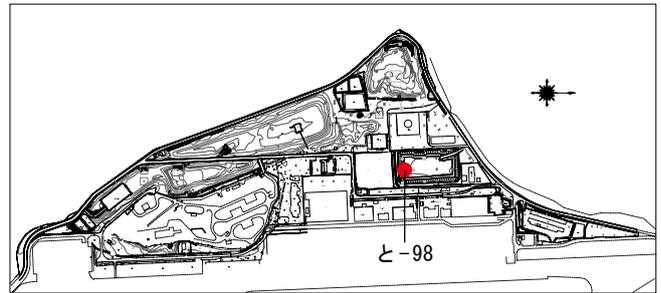


と-95 南壁



と-98

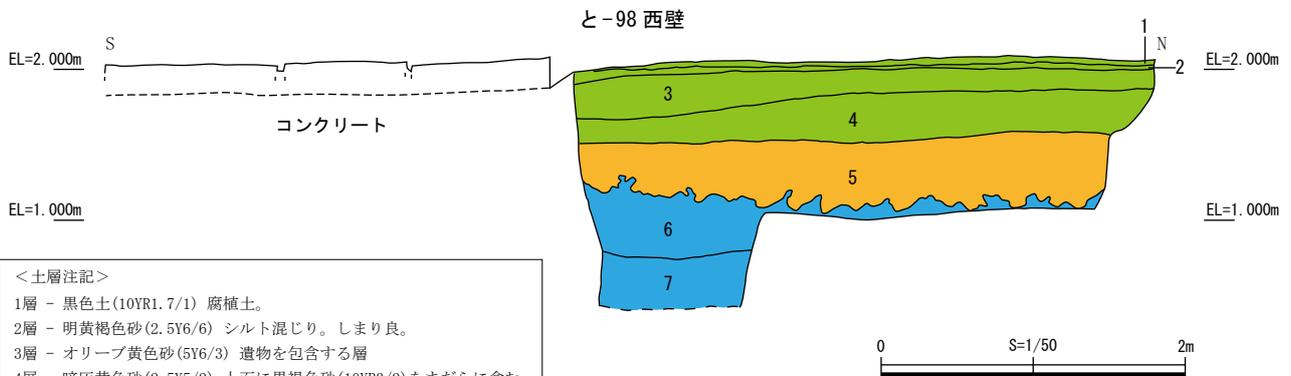
と-95と同様に耕作痕及び植栽痕が確認できた。確認当初は地震による噴砂の可能性も考えたが、自然地理学の専門家よりその可能性は薄い事を御教示頂いた。断面からは深くまで根を張っていたことが窺える。標高40cmのところ^{パーミル}で湧水したので、塩分濃度を計測したところ、0.17‰であった。



と-98 平面



と-98 西壁

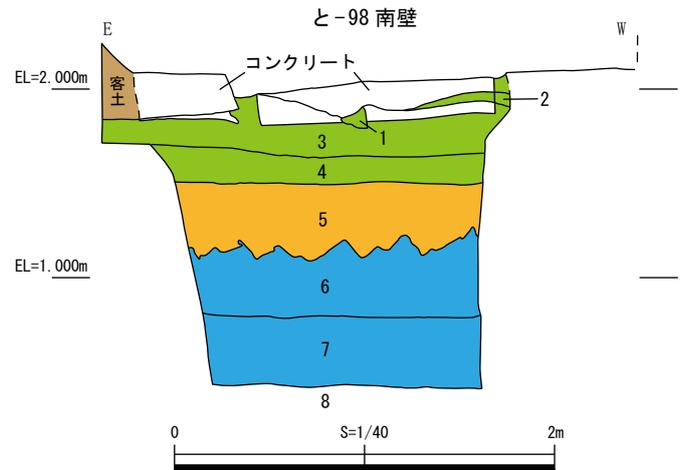


- <土層注記>
- 1層 - 黒色土(10YR1.7/1) 腐植土。
 - 2層 - 明黄褐色砂(2.5Y6/6) シルト混じり。しまり良。
 - 3層 - オリーブ黄色砂(5Y6/3) 遺物を包含する層
 - 4層 - 暗灰黄色砂(2.5Y5/2) 上面に黒褐色砂(10YR3/2)をまだらに含む。遺物を包含し、しまりは良い。
 - 5層 - 黒褐色砂(10YR2/2) 最下面が波状になる。遺物を多く包含する。
 - 6層 - 浅黄橙色砂(10YR8/3)
 - 7層 - 灰白色砂(2.5Y7/1)
 - 8層 - 緑灰砂(7.5GY6/1)

と-98



と-98 南壁

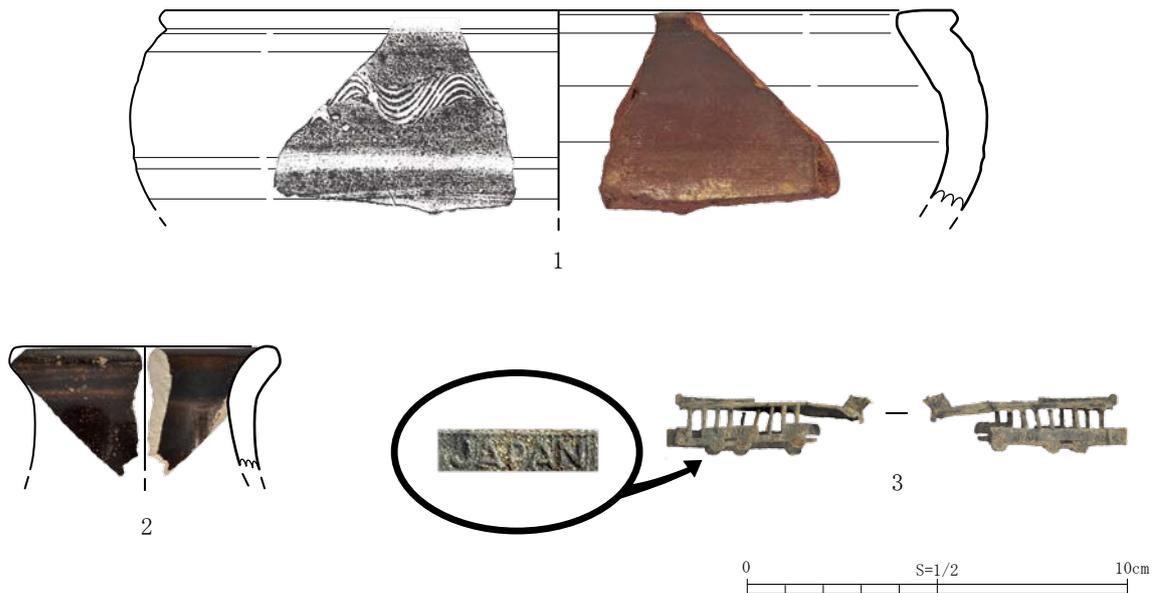


<土層注記>

- 1層 - 黒色土(10YR1.7/1) 腐植土。
- 2層 - 明黄褐色砂(2.5Y6/6) シルト混じり。しまり良。
- 3層 - オリーブ黄色砂(5Y6/3) 遺物を包含する層。
- 4層 - 暗灰黄色砂(2.5Y5/2) 上面に黒褐色砂(10YR3/2)をまだらに含む。遺物を包含し、しまりは良い。
- 5層 - 黒褐色砂(10YR2/2) 最下面が波状になる。遺物を多く包含する。
- 6層 - 浅黄褐色砂(10YR8/3)
- 7層 - 灰白色砂(2.5Y7/1)
- 8層 - 緑灰砂(7.5GY6/1)

第5表 と-98 出土遺物観察一覧

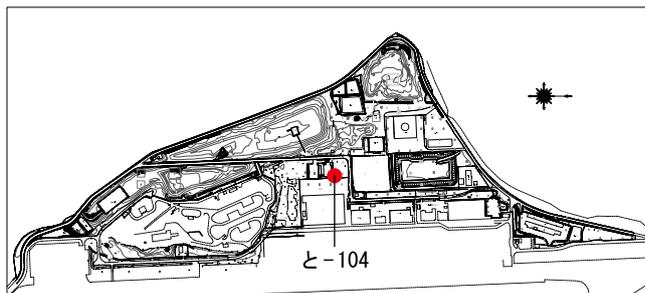
挿図番号 図版番号	種類	器種/部位	法量(cm/g)	胎土・材質	観察事項	出土地点
第25図 1 図版8の1	沖縄産 無釉陶器	水鉢 口縁部	口径 20.8	赤褐 微粒子 (10R4/4) 気泡多し	外面：混入物の焼きはぜあり。 内面：ろくろ痕が明瞭に残る。	3層 (II)
第25図 2 図版8の2	沖縄産 施釉陶器	小壺 口縁部	口径 6.6	灰白 微粒子 (7.5Y7/1)	内外面ともに鉄釉を掛ける。	5層 (III)
第25図 3 図版8の3	玩具	不明	—	ブリキ	汽車の玩具か？ JAPANの文字が見える。	3層 (II)



第25図 (図版8) と-98 出土遺物

と-104

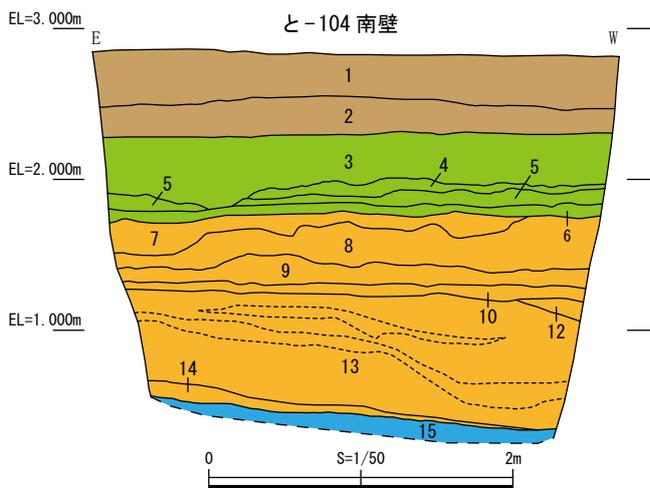
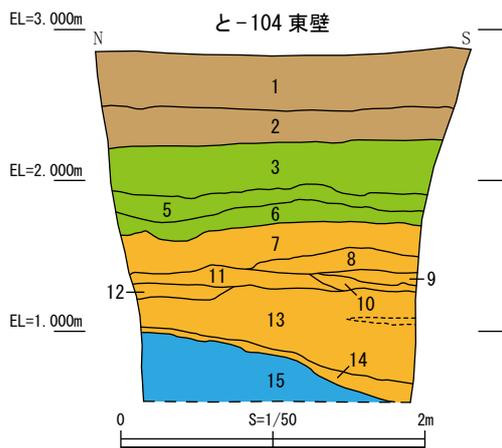
10層～15層までは小堀や溝など水にかかわる堆積と思われる。4度ほど大きく埋没した様子が間に挟まれている青灰色粗砂層の状況から分かる。当該地が小字「後原」ということから考えても、集落裏の後背湿地であったことを裏付けるものである。



と-104 東壁



と-104 南壁



5層出土遺物



14層出土遺物

- <土層注記>
- 1層 - 盛土(-) 褐色土。クチャ。
 - 2層 - 路盤材(-) コーラル。固く輾転されている。
 - 3層 - 造成土(-) 固くしまった砂。那覇飛行場の整備に伴うものか？
 - 4層 - 淡黄色砂(2.5Y8/3) 海浜の砂。
 - 5層 - 褐色砂質土(10YR4/4) 枝サンゴが全体に混じり、固くしまっている。赤瓦・カメなど近世陶磁器出土。ただしカクランか？
 - 6層 - 淡黄色砂(2.5Y8/3) 海浜の砂。
 - 7層 - にぶい黄褐色土(2.5Y6/4) 全体にクチャのブロックが散り、赤瓦、カメ多く出土。
 - 8層 - 黄褐色砂質土(2.5Y5/4) 海浜の砂がマーブル状に入り、ややしまりあり。
 - 9層 - 暗青灰色砂質土(5BG3/1) 軽石やクチャのブロックなど混ざる。しまりなし。
 - 10層 - 青灰色粗砂(5BG6/1) キメのそろった砂の純層。
 - 11層 - 淡黄色砂(2.5Y8/4) 海浜の砂に青灰色砂がマーブル状に入る。
 - 12層 - オリーブ褐色土(2.5Y4/3) やや粘質強く、固くしまる。
 - 13層 - 暗青灰色砂質土(5BG3/1) しま状に青灰色粗砂(5BG6/1)が入り、近世陶磁器やガラス片など出土。
 - 14層 - 青灰色粘質土(10BG5/1) 粘性強く、この層の上部から湧水する。
 - 15層 - 明緑灰色粗砂枝サンゴ混じり(10G7/1) 元来は灰白色であったが、土層からの染み込みで着色したと思われる。

な-95・な-104



な-95 平面



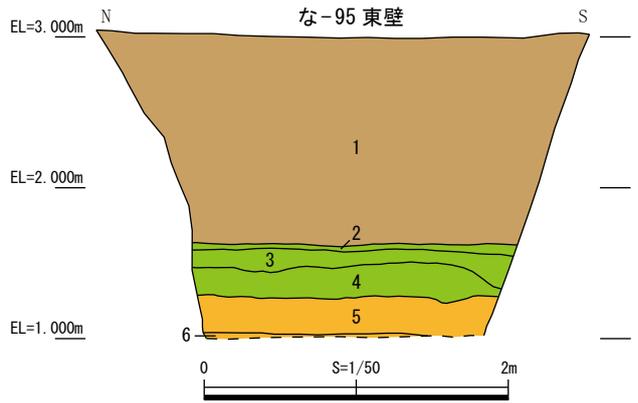
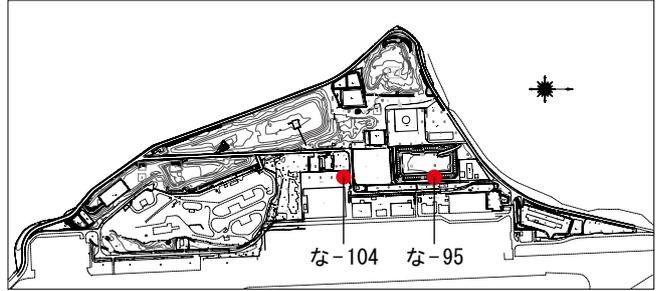
な-95 東壁



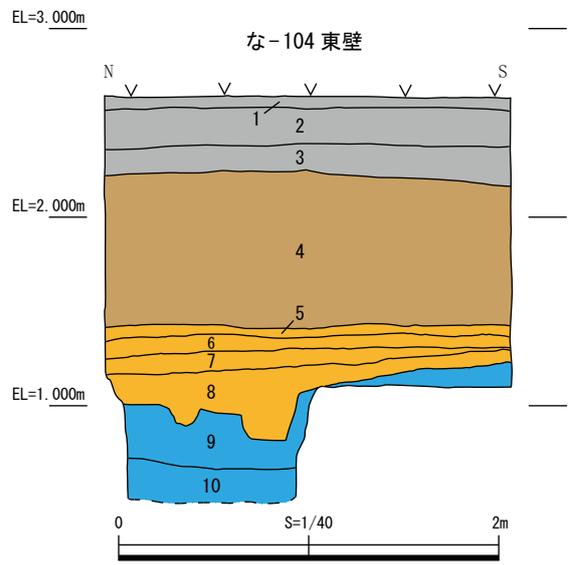
な-95 5層出土遺物



な-104 東壁



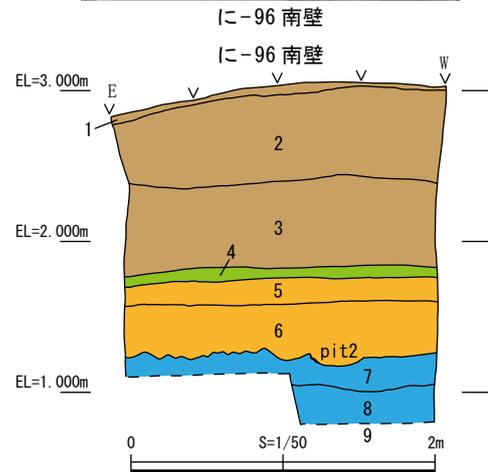
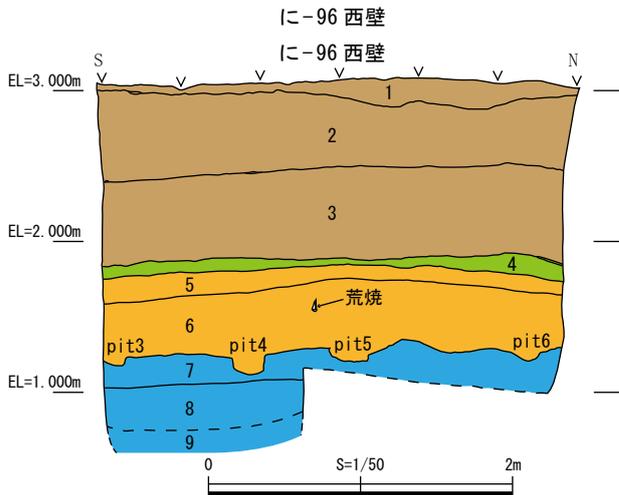
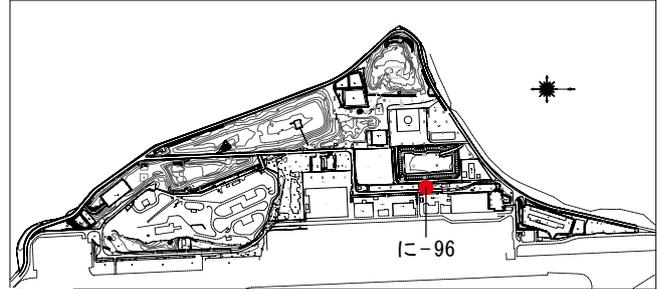
- <土層注記>
- 1層 - 表土(-)
 - 2層 - アスファルト(-)
 - 3層 - 暗オリーブ褐色土層(2.5Y3/3) 砂質強いがしまりあり。造成時に輾転されたものか?
 - 4層 - 浅黄色粗砂層(2.5Y7/3) しまりなく、砂利や枝サンゴなど混じる。
 - 5層 - 灰色砂層(N6/) しまりなく、φ5mmほどの炭化物、近世陶磁器多く出土。
 - 6層 - 灰白色砂層(2.5Y8/1) 海砂層。枝サンゴ、貝など混じる。上面に耕作痕が確認された。



- <土層注記>
- 1層 - アスファルト(-)
 - 2層 - 明褐色砂コーラル混じり(10YR7/6) アスファルト敷の路盤材。
 - 3層 - 灰オリーブ砂(5Y5/2) アスファルト敷の砂。
 - 4層 - オリーブ褐色シルト(2.5Y4/3)+暗緑灰色シルト(10GY4/1)混じり。
 - 5層 - オリーブ黒色(5Y3/1) 腐植土。
 - 6層 - 灰色砂(7.5Y4/1) 遺物が少量含まれる。
 - 7層 - 灰白色砂コーラル混じり(7.5Y7/2) しまり悪い。
 - 8層 - 灰オリーブ砂(5Y4/2)
 - 9層 - 灰白色砂(5Y7/2)+灰オリーブ砂(5Y4/2)混じり。
 - 10層 - 緑灰色砂(7.5GY6/1) 水が湧く。

に-96

7層(IV層)に掘り込む形でピットが検出できたが、調査範囲でその性格を把握することは難しかった。断面図からは周辺の耕作痕及び植栽痕と同様ではないかとも考えられるが、詳細は不明である。6層からの出土遺物は群を抜いて多いが、特に陶質土器片と瓦片が多く出土した。



<土層注記>

1層 - オリーブ褐色土(2.5Y4/6) 現表土。

2層 - 黄褐色土(2.5Y5/4) 石灰岩礫、シルトを含む。

3層 - 明黄褐色土(2.5Y7/6) 石灰岩礫が含まれる。しまり良。

4層 - 黒褐色土(10YR2/3) シルト混じり。遺物を包含する層。

5層 - にぶい黄褐色砂(10YR7/2) 遺物を包含する層。しまり良。

6層 - 黒褐色砂(10YR3/2) 炭・遺物を包含する層。最下面は波状になる。

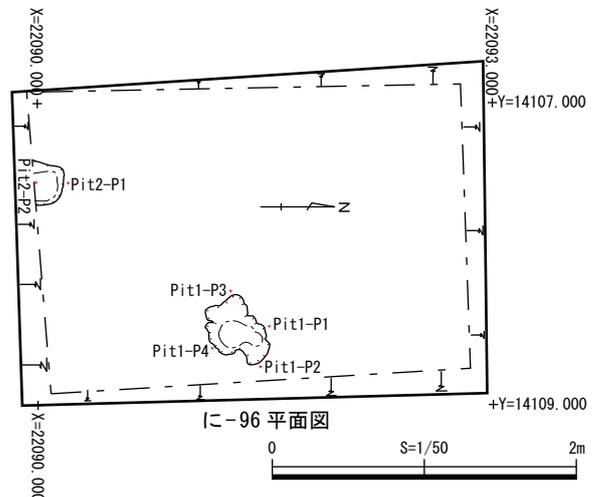
7層 - 灰白色砂(2.5Y8/2) 質はとても粗い。

8層 - にぶい黄色砂枝サング混じり(2.5Y6/4) 良くしまり堅い。

9層 - オリーブ黄色砂(5Y6/3) 水が湧く。

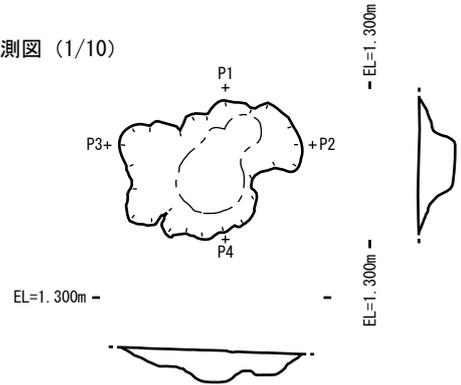


に-96 平面

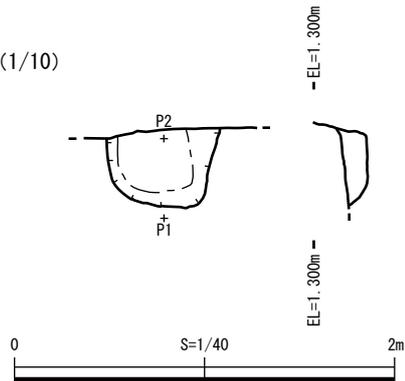




Pit1 実測図 (1/10)

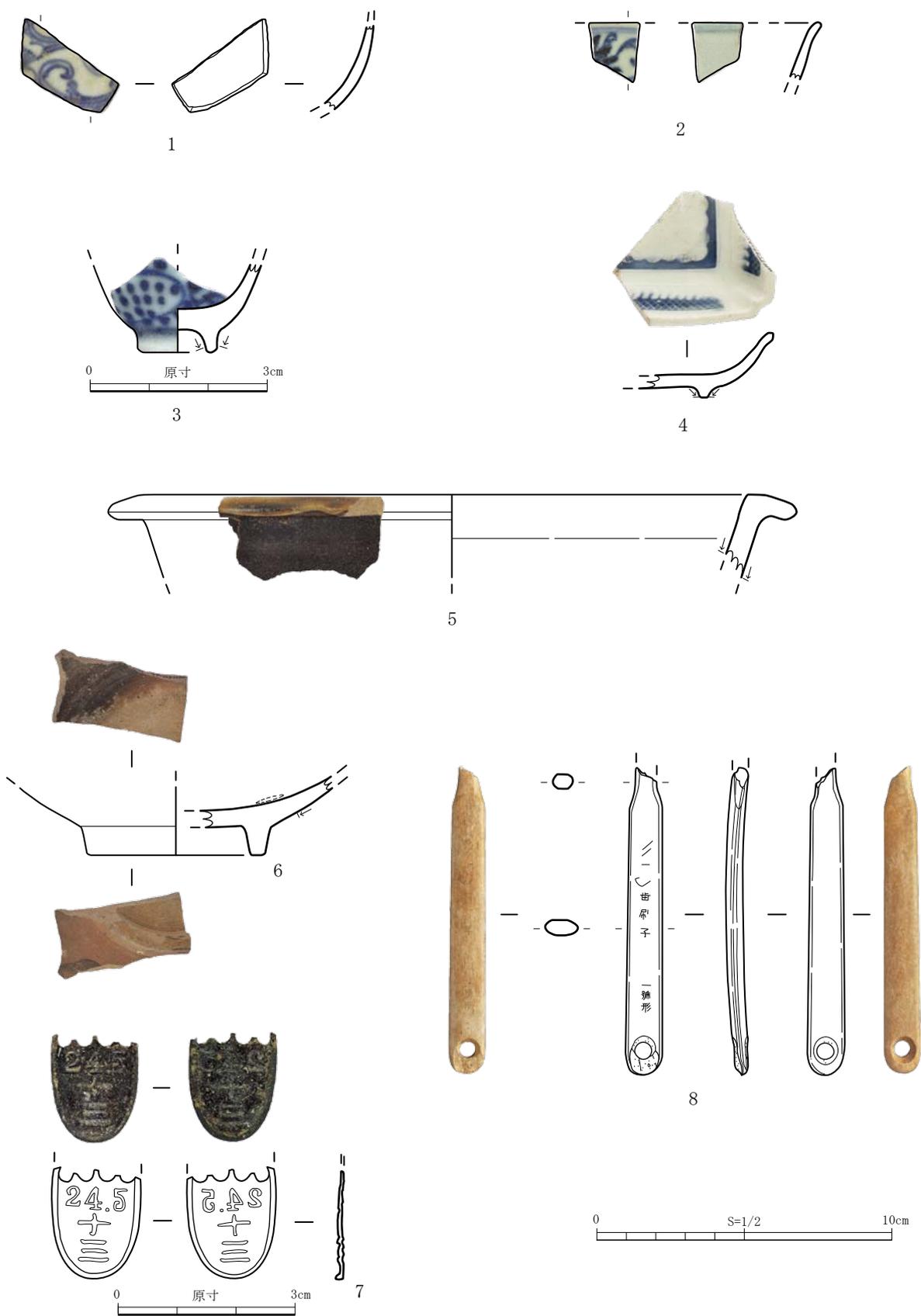


Pit2 実測図 (1/10)

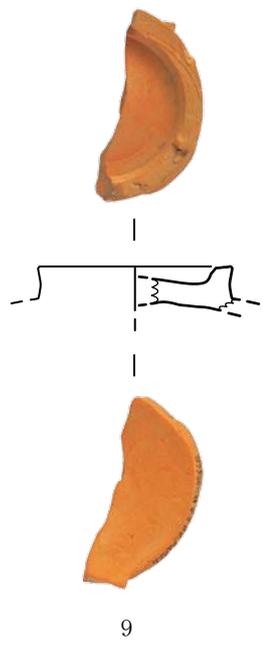


第 6 表 に-96 出土遺物観察一覧

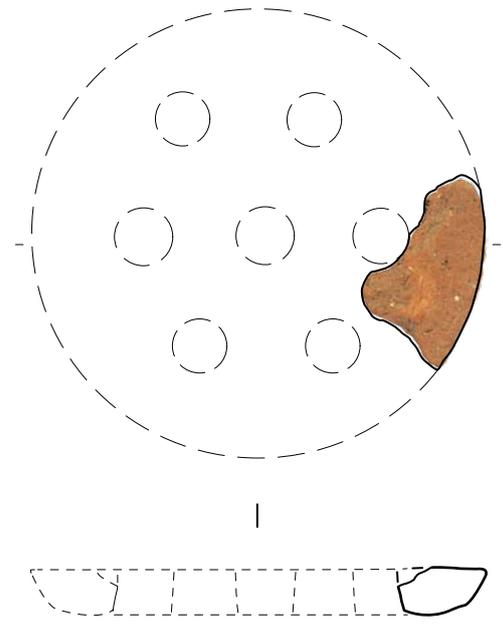
挿図番号 図版番号	種類	器種/部位	法量(cm/g)	胎土・材質	観察事項	出土地点
第26図 1 図版9の1	中国産染付	碗 胴部	—	白色 微粒子	外面：胴部に牡丹唐草文を配す。 18c末～19c 中葉。	6層(Ⅲ)
第26図 2 図版9の2	中国産染付	小碗 口縁部	—	白色 微粒子	外面：胴部に牡丹唐草文を配す。 内面：口縁部に二重の圏線。	6層(Ⅲ)
第26図 3 図版9の3	中国産染付	小杯 底部	底径 1.4	白色 微粒子	外面：草花文と烈点文を描く。	6層(Ⅲ)
第26図 4 図版9の4	本土産磁器	角皿 口縁部	器高 2.2	白色 微粒子	型による成形。	6層(Ⅲ)
第26図 5 図版9の5	沖縄産 施釉陶器	鉢 口縁部	口径 23.4	灰白 粗粒子 (2.5Y8/2)	外面：鉄釉、内面：白化粧の掛け分け。	6層(Ⅲ)
第26図 6 図版9の6	沖縄産 施釉陶器	碗 底部	底径 6.0	にぶい黄橙 (10YR7/3) 微粒子	内外面に鉄釉を掛ける。見込みにアルミナの 付着あり。	6層(Ⅲ)
第26図 7 図版9の7	青銅製品	小鉤	長さ 1.4 幅 1.55	青銅	『24.5』及び『十三』とあるのは足のサイズ と思われる。	4層(Ⅱ)
第26図 8 図版9の8	歯ブラシ	柄	最長 15.0 最厚 5.5 最幅 12.5	牛骨 淡黄 (2.5Y8/4)	『〇〇歯刷子 一號形』と彫刻されている。 柄尻のほぼ中央には内径0.5cmの穴を 穿つ。	6層(Ⅲ)
第27図 9 図版10の9	陶質土器	鍋 蓋	径 5.2	橙 微粒子 (5YR7/8)	胎土の中央部に2mmほどの厚みで焼成の際 の還元部分(灰白(10Y7/1))が残る。 上部に糸切り痕が残る。	6層(Ⅲ)
第27図 10 図版10の10	陶質土器	灰落とし	胴径 12.0	にぶい橙 (7.5YR6/4) 粗粒子	胎土には赤色粒・白色粒・黒色粒・雲母が 見られる。	6層(Ⅲ)
第27図 11 図版10の11	陶質土器	水鉢 口縁部	口径 20.0	灰白 微粒子 (5YR7/1)	極々少量の赤色粒・黒色粒・雲母が見られる。 胎土は全体にやや還元状態にある。	6層(Ⅲ)
第27図 12 図版10の12	貝製品	イモガイ科 マガキガイ	孔径縦 1.5 横 1.3 殻長 5.5 殻幅 3.3	—	多重の打割と若干の摩耗が見られる。	6層(Ⅲ)
第27図 13 図版10の13	貝製品	タカラガイ科 ハナビラダ カラ	孔径縦 2.0 横 1.6 殻長 2.75 殻幅 2.05	—	背面を除去し、扁平状にしている。穿孔面 は研磨されている。 水管溝周辺に摩耗が見られる。	6層(Ⅲ)



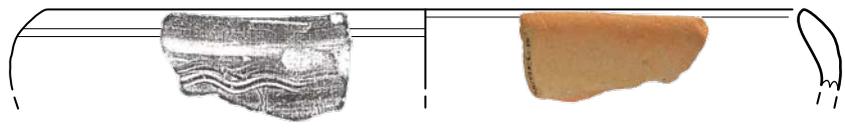
第26図(図版9) に-96出土遺物(1)



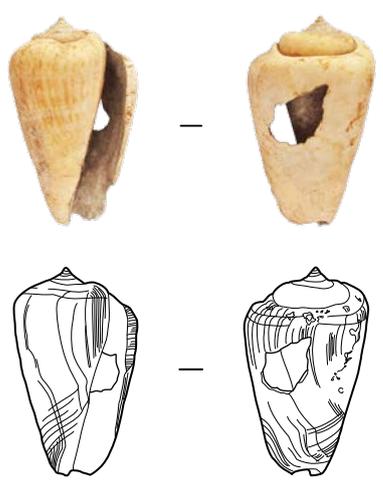
9



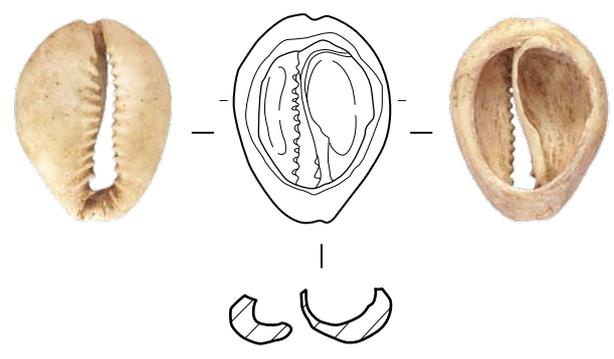
10



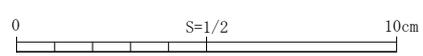
11



12



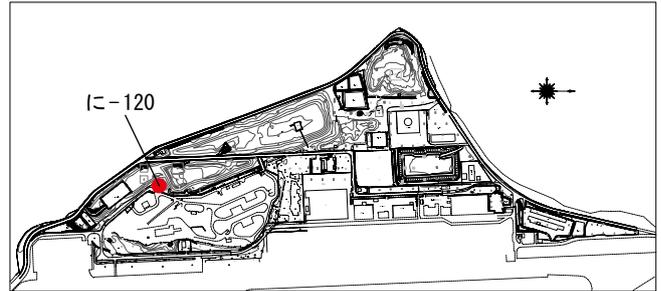
13



第 27 図 (図版 10) に-96 出土遺物 (2)

に-120

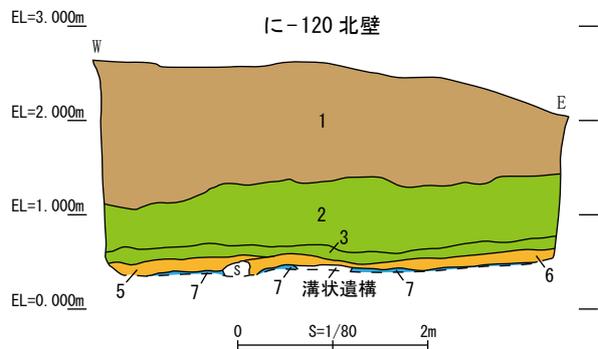
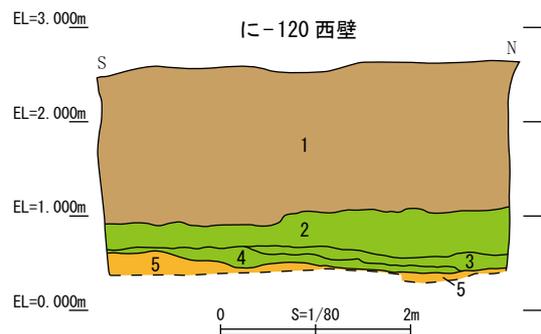
204 箇所の分布調査を行った中で唯一石列遺構の検出があった。石列は標高約 0.6m で北東から南西方向に向かっていた。また、石列遺構下からは幅約 0.6m で北西から南東方向に向かう溝状遺構が確認できた。上面に切石等は確認できなかったが、方位的に石列遺構と直行する可能性もあるため、屋敷にかかるものではないかと考えた。当該地周辺で発掘調査が行われる際には特に注意が必要である。石列を検出した 5 層からは陶磁器片と特に赤瓦の破片が多く出土した。また、6 層からは鉄製品（両サイドが錆により太くなっている。）が出土している。



に-120 西壁



に-120 北壁



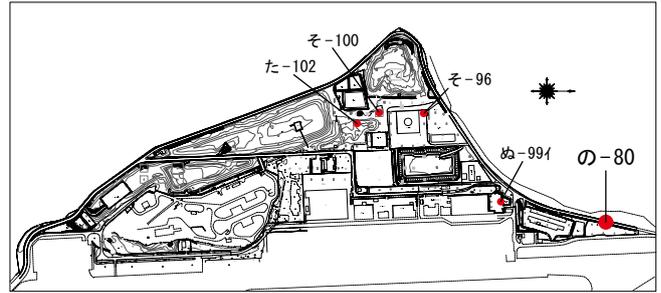
に-120 平面

<土層注記>

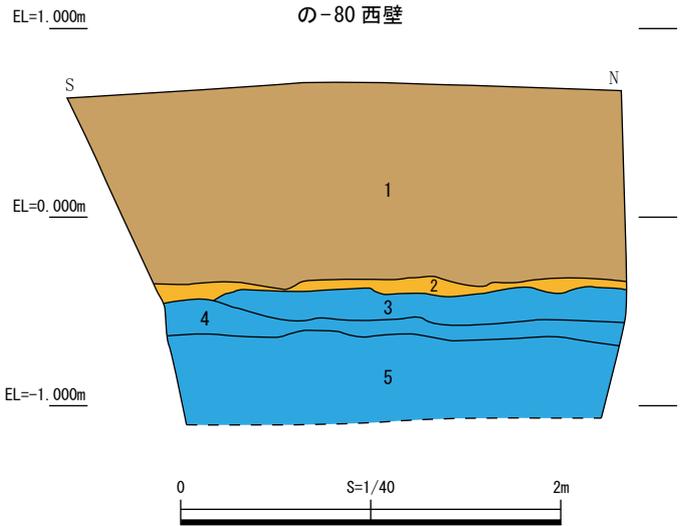
- 1層 - 客土(-) クチャ・ニービによる造成土、転圧された黄褐色の石灰岩礫造成土の順で堆積。
- 2層 - 白色砂礫層(-) 那覇飛行場の輾転土層。
- 3層 - にぶい黄褐色砂質土層(10YR4/3) 上層の2層のコンクリートがめり込んではいっている。瓦等の近代の遺物含む。粘性なし。しまり強い。
- 4層 - にぶい黄褐色砂質土層(10YR4/3) 瓦との遺物含む。3層よりも粒が粗くなる。粘性なし。しまり強い。
- 5層 - 灰黄褐色砂質土層(10YR5/2) 上面は遺構面であり石列遺構が検出された。層中からは瓦等の遺物が出土しており遺物包含層として捉えた。炭、石を含む。粘性なし。しまりやや弱い。
- 6層 - 5層+7層(-) 上層の5層と下層の7層が水の影響を受けスジ状に堆積している。当層も5層と同時期の遺物包含層として捉えた。粘性なし。しまり弱い。
- 7層 - 明黄褐色砂層(10YR6/6) 海浜層。上面で暗褐色砂のラインが確認され遺構と捉えた。しかしこの遺構は5層検出の石列遺構から直角に伸びるようにも見え、7層上面の遺構なのか5層検出石列遺構の掘り方の一部なのかは不明であった。粘性なし。しまり弱い。

の-80

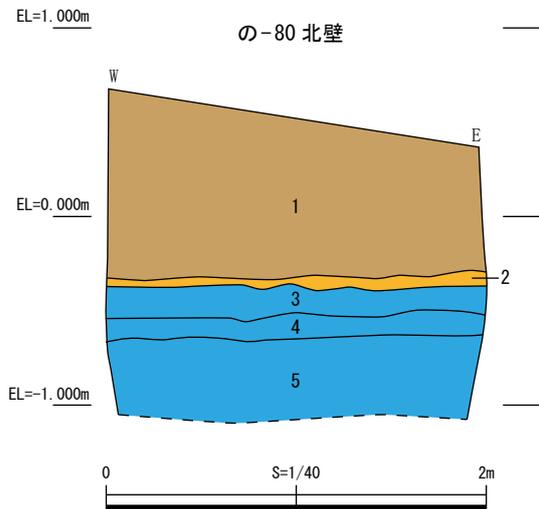
「の-80」では、2層（IV層）が戦前の表土と考えられたが、層厚は薄く平面精査は行えなかった。今回の分布調査で戦前の表土と思われる痕跡が検出できたのは5箇所（そ-96、そ-100、た-102、ぬ-99イ）である。いずれも海砂層の上面が変色していることから、旧表土であると考えた。遺物の出土は無かった。



の-80 西壁



の-80 北壁

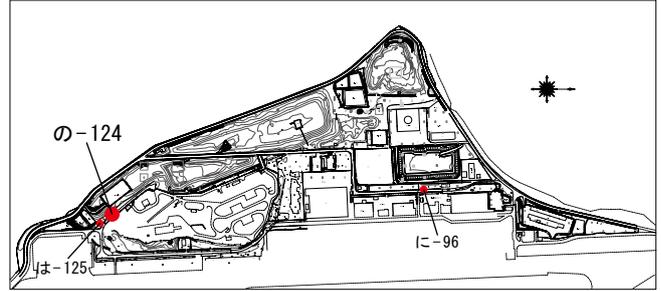


<土層注記>

- 1層 - 客土(-) 白色の輻輳層。
- 2層 - にぶい黄色砂層(2.5Y6/3) 4層が変色した層と思われることから戦前の旧表土層と思われる。粘性なし。しまり弱い。
- 3層 - 浅黄色砂層(2.5Y7/4) 海浜砂。細砂。粘性なし。しまりとても弱い。混入物は若干礫を含むぐらいである。
- 4層 - 灰色砂層(7.5Y5/1) 海砂。混入物殆どなし。粘性なし。しまりとても弱い。
- 5層 - 灰色混砂利砂層(N5/) 海砂。サンゴ礫、貝含む。粘性なし。しまりあり。

の-124

4層上面より不定形な形状をした黒褐色土が検出された。明確なプラン等は不明であるため、その性格も不明である。「に-96」の黒褐色土の検出状況と似ている。また、「は-125」からも性格不明の不定形な形状をした黒褐色土が出土した。参考までに土層と平面写真を掲載する。



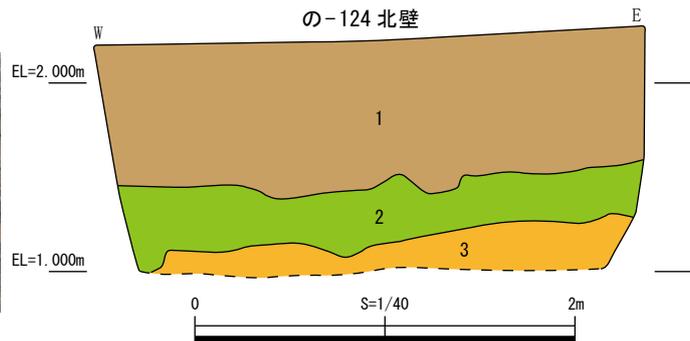
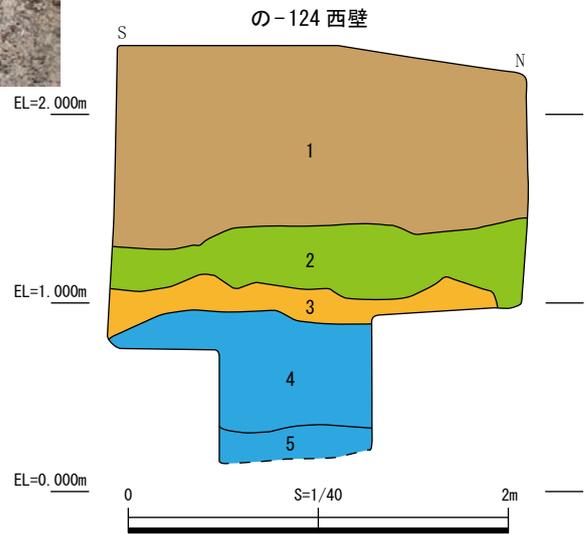
の-124 平面



の-124 西壁



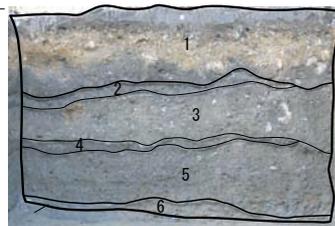
の-124 北壁



<土層注記>

- 1層 - 客土(-) 輾転された黄褐色の石灰岩礫造成土。
- 2層 - 黒褐色砂質土層(5YR3/1) 那覇飛行場の旧表土層と思われる。
アスファルト混入。
粘性ややあり。しまり強い。
- 3層 - 黄灰色砂層(2.5Y4/1) やや粗めの砂。粘性なし。
しまりややあり。「は-125」の5層と同じ。
- 4層 - 灰褐色砂層(7.5YR4/2) やや粗めの砂。砂利が混じる。
上面で黒褐色土の検出。粘性なし。
しまり弱い。
- 5層 - クチャ(-) 地山。

EL=2.00m

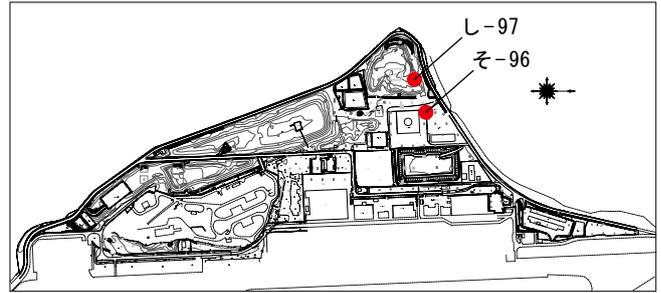


は-125 北壁



は-125 平面 (6層)

ここからは遺物包含層のみ確認できた試掘坑を紹介する。土質は砂質で『大嶺の今昔』に記載のあるとおり、村内は砂地であったことが窺えた。遺構は確認できなかったが、出土した遺物は総数約 1,560 点（瓦含まず）を数えた。そのほとんどが陶磁器類で沖縄産が 60%前後を占めた。



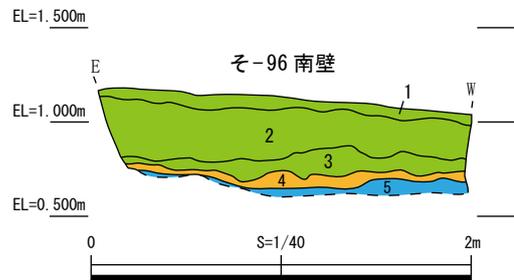
し-97・そ-96



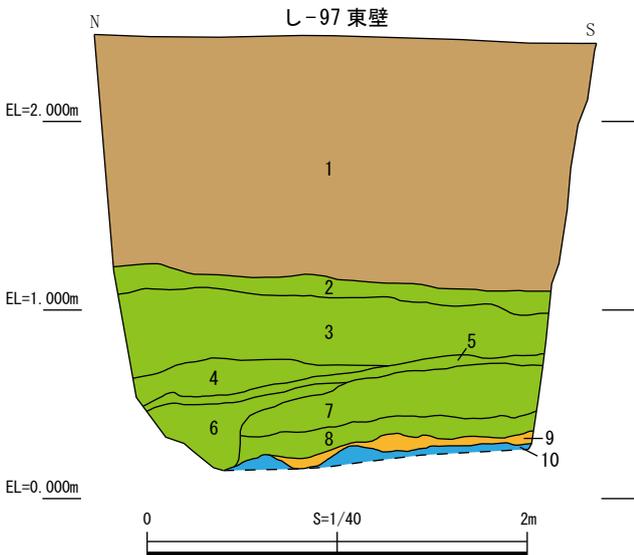
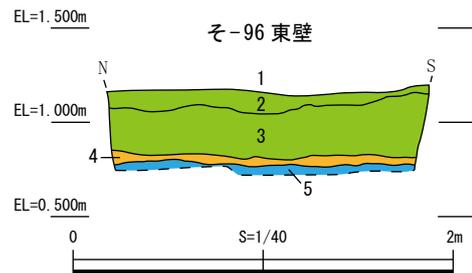
し-97 東壁



そ-96 南壁



そ-96 東壁



<土層注記>

- 1層 - 盛土(-)
- 2層 - オリーブ灰色土(2.5GY6/1) かたくしまり、やや粘質あり。
- 3層 - 灰色土サンゴ混じり(N4/) 青灰のコーラル。かたくしまり、コーラル多く含む。
那覇飛行場に伴う造成土。赤瓦など多く出土。
- 4層 - 灰白色砂(10Y7/1) しまりなく、サンゴ片少量混じる。
- 5層 - オリーブ灰色砂(10Y6/2) 不純物の混じりがない、きれいな砂層。
- 6層 - 灰オリーブ色土(7.5Y5/2) 銅線(電話線?)や電球の破片出土。
- 7層 - 灰白色砂(5Y7/2) しまりなく、小石が全体に散る。
- 8層 - 浅黄色砂(7.5Y7/3) しまりなく、サンゴ片多く混じる。
- 9層 - 灰色粗砂(N6/) 赤瓦近世陶磁器多く出土。
- 10層 - 灰白色粗砂枝サンゴ混じり(7.5YR8/1) 海砂層。枝サンゴ多く混じり、湧水多い。

<土層注記>

- 1層 - 客土(-) クチャ・ニービによる造成土。
- 2層 - 灰オリーブ色砂質土層(5Y4/2) 石、3層が混じる。粘性ややあり。しまりややあり。那覇飛行場の旧表土層。
- 3層 - 灰オリーブ混砂利土層(5Y5/2) 2層よりも含まれている石が多くなる。層全体の約60%が砂利含む。粘性有。しまりあり。
- 4層 - 褐灰色砂層(10YR5/1) 細砂。炭、サンゴ含む。粘性なし。しまり弱い。戦前の旧表土の可能性あり。
- 5層 - 灰白色砂層(7.5Y8/1) 海浜砂。やや粗めの砂。貝、サンゴ礫含む。粘性なし。しまり弱い。

そ-99・そ-100



そ-99 東壁



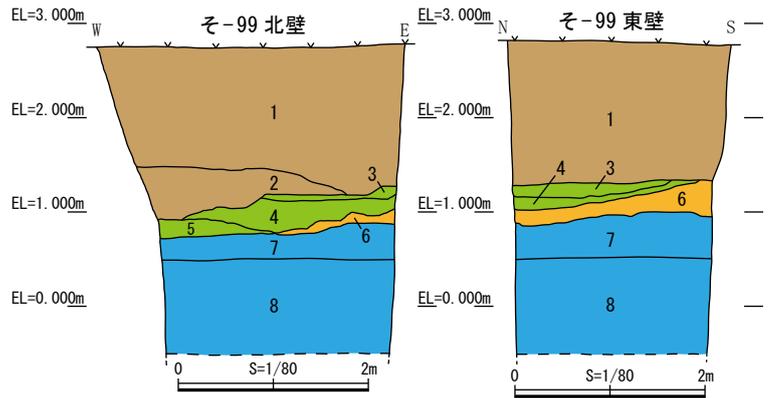
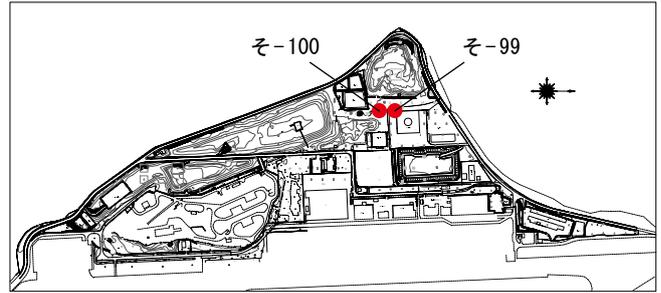
そ-99 北壁



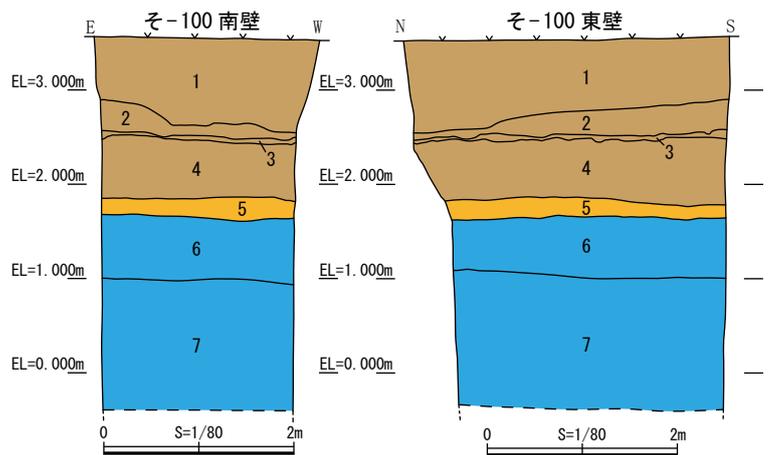
そ-100 東壁



そ-100 南壁



- <土層注記>
- 1層 - 灰オリーブ色(5Y5/2) 砂礫土。
 - 2層 - オリーブ褐色(2.5Y4/4) 砂礫土:炭、陶磁器片が出土。
 - 3層 - 黄褐色(10Y5/6) ニービ混粗砂:磁器片、瓦片が出土。
 - 4層 - 明褐色(7.5Y5/8) 粘質粗砂。
 - 5層 - 黄灰色(2.5Y4/1) 粗砂。
 - 6層 - 暗灰黄色(2.5Y4/2) 粗砂。
 - 7層 - 灰白色(5Y8/1) ビーチコーラル層:湧水が激しい。
 - 8層 - 灰白色(5Y7/1) 海砂:湧水が激しい。



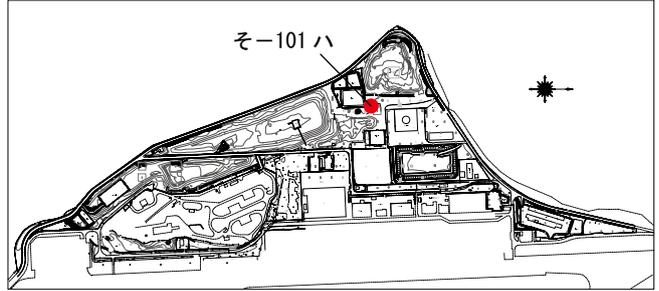
- <土層注記>
- 1層 - 黄褐色(10YR5/6) 砂礫土。
 - 2層 - 灰黄褐色(10YR6/2) 砂礫土。
 - 3層 - にぶい黄色(2.5Y6/4) ニービ混粗砂。
 - 4層 - 明黄褐色(2.5Y6/6) ニービ混粗砂。
 - 5層 - 灰白色(2.5Y8/1) 粗砂:この層より湧水が始まる。
 - 6層 - 青灰色(10BG6/1) ビーチコーラル。
 - 7層 - 灰オリーブ色(7.5Y5/2) ビーチコーラル層:湧水が激しい。



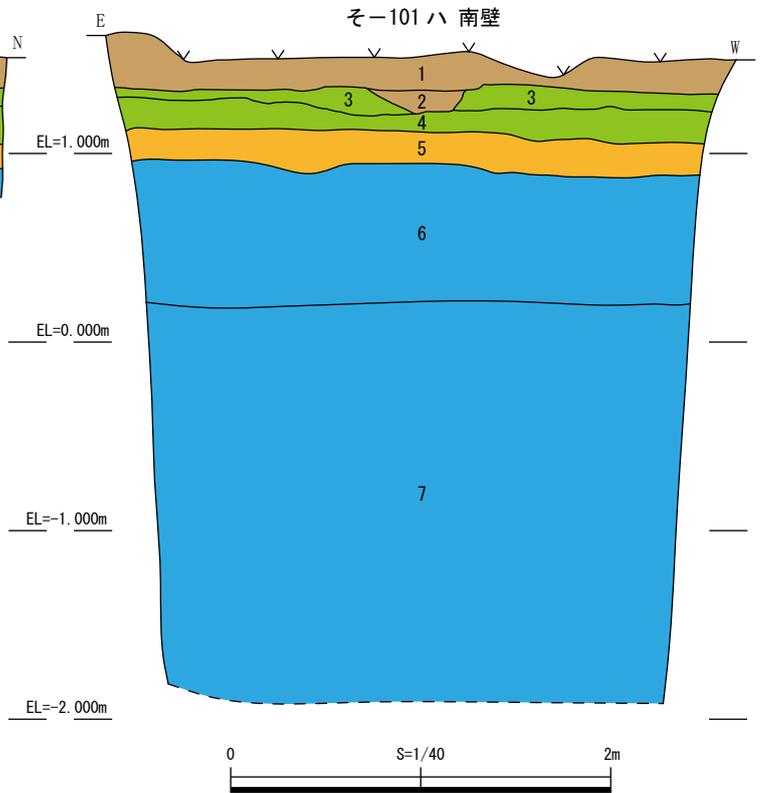
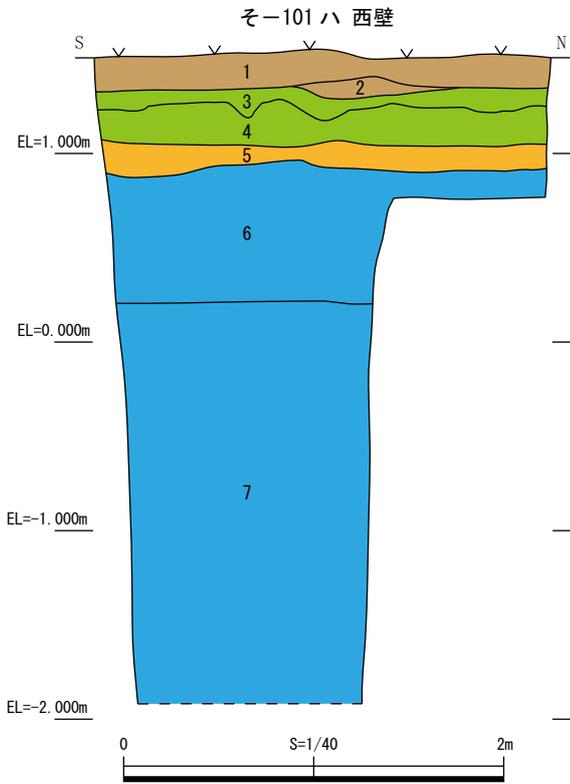
そ-101ハ 南壁



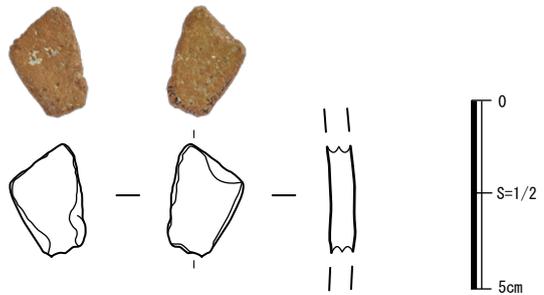
そ-101ハ 西壁



- <土層注記>
- 1層 - 灰オリーブ色(5Y5/2) 砂礫土。
 - 2層 - 浅黄色(5Y8/3) 粗砂:南西へ溝がはしる。
 - 3層 - 灰色(5Y4/1) 粗砂。
 - 4層 - 黄褐色(2.5Y5/6) 粗砂。
 - 5層 - 青灰色(5B5/1) 粗砂。
 - 6層 - 浅黄色(2.5Y7/3) ビーチコーラル:土器片が出土。
 - 7層 - 灰白色(10Y7/1) ビーチコーラル:湧水が激しい。



そ-101ハ 掘削状況



5層出土の土器片：胴部片のため詳細は不明。
後期土器だと思われる。

つ-101・つ-102・つ-103



つ-101 東壁



つ-101 南壁



つ-102 東壁



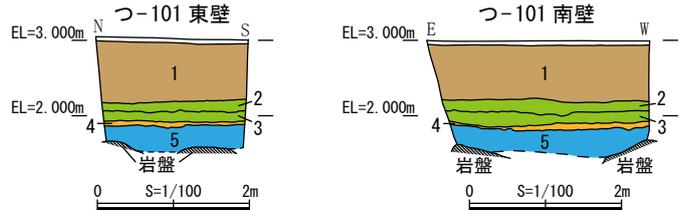
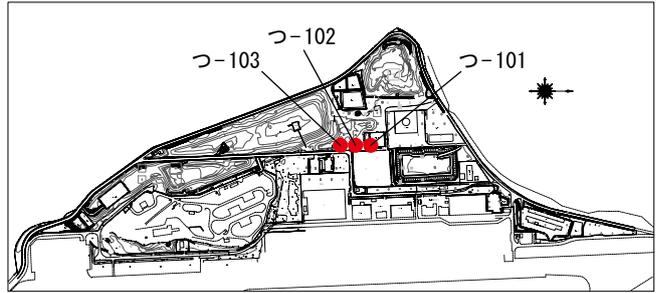
つ-102 南壁



つ-103 東壁

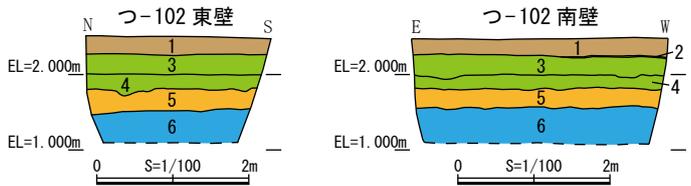


つ-103 南壁



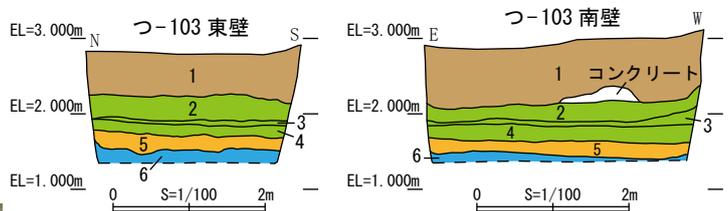
<土層注記>

- 1層 - 盛土(-)
- 2層 - 路盤材(-) コーラルの路盤材。造成時の輾車で、かたくしまっている。
- 3層 - 橙色土礫混じり(7.5YR6/8) φ30cmほどの石灰岩礫を敷き均した層。
- 4層 - 灰色砂(N6/) 固くしまり炭化物の粒が少量混じる。造成時に輾転されているが、包含層に相当する層か。
- 5層 - にぶい黄橙色粗砂枝サンゴ混じり(10YR7/4) くすんだ色をしており自然堆積とは思われないが遺物等は見られなかった。



<土層注記>

- 1層 - 表土(-) 2層 - タール(-) 3層 - 路盤材(-) コーラル。
- 4層 - 明赤褐色粘質土礫混じり(5YR5/8) 30cmほどの角のついた石灰岩礫が敷かれている。間には小さい礫やマージが詰められている。
- 5層 - 黒褐色砂質土(2.5Y3/2) 近世陶磁器が出土。
- 6層 - 灰白色砂サンゴ混じり(2.5Y8/1) 海砂の層。枝サンゴや貝が多く混じる。

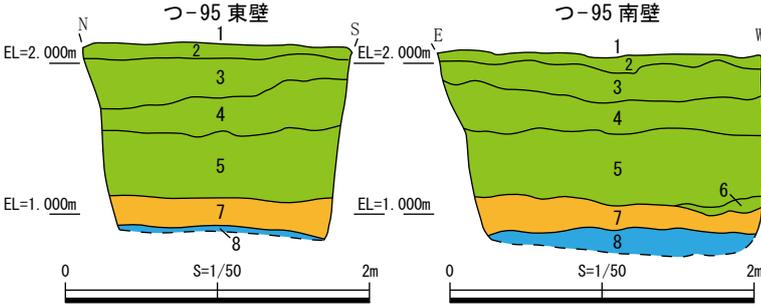
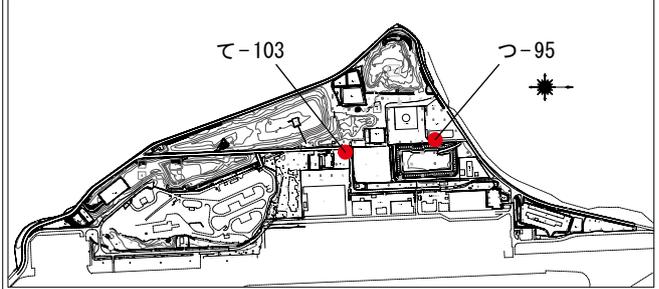


<土層注記>

- 1層 - 表土(-) 盛土。 2層 - 造成土(-)
- 3層 - 灰色砂質土(N4/) 那覇飛行場に伴う旧表土。赤瓦や陶器など出土。コーラルの上にあることから一時的に表土であったと思われる。
- 4層 - 灰白色砂枝サンゴ混じり(5Y7/2) 枝サンゴを多く含む造成土。
- 5層 - にぶい黄色土層(2.5Y6/4) 赤瓦や陶器など出土。礫や黒色土などが不規則に入り、攪乱されている模様。
- 6層 - 灰白色粗砂(2.5Y8/1) 海砂の砂。φ2~3cmほどの石灰岩のくだけたものが混じる。直下にピーチロックが面的に広がる。

つ-95・つ-103

<土層注記>
 1層 - 客土(-) クチャ・ニービによる造成土。
 2層 - アスファルト+輾転土(2.5Y3/2) 那覇飛行場に伴う旧表土。上面にはアスファルトが敷かれている。粘性なし。しまりあり。下部は石灰岩を路盤材として輾転されている。
 3層 - 灰砂礫層(-) 輾転層と思われるがしまりがやや弱い。粘性なし。
 4層 - オリーブ褐色砂層(2.5Y4/3) 拳から人頭大の石を敷き詰められている砂層。石をグリ石として利用して輾転をかけた造成土と思われる。粘性なし、しまりあり。
 5層 - 白色砂礫層(-) 輾転層。
 6層 - 浅黄色砂層(2.5Y7/3) 細砂。
 7層 - 暗灰黄色砂層(2.5Y7/4) 粘質土がまじる。粘性ややあり。しまりあり。遺物の量は少ないが、土層の様相から大嶺村時代の遺物包含の可能性あり。
 8層 - 浅黄色混砂利砂層(2.5Y7/4) 海浜砂。粗砂。サンゴ礫まじる。粘性なし。しまり弱い。



つ-95 東壁



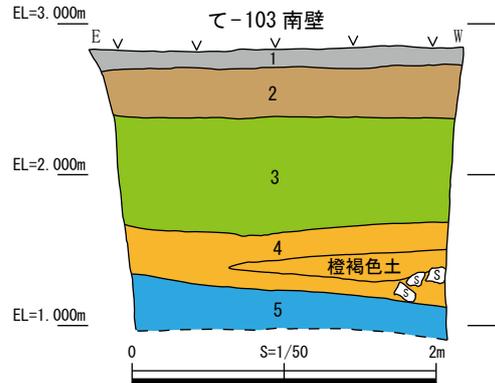
て-103 南壁



つ-95 南壁

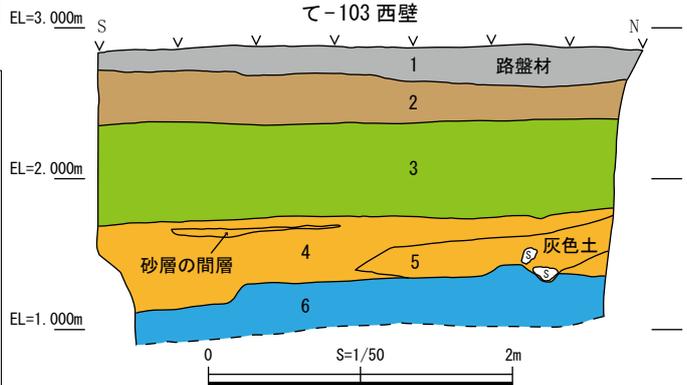


て-103 西壁



て-103 西壁

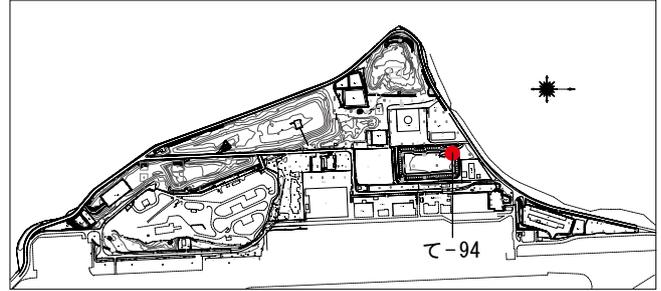
<土層注記>
 1層 - 灰白砂コーラル混じり(2.5Y8/1) 路盤材。
 2層 - 黄褐色土(10YR5/6)+オリーブ灰色(10Y4/2)混じり。粘質の黄褐色土にクチャが多く混入され、礫も含む、造成土。しまりは良し。
 3層 - 灰白色砂コーラル混じり(2.5Y8/2) 遺物を包含する層、しまりは良し。コーラルが多く含まれる。
 4層 - 黄褐色砂(2.5Y5/3)+暗オリーブ灰砂(5GY4/1)混じり。遺物を包含する層、しまり良く、炭なども混ざる。南壁の中央～西側に橙褐色の土が入るが、西側にのびておらず、部分的なものである。また西壁には砂の層が薄く入る。4層は造成土と思われる。遺物あり。
 5層 - 暗オリーブ灰砂(5GY4/1) 遺物を包含する層、4層と同じ造成土と思われる。この部分だけ灰が混ざり、黒っぽくなっている。遺物あり。
 6層 - 灰白色砂(2.5Y8/2) 枝サンゴを多く含む、しまり良し。



て-94



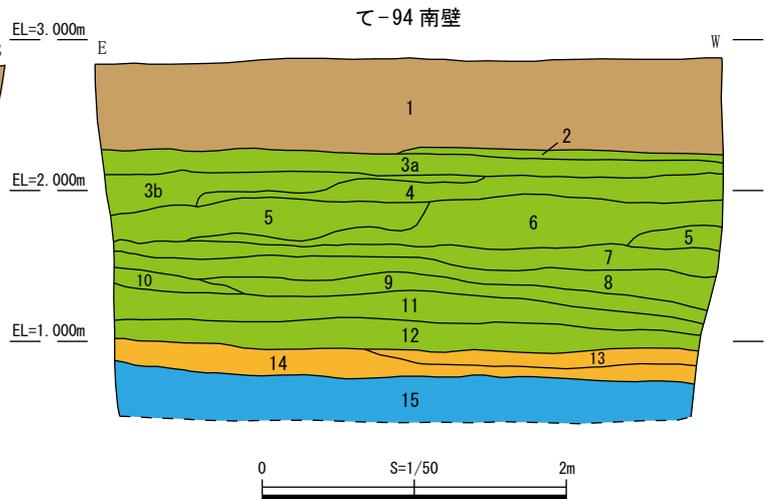
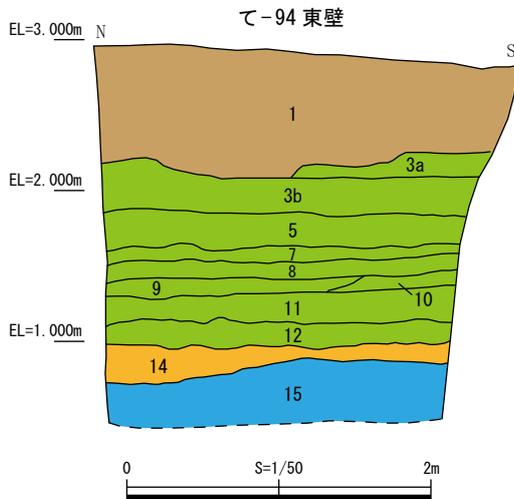
て-94 東壁



て-94 南壁



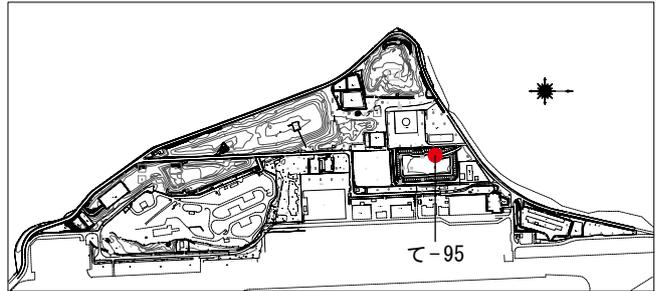
6層出土遺物



- <土層注記>
- 1層 - 表土(-)
 - 2層 - タール(-)
 - 3a層 - 路盤材(-) 造成土。コーラルにこぶし大の礫やアスファルト塊が混じる。3bに比べやや黒っぽい。
 - 3b層 - 路盤材(-) 造成土。コーラルにこぶし大の礫やアスファルト塊が混じる。
 - 4層 - 黄褐色土層(2.5Y5/3) 砂質強く、ところどころ青灰色粘質土(クチャ)のブロックが混じる。「と-95」の4層と同質。
 - 5層 - 黄色砂礫層(2.5Y7/8) しまりなく人頭大の礫がつまっている。
 - 6層 - 灰色砂層(N6/) 近世陶磁器やガラス片など出土。層の上部に灰白色の砂が互層に入る。
 - 7層 - 灰白色粗砂層(2.5Y8/1) しまりなくφ5cmほどの石混じる。
 - 8層 - 青灰色砂シルト混じり層(5BG5/1) 湧水多く、しまりなし。
 - 9層 - 明青灰色シルト層(10BG7/1) クチャと海砂が混ざり合った層。
 - 10層 - 灰白色砂層(5Y7/2) 不純物少なく、しまりなし。
 - 11層 - 灰色砂層(5Y6/1) シルト質が強く、やや粘質あり。針金出土。
 - 12層 - 灰色砂礫混じり層(N6/) φ5cmほどの礫多く、しまりなし。
 - 13層 - 灰色シルト層(N4/) 粘性強く、しまりあり。
 - 14層 - 灰色砂層(N4/) φ5~10cmほどの礫に赤瓦などの遺物が含まれる。
 - 15層 - 灰白色砂(10YR7/1) 海砂層。枝サンゴやφ5cmなどの砂量混じる。

て-95

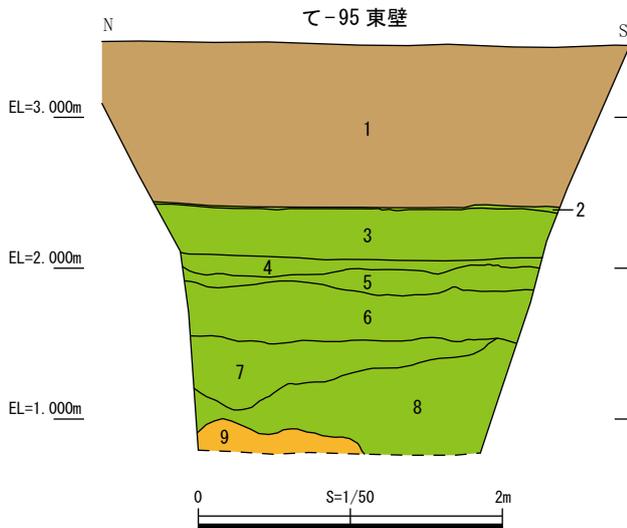
「て-94」「て-95」ともに遺物包含層上層に、数度に渡って土砂を入れて造成した様子が確認できた。また、「て-95」では人頭大の礫の中に近世陶磁器や赤瓦が多く混じっていたため、溝や流路などの落ち込みを整地する際に、瓦礫等が埋められたのかもしれない。



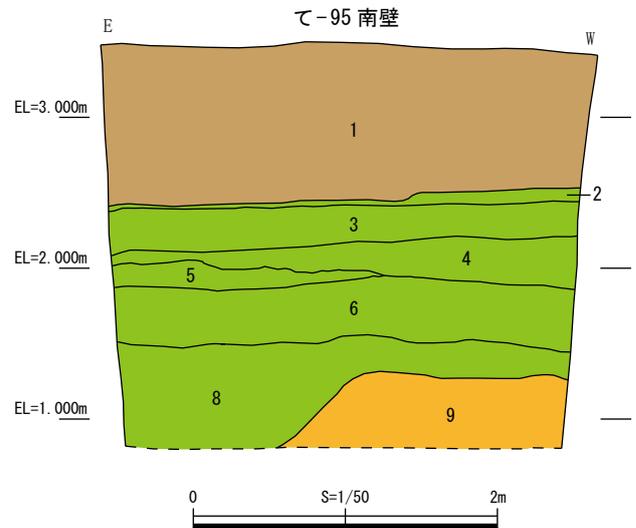
て-95 東壁



て-95 南壁



て-95 東壁



て-95 南壁



9層出土遺物

<土層注記>

- 1層 - 表土(-)
- 2層 - アスファルト(-)
- 3層 - 路盤材(-) コーラルの造成土。やや黒っぽくなっている層。こぶし大の礫やアスファルト塊混じる。
- 4層 - 灰色土層(5Y5/1) シルト質強く粘質強い。近世陶磁器片少量出土。旧表土もしくは造成土か。
- 5層 - 灰白色粗砂層(5Y7/1) しまりなく枝サンゴ、砂利多く混じる。
- 6層 - 灰白色粗砂サンゴ混じり層(7.5Y8/1) 枝サンゴが多く混じる海砂層。
- 7層 - 暗青灰色粘質土層(10BG4/1) 黄褐色のブロックが全体に入り、攪乱されている。
- 8層 - 灰オリーブ粗砂シルト混じり層(5Y5/2) しまりなくφ2cmほどの小石が全体に散る。
- 9層 - 礫層(-) 人頭大の礫の間に近世陶磁器、赤瓦など多く出土。

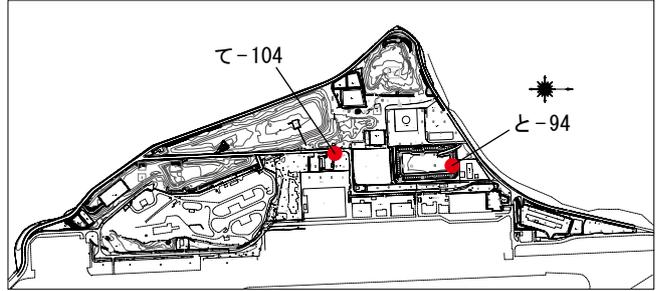
て-104・と-94



て-104 西壁

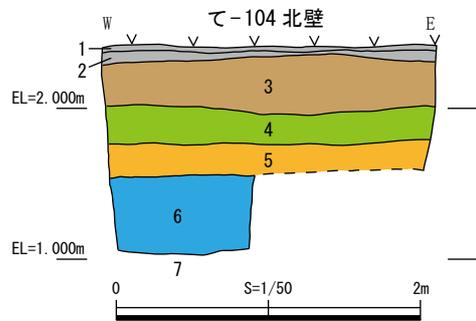
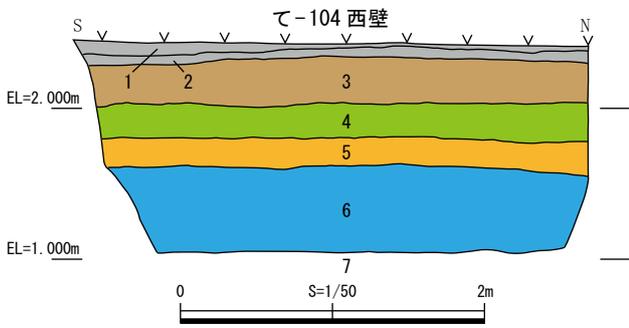


て-104 北壁



<土層注記>

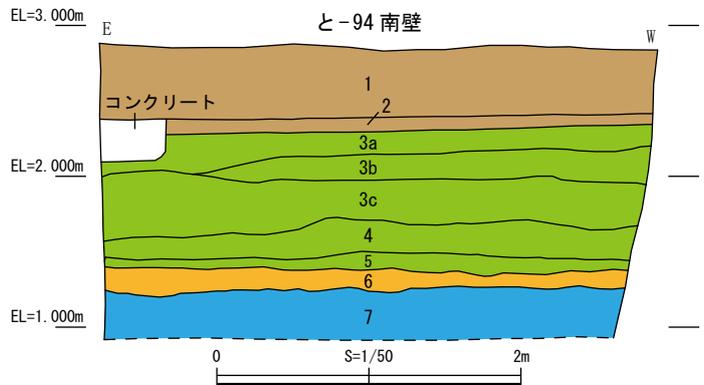
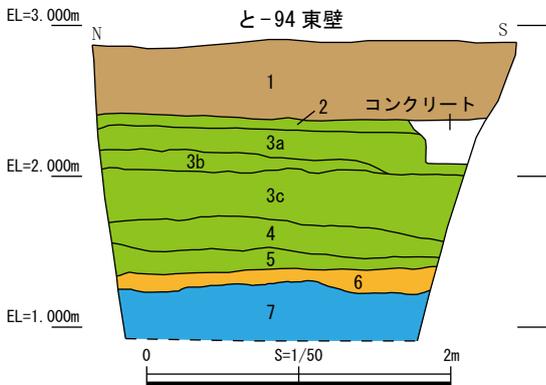
- 1層 - アスファルト(-)
- 2層 - 淡黄色砂コーラル(2.5YR8/4) 路盤材。
- 3層 - 明黄褐色シルト(2.5YR6/6)
- 4層 - オリーブ黄色砂コーラル混じり(5Y6/3) 非常に締められる。
2~3cmの小礫を多く含む。
- 5層 - オリーブ褐色砂(2.5Y4/4) 遺物を包含する層。黄褐色砂(10YR5/6)が
ランダムに混じりマーブル状を呈する。
- 6層 - 浅黄褐色砂(10YR8/3) しまりはとても良。
- 7層 - 灰白色砂(10YR8/2) 枝サンゴを多く含む。



と-94 東壁



と-94 南壁



<土層注記>

- 1層 - 表土(-)
- 2層 - アスファルト(-)
- 3a層 - 路盤材(-)
- 3b層 - 路盤材(-)
- 3c層 - 路盤材(-)
- 4層 - 灰オリーブ色砂質土(5Y5/3) 粗砂やシルト質土がところどころシマ状に入る。
- 5層 - 青灰色土層(10BG5/1) かたくしまり、こぶし大の礫が全体に混じる。
- 6層 - 明黄褐色砂層(10YR6/6) 近世陶磁器、赤瓦など出土。
- 7層 - 灰白色砂層(5Y7/2) 海浜の砂層、枝サンゴ、貝などが少量だが混じる。

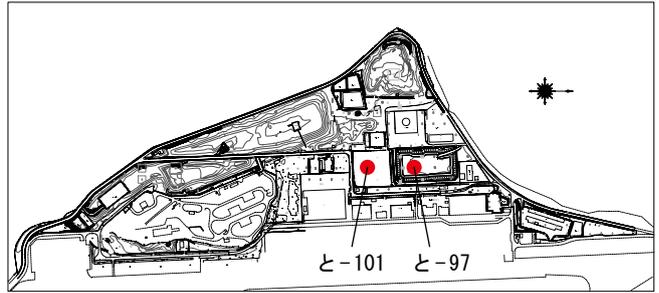
と-97・と-101



と-97 東壁



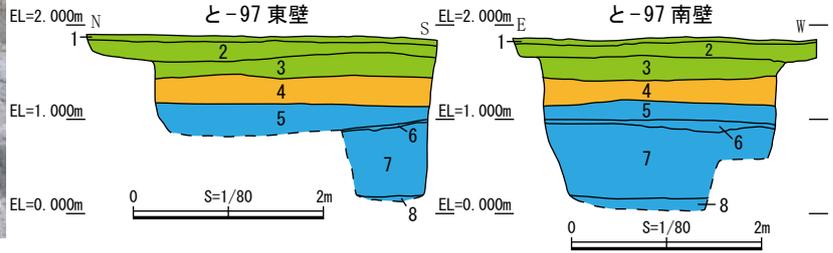
と-97 南壁



と-101 と-97

<土層注記>

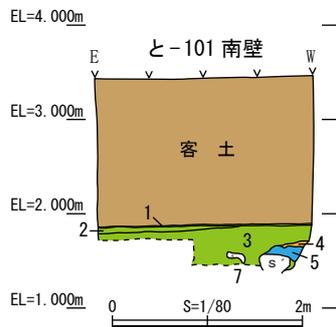
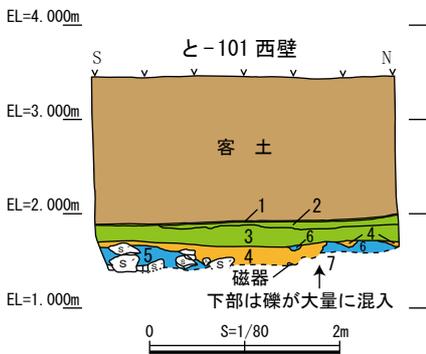
- 1層 - 黒褐色土(10YR3/1) 腐植土。
- 2層 - オリーブ黒色土(7.5Y3/1) 遺物を少量含む。
- 3層 - 黄褐色砂(2.5Y5/4) 遺物を中量包含する。しまりは悪い。
- 4層 - 暗灰黄色砂(2.5Y4/2) 遺物を多量包含する。しまりは悪い。
- 5層 - 浅黄橙色砂(10YR8/3)
- 6層 - 明黄褐色砂(10YR6/6) 薄く堆積。
- 7層 - にぶい黄色砂サンゴ混じり(2.5YR6/3) しまり悪い。
- 8層 - 灰色砂(10Y5/1) 水が湧く。



と-101 掘削後



と-101 西壁



と-101 南壁

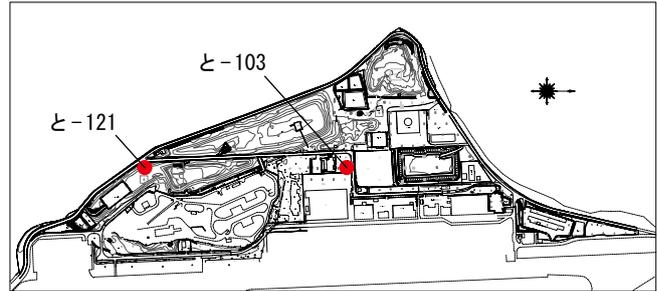
<土層注記>

- 1層 - 黒色土(7.5Y2/1) 腐植土。
- 2層 - にぶい黄褐色砂(10YR4/3) 質は粗く、しまりは悪い。遺物を包含する。
- 3層 - 灰黄褐色砂(10YR4/2)+明黄褐色砂(10YR7/6)+暗灰黄色(2.5Y4/2)混じり。上面はしまりが悪くもろいが、下面(特に灰黄色層)はしまりよく固い。遺物を包含する層。
- 4層 - 灰黄褐色砂(10YR4/2) 炭が少々混じる。遺物も少量混じる。
- 5層 - 褐色砂(10YR4/4) シルト混じり砂。グリッド南西のみに堆積。
- 6層 - 明黄褐色砂(10YR7/6) 瓦が一点出土。しまりは比較的良い。
- 7層 - 石灰岩層(-) 40cm以上の石灰岩礫が多量に出土。それぞれの礫間に混入するものは無く隙間(空洞)をもっている。30cm程度の厚さで堆積。

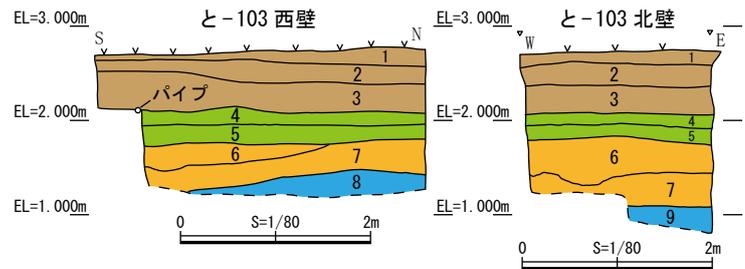
と-103・と-121



と-103 西壁



と-103 北壁



<土層注記>

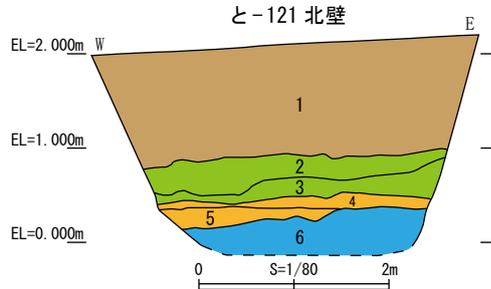
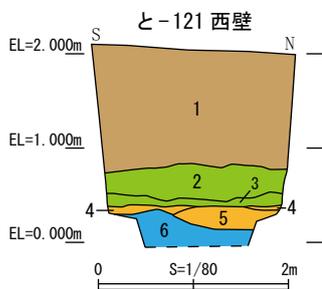
- 1層 - 灰色土(5Y4/1) 現表土。
- 2層 - 灰オリーブシルト(7.5Y4/2)
- 3層 - 灰オリーブシルト(5Y5/3)
- 4層 - 灰白色砂コーラル混じり(7.5Y8/1) 堅く締まっている。誘導路？
- 5層 - オリーブ褐色砂(2.5Y4/4) 遺物が少量含まれる。しまりは良。
- 6層 - 淡黄色砂(2.5Y8/4) 遺物が包含される層。しまりよいが質が粗い。
- 7層 - 灰色砂(5Y5/1) 遺物が包含される層。しまり良い。炭が少量混じる。
- 8層 - 浅黄色砂(2.5Y7/4)
- 9層 - 浅黄色砂(2.5Y7/3) 水が湧く。



と-121 西壁



と-121 北壁

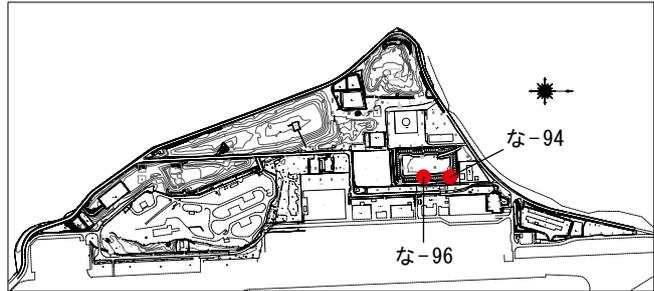


<土層注記>

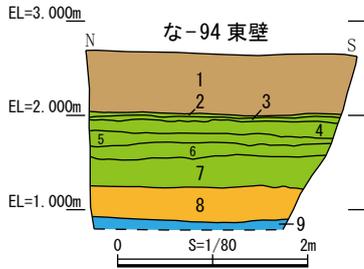
- 1層 - 客土(-) クチャ・ニービの造成土をメインに攪乱土やアスファルトガラで構成される。
- 2層 - 暗灰黄色土層(2.5Y5/2) 大きい石等が混じり攪乱色強い。近現代の遺物を含むことから那覇飛行場に伴う埋土と思われる。粘性あり。しまりややしまる。
- 3層 - 灰色砂質土層(5Y4/1) 瓦等の遺物を若干含む。粘性殆どなし。しまりあり。
- 4層 - 暗灰黄色砂層(2.5Y5/2) やや細かめの砂層。礫、石を含むが攪乱色は少ない。遺構はなく層の状況からも遺物包含層にはできないが、大嶺村時代の旧表土の可能性が考えられる。粘性なし。しまりやや弱い。
- 5層 - 灰黄色混砂利砂層(2.5Y6/2) 量的には多くないが近代の遺物を含むことから大嶺村時代の堆積層と判断した。粘性なし。しまりやや弱い。
- 6層 - 黄灰色混砂利砂層(2.5Y6/1) 海砂。粗砂。サンゴ礫を含む。下部に行くほどサンゴ礫は大きく量も多くなる。粘性なし。しまりあり。

な-94・な-96

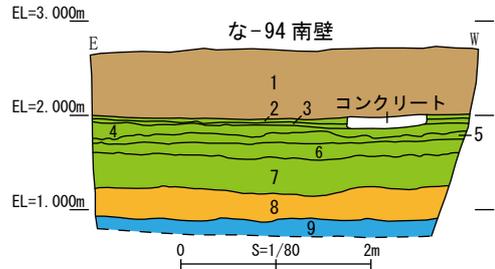
<土層注記>
 1層 - 表土(-) 2層 - アスファルト(-) 3層 - 路盤材(-)
 4層 - 路盤材(-) 那覇飛行場に伴う路盤材のコーラル。輻射により固くしまる。
 5層 - 路盤材(-)
 6層 - 灰色砂層(5Y5/1) 旧表土。那覇飛行場以前の表土。セルロイド片や磁器など出土。
 7層 - 灰白色粗砂層(5Y7/1) 自然堆積層か造成土かは不明だが、8層で近世近代(ガラス含む)の遺物が出土していることから造成土としてよいのではない。
 8層 - 明黄褐色砂層(10YR6/6) ややしまり。φ5mmほどの炭化物多く含む。陶磁器片や赤瓦など出土。
 9層 - 灰白砂層(5Y7/2) 海浜の砂層、枝サンゴ、貝などが少量だが混じる。



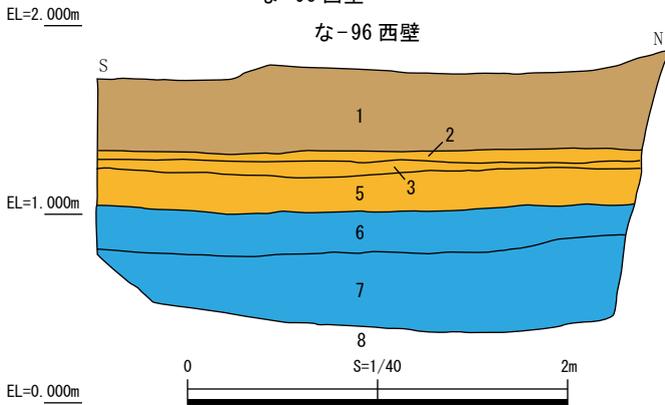
な-94 東壁



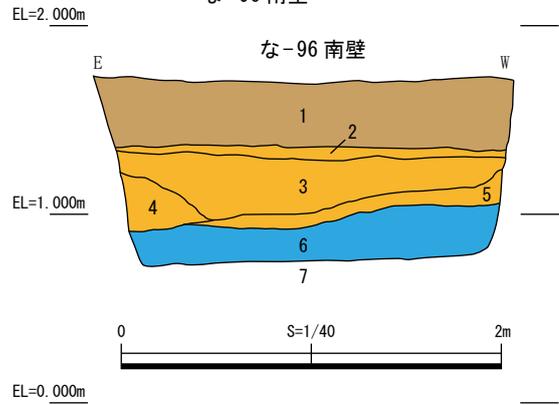
な-94 南壁



な-96 西壁



な-96 南壁



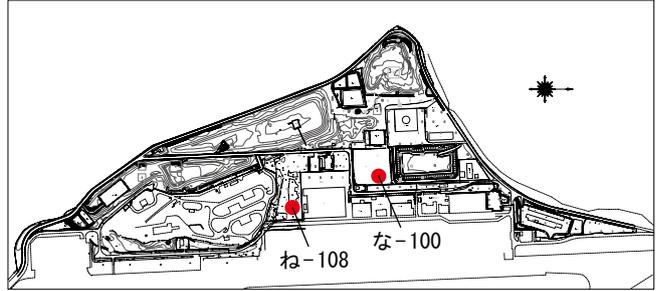
<土層注記>
 1層 - オリーブ灰色シルト(10Y4/2)
 2層 - 黒褐色土(2.5Y3/1) 腐植土。
 3層 - 暗灰黄砂(10YR5/4) 遺物を包含する層。しまりは悪い。
 4層 - にぶい黄褐色砂(10YR5/4) 遺物を包含する層。グリッド東側のみ堆積。

5層 - オリーブ黒色砂(5Y3/1) 遺物を包含する層。西側にかけて厚く堆積。
 6層 - 灰白色砂(5Y8/1) しまり良。
 7層 - 灰白色砂枝サンゴ混じり(5Y8/1) 二枚貝(リュウキュウシラトリ)が合弁状態で多く出土(自然堆積?)
 8層 - オリーブ灰色砂(2.5GY6/1) 水が湧く。

な-100・ね-108



な-100 西壁

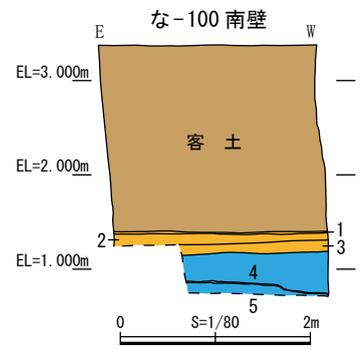
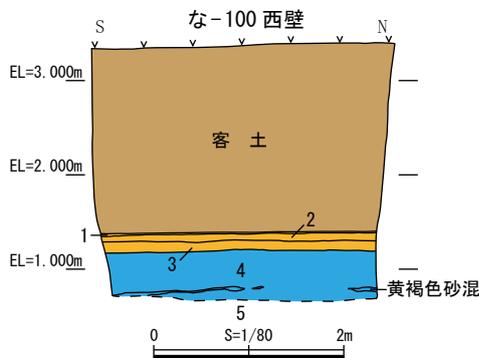


<土層注記>

- 1層 - 黒褐色(2.5Y3/1) 腐植土。
- 2層 - 灰色砂(10YR4/1) 堅くしまっている。遺物が少量出土。
- 3層 - オリーブ黒色砂(10Y3/2) シルト混じり。遺物少量出土。
- 4層 - 灰白色砂(2.5Y8/1) 不定に明黄褐色砂(2.5Y6/8)が混じる。
- 5層 - 緑灰色砂(7.5GY6/1) 水が湧く。



な-100 南壁



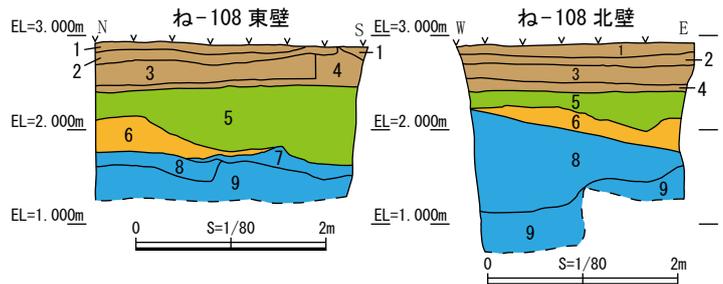
ね-108 東壁



ね-108 北壁

<土層注記>

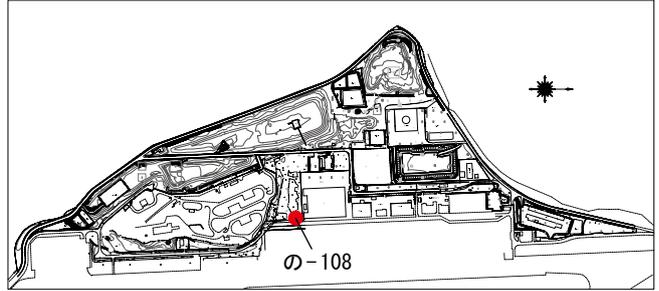
- 1層 - 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 現表土。
- 2層 - 明黄褐色砂コーラル混じり(2.5Y7/6) 造成層と思われる。
- 3層 - 灰白色コーラル混じり(2.5Y7/1) 2層造成のための埋土と思われる。
- 4層 - 灰色シルト(7.5Y4/1)
- 5層 - 淡黄色砂コーラル混じり(2.5Y8/3) しまり良。
- 6層 - オリーブ褐色砂(2.5Y4/4) しまり良。遺物包含南東側へのみ堆積する遺物包含層。
- 7層 - 黒褐色砂(2.5Y3/1)
- 8層 - 浅黄色砂(2.5Y7/4)
- 9層 - 灰色砂(7.5Y6/1)



の-108

<土層注記>

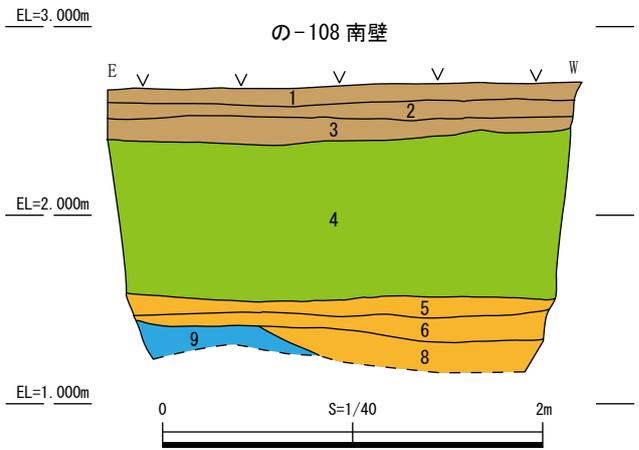
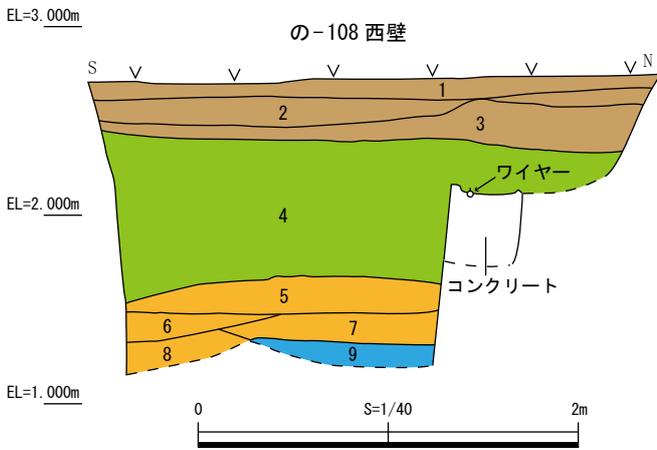
- 1層 - 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 現表土。
- 2層 - 淡黄色砂(2.5Y8/3) 2~4cmの石灰岩混じり。
- 3層 - 灰色シルト(5Y5/1)
- 4層 - 淡黄色砂コーラル混じり(2.5Y8/4) 非常に固く締められる。誘導路？
- 5層 - 暗オリーブ砂(5Y4/4) 遺物を包含する。しまりは悪い。
- 6層 - オリーブ灰砂(10Y4/2) 遺物を包含する。しまりは良。炭・腐植木片を混入。
- 7層 - 灰白色砂(5Y7/2)
- 8層 - 灰砂枝サンゴ混じり(-) 遺物を少量包含する。
- 9層 - オリーブ灰砂(2.5Y6/1)



の-108 西壁



の-108 南壁



埋設物検出状況（南から）



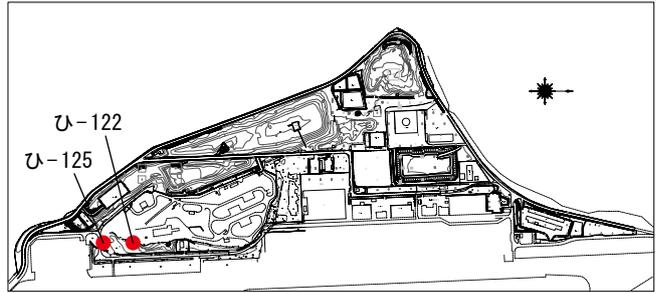
5層検出状況



6層・7層検出状況

ひ-122・ひ-125

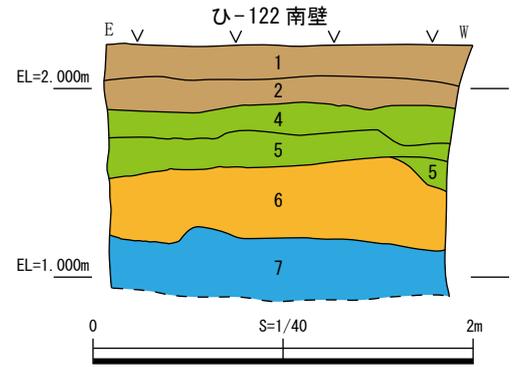
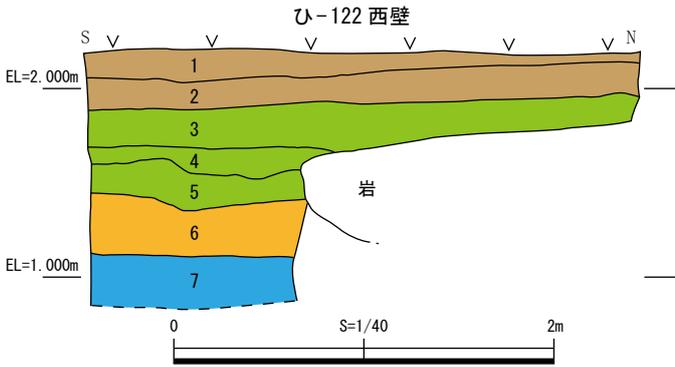
<土層注記>
 1層 - 褐色土(7.5YR4/1) 現表土しまり悪い。遺物あり。
 2層 - にぶい橙砂(7.5YR7/3) しまり良く、灰色のクチャのブロックや、小礫を含む造成土。
 3層 - 暗褐色土(7.5YR3/3) しまり良く、2層同様クチャや小礫を含むが礫は2層より大きめ。本層も造成土と思われる。
 4層 - 褐色土(10YR4/6) しまりは良好。粘質の層。遺物あり。
 5層 - 褐色土(7.5YR4/6) 粘質でサンゴ礫が混ざる。旧表土と思われる。
 6層 - 暗灰黄色土(2.5Y4/2) サンゴ礫を5層同様含んでいる。しまりよし。遺物あり。
 7層 - 灰黄色サンゴ混じり砂(2.5Y6/2) サンゴを大量に含む。しまりもよし。



ひ-122 西壁



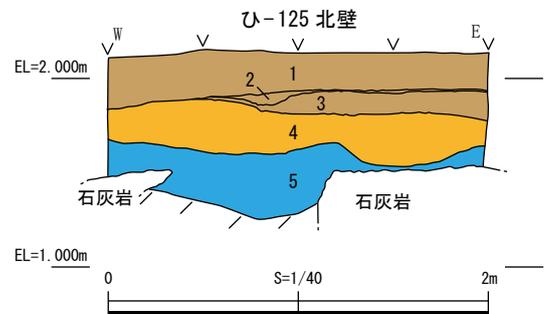
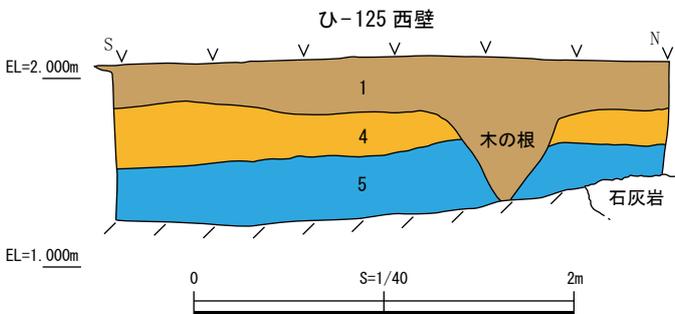
ひ-122 南壁



ひ-125 西壁



ひ-125 北壁



<土層注記>
 1層 - 暗褐色土(10YR3/3) 表土層。
 2層 - 黒色土(10YR2/1) 炭層。薄く堆積。
 3層 - 黄褐色砂(2.5YR5/4) しまり良。
 4層 - 灰黄褐色砂(10YR4/2)
 5層 - にぶい黄褐色砂(10YR5/4) 地山の石灰岩。

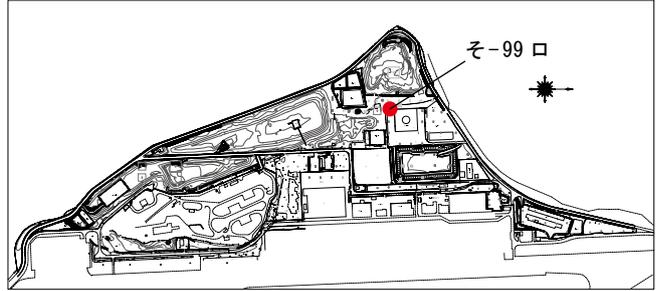
小禄海軍飛行場跡（そ-99口）



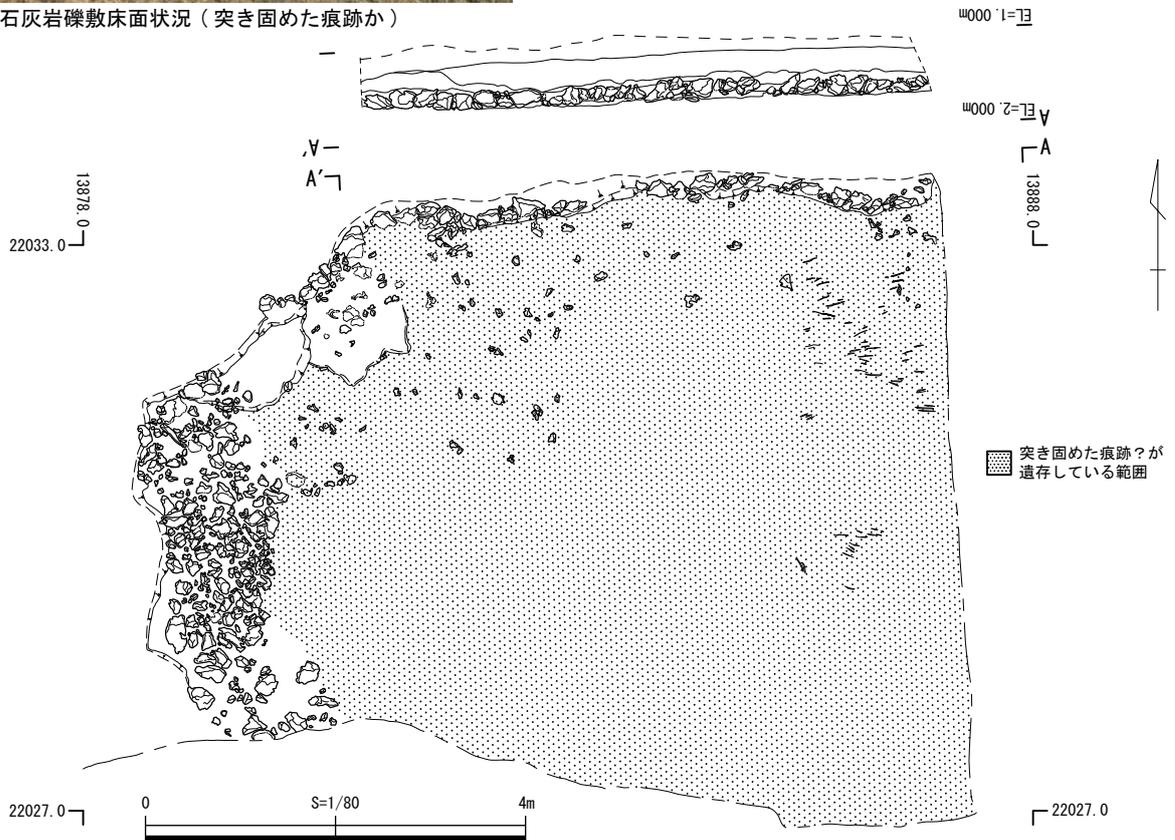
石灰岩礫敷状況（北側）



石灰岩礫敷床面状況（突き固めた痕跡か）



完掘状況



そ-99口 石灰岩礫敷平面・立面図

小禄海軍飛行場跡（そ-99口）

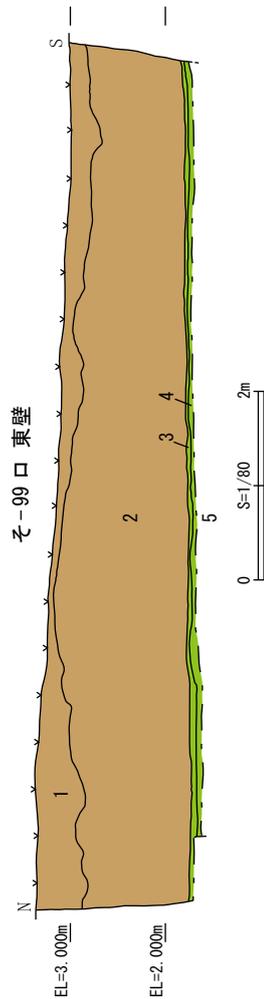
突き固められた石灰岩礫敷の広がる遺構が確認できた。民俗地図などの資料から、小禄海軍飛行場の滑走路だと考えられる。土層断面より、字大嶺に属すると思われる遺物包含層に粗砂を厚く均等に堆積させた後、人頭大の石灰岩礫を敷き並べ、粗砂で隙間を埋め、固く突き固めた様子が窺えた。『大嶺の今昔』には、飛行場建設のために砂利掘りから荷馬車による運搬作業が家族ぐるみで行われたことや、地均し作業の様子が掲載されている。隙間なく砂利で埋めるためには水も撒かれたことと思われる。

<土層注記>

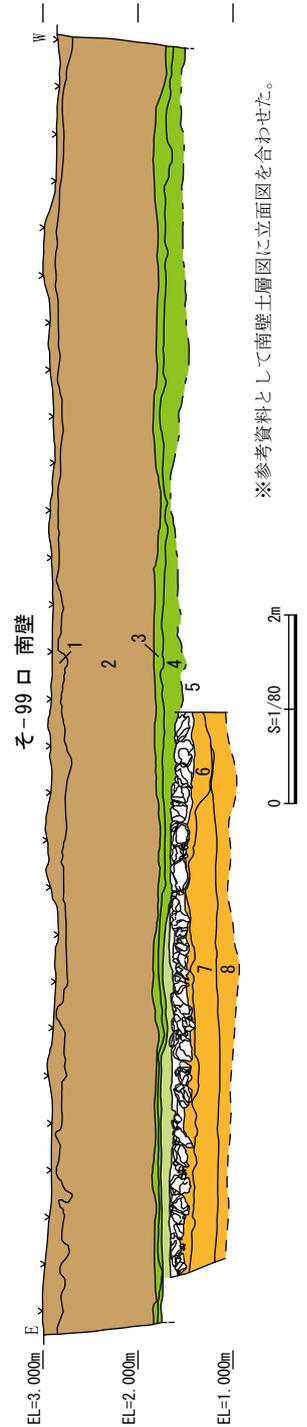
- 1層 - 黒褐色(2.5Y3/1) 砂礫土。
- 2層 - にぶい黄色(2.5Y6/4) 砂礫土。
- 3層 - オリーブ黒色(5Y3/1) 粗砂。
- 4層 - 灰オリーブ色(5Y4/2) 岩礫直上の粗砂：磁器片が出土する。
- 5層 - 石灰岩礫敷層(-)
- 6層 - 暗オリーブ灰色(5GY4/1) 粗砂：陶磁器片が出土。
- 7層 - 灰白色(5Y8/1) 粗砂。
- 8層 - オリーブ黒色(7.5Y2/2) 海砂：陶磁器片が出土。



そ-99口 東壁



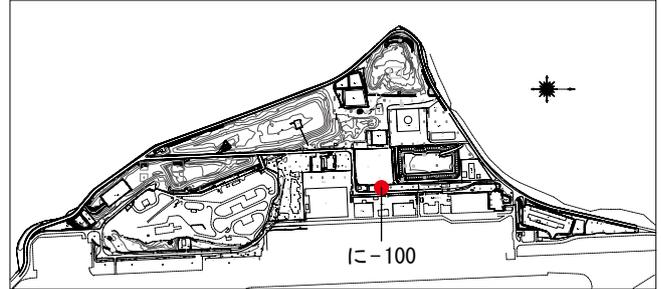
そ-99口 南壁



小禄海軍飛行場跡（に-100）



飛行場拡張の地均し作業『大嶺の今昔』より



に-100

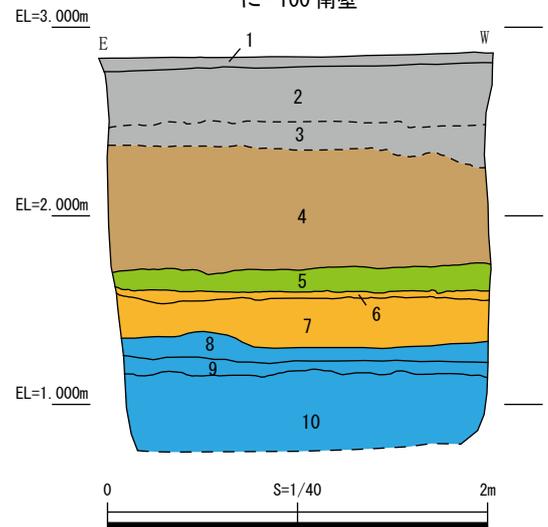
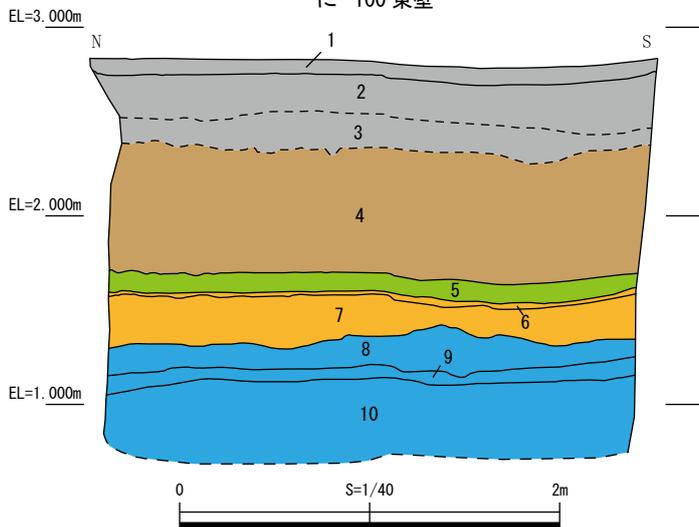
4層において、径20～30cm大の礫が粗砂と共に、固く締まった状態で検出できたため、そ-99口と同様、小禄海軍飛行場に伴う滑走路跡ではないかと考えた。



に-100 東壁
に-100 東壁



に-100 南壁
に-100 南壁

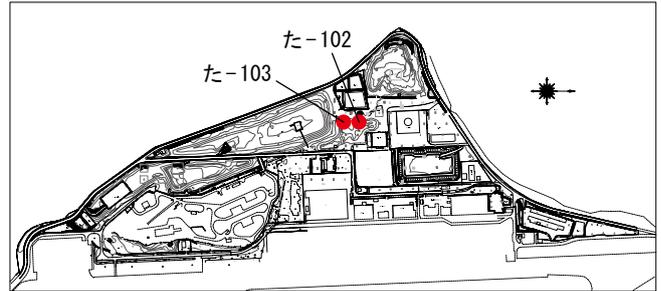


<土層注記>

- 1層 - アスファルト
- 2層 - クラッシャー
- 3層 - 路盤材
- 4層 - 盛土層(-)
- 5層 - 暗オリーブ色粘質土層(5Y4/4) φ5mm程度の小石を若干含む粘質土。那覇飛行場に伴う表土。上面にタールが層状に残る。また色調の異なる土が層状に堆積しており、何度かに分けて整地されている。しまりあり。粘性あり。
- 6層 - オリーブ黒色砂質土層(7.5Y3/2) 小石(φ5mm)を若干含む。しまりあり。粘性ややあり。
- 7層 - にぶい黄橙色砂礫土層(10YR7/3) φ20～30cmのレキと粗砂。固くしまっている。しまりあり。粘性なし。(小禄海軍飛行場跡?)
- 8層 - にぶい黄橙色砂質土層(10YR7/3) 貝、枝サンゴの小片が多く混じる粗砂層。色調、砂の粒度は7層と変わらない。しまりあり。粘性なし。
- 9層 - 明褐色砂質土層(7.5YR5/8) 枝サンゴと貝の小片を多く含む砂質層。鉄分が沈着しており水性堆積によるものと考えられる。しまりあり。粘性なし。
- 10層 - 灰黄褐色砂質土層(10YR5/2) 海砂層。枝サンゴと貝の小片を多く含む土質は9層と変わらない。しまりあり。粘性なし。

那覇飛行場跡

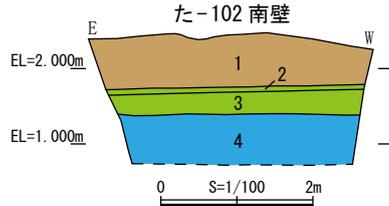
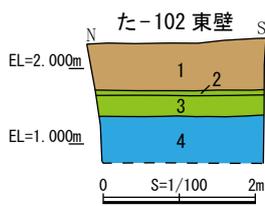
盛土や造成土下層よりアスファルト敷きやコンクリートの建築物が検出された。大嶺地区の歴史的経緯より戦後から復帰まで使用された、那覇飛行場の跡だと考えた。アスファルトもコンクリート建築物も厚く、容易に壊すことはできなかった。ここからは大嶺地区で見られた那覇飛行場の跡を紹介する。



た-102 東壁



た-102 南壁



<土層注記>

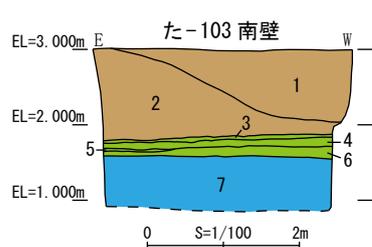
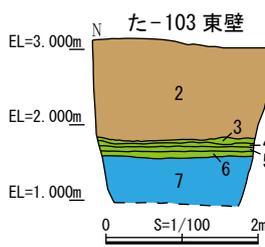
- 1層 - 盛土(-)
- 2層 - アスファルト(-) アスファルト舗装。厚さ10cm。
- 3層 - 灰オリーブ色土層(5Y5/3) コーラルの造成土。非常に固くしまっている。赤瓦が数片出土。
- 4層 - 灰白色粗砂枝サンゴ混じり(7.5YR8/1) 海砂の層。



た-103 東壁



た-103 南壁

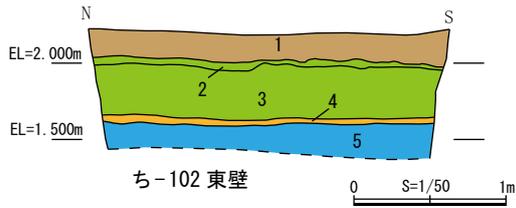


<土層注記>

- 1層 - 盛土(-) マージと石灰岩。
- 2層 - 盛土(-) 青灰色のニービにクチャのブロック。1990年代のお茶の缶が出土したことから、那覇空港ターミナル造成時の盛土。コココーラ社「茶流菜彩茶」出土。
- 3層 - 黒色砂質土層(N2/) 植物が腐食したものとタールが混じった層。
- 4層 - 明青灰色砂レキ層(10BG7/1) 那覇飛行場に伴う路盤材(コーラル)。
- 5層 - オリーブ灰色粘質土(7.5Y6/3) しまりなく砂や枝サンゴが全体に散る。
- 6層 - 灰白色粗砂(N7/) コンクリート構造物の下部と同じレベルに水平に堆積していることから造成によるものと判断する。
- 7層 - にぶい黄橙色土(10YR6/4) 地山のニービ。



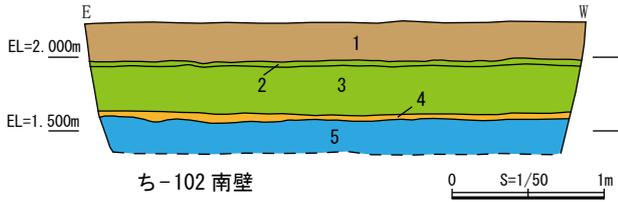
ち-102 東壁



ち-102 東壁



ち-102 南壁



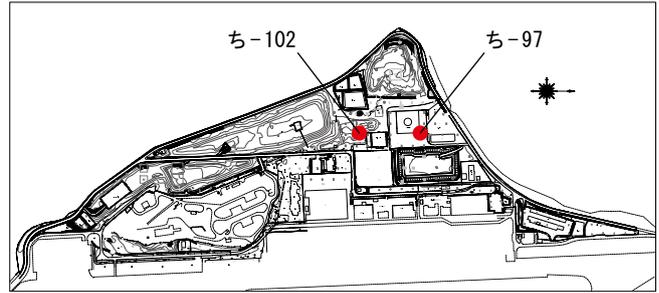
ち-102 南壁



ち-97 南壁



ち-97 東壁



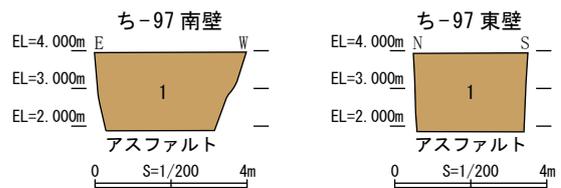
ち-102 平面 (北から)

<土層注記>

- 1層 - 盛土(-) ニービ。
- 2層 - タール(-)
- 3層 - 路盤材(-) コーラル、コンクリート片。
- 4層 - 暗灰色砂質土(N3/) 磁器片2点出土。しまりなく非常に薄い。
- 5層 - 灰白色粗砂(10YR8/1) 海砂の砂。ところどころ石灰質が固まって岩になりかけている。



ち-97 平面 (北から)



<土層注記>

- 1層 - 客土(-) クチャ・ニービによる造成土。
- コンクリート - 那覇飛行場跡。



つ-97 南壁



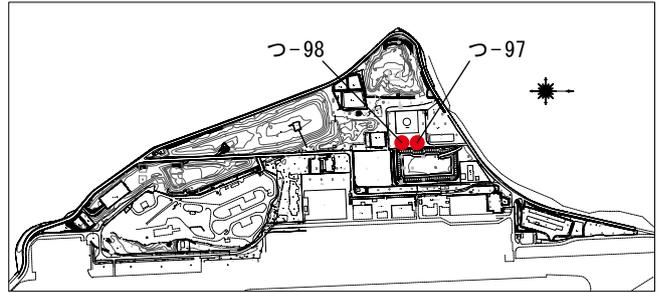
つ-97 東壁



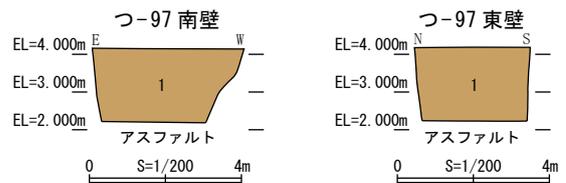
つ-98 南壁



つ-98 東壁



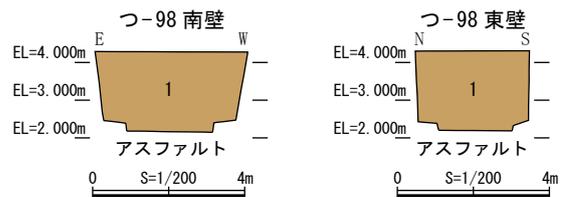
つ-97 平面 (西から)



<土層注記>
1層 - 客土(-) クチャ・ニービによる造成土。

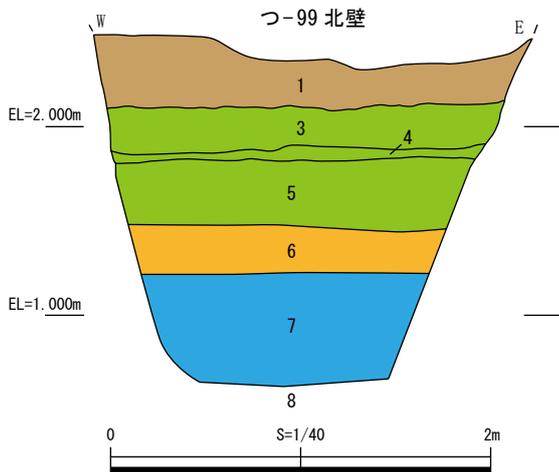
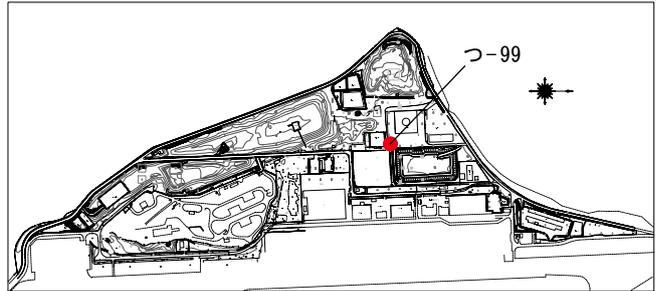


つ-98 平面 (北から)



<土層注記>
1層 - 客土(-) クチャ・ニービによる造成土。
コンクリート - 那覇飛行場跡。

造成土下層よりコンクリート建築物が検出された。非常に硬く、厚さは20cmほどもあった。コンクリート下には人頭大の石灰岩の詰まる層が見られたので、補強のために入れられたのかもしれない。



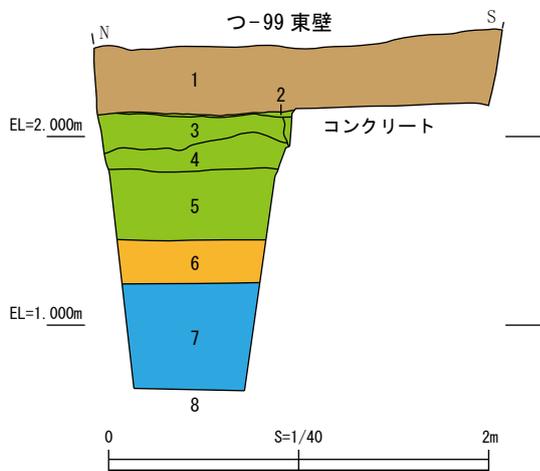
つ-99 北壁



つ-99 東壁

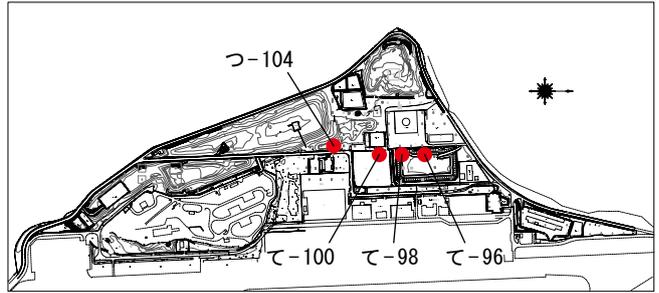
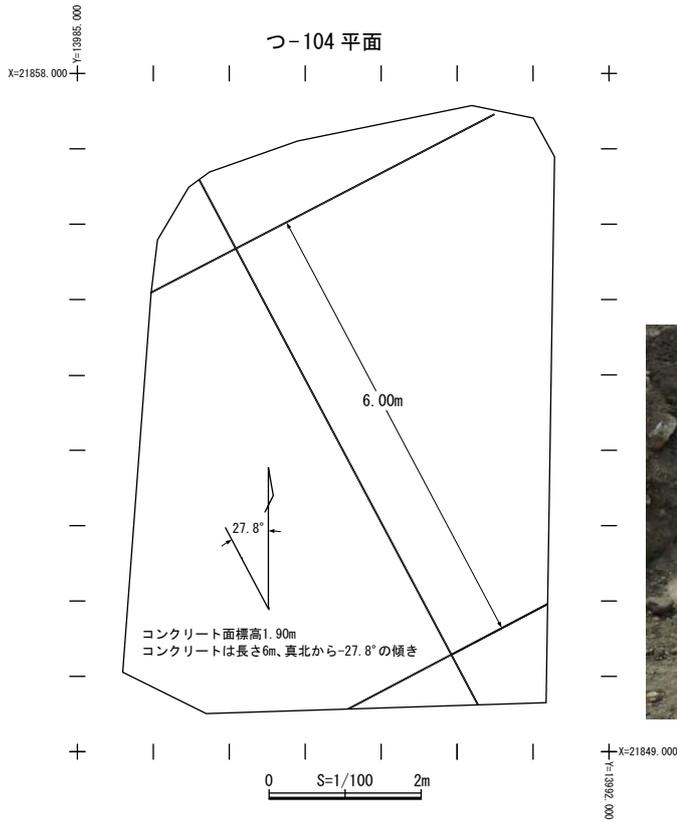


つ-99 平面 (西から)



<土層注記>

- 1層 - 客土(-) クチャ・ニービによる造成土。
- 2層 - コールタール(-) 那覇飛行場時代の旧表土。
試掘坑の半分はコンクリート構造物。
- 3層 - にぶい黄橙色砂層(10YR6/3) 砂利まじる。粘性なし。しまりややあり。
- 4層 - 浅黄色砂層(2.5Y7/3) 細砂。砂利まじる。粘性なし。しまりやや弱い。
- 5層 - 明褐色混礫砂利層(10YR6/6) 拳から人頭大の石が並べられている。粘性なし。しまりあり。「た-99」2層と同じ層と思われる。
- 6層 - にぶい黄色砂層(2.5Y6/4) やや粗めの砂。白色砂がスジ状に数条入る。
近代の遺物含む。粘性なし。しまりややしまる。
- 7層 - 灰黄色砂層(2.5Y6/2) やや粗めの砂。砂利まじる。粘性なし。しまりやや弱い。
- 8層 - 淡黄色砂層(2.5Y8/4) 海浜砂。やや粗めの砂。粘性なし。しまり弱い。



つ-104 平面 (北から)



て-96 平面 (西から)



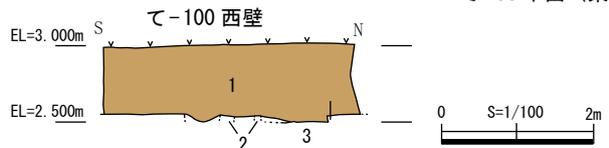
て-96 東壁



て-98 平面 (東から)



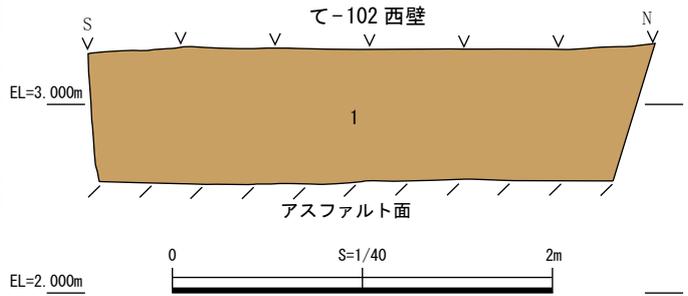
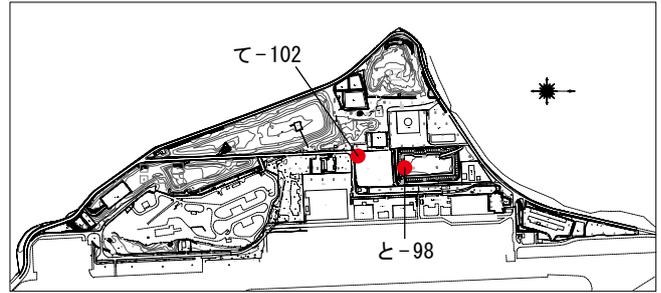
て-100 平面 (東から)



- <土層注記>
- 1層 - 灰色砂(7.5Y5/1) シルト混じり。しまりは良。
 - 2層 - 黒色アスファルト(N2/) 10~15cm程度の厚み。
 - 3層 - 浅黄色砂コーラル混じり(5Y7/4) アスファルトの路盤材。



て-102 アスファルト検出状況（北西から）



<土層注記>

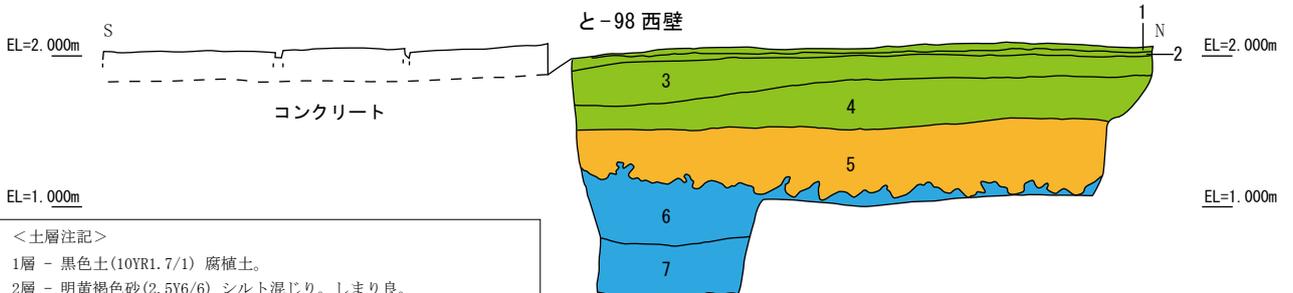
- 1層 - にぶい褐色砂(10YR5/4)+オリーブ褐色砂(2.5Y4/3)+黄灰色シルト(2.5Y4/1) 混じり。
現表土(客土)
- 2層 - アスファルト(-) グリッド全面に広がる



と-98 コンクリート検出状況



と-98 掘削後状況

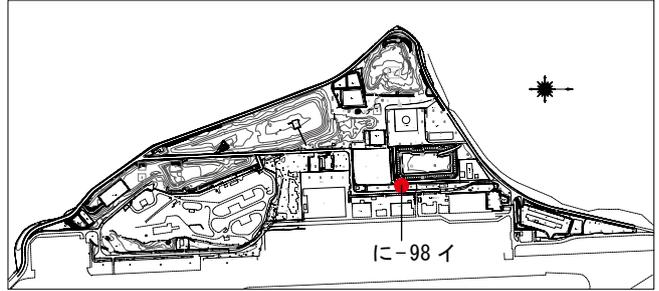


<土層注記>

- 1層 - 黒色土(10YR1.7/1) 腐植土。
- 2層 - 明黄褐色砂(2.5Y6/6) シルト混じり。しまり良。
- 3層 - オリーブ黄色砂(5Y6/3) 遺物を包含する層
- 4層 - 暗灰黄色砂(2.5Y5/2) 上面に黒褐色砂(10YR3/2)をまだらに含む。
遺物を包含し、しまりは良。
- 5層 - 黒褐色砂(10YR2/2) 最下面が波状になる。遺物を多く包含する。
- 6層 - 浅黄橙色砂(10YR8/3)
- 7層 - 灰白色砂(2.5Y7/1)
- 8層 - 緑灰砂(7.5GY6/1)



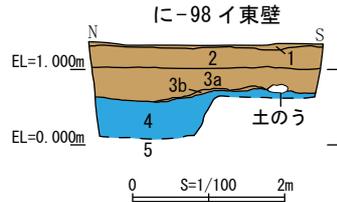
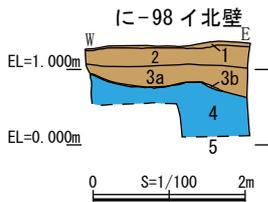
に-98 イ 構築物検出状況



に-98 イ北壁



に-98 イ東壁



<土層注記>
 1層 - 黒褐色土(10YR2/2) 腐植土。
 2層 - 褐灰色砂(10YR5/1)
 シルト・石灰岩・枝サンゴが少量混じる。
 3a層 - 灰色砂層(7.5Y6/1)
 3b層 - 黒褐色砂(7.5YR3/1) 3cm程度と薄く堆積。
 4層 - 灰白色砂(2.5Y7/1) 枝サンゴ混じり。
 5層 - 灰黄色砂枝サンゴ混じり(2.5Y7/2)
 石灰岩礫を多く含む。しまりは非常に良い。

第7表 那覇飛行場に係る出土遺物観察一覧

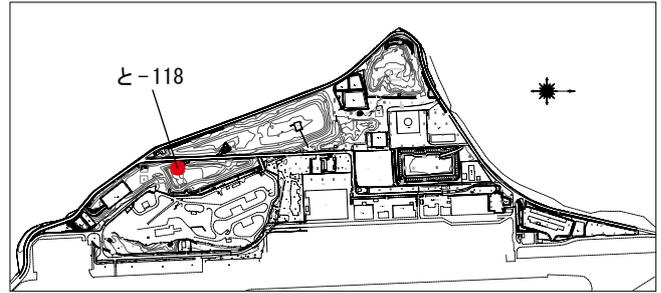
挿図番号 図版番号	種類	器種/部位	法量(cm/g)	胎土・材質	観察事項	出土地点
第28図 1 図版11の1	本土産磁器	蓋 口縁部	口径 9.4	白色 微粒子	肥前系。呉須で唐草文を描く。 幅4mmのかかりを持つ。	に-93 3層
第28図 2 図版11の2	外国産 磁器	碗 口～底部	口径 14.4 器高 6.9 底径 8.2	白色 微粒子	畳付けには釉剥ぎを行った際の細かい、刃 物痕が残る。	て-106 5層
第28図 3 図版11の3	外国産 磁器	碗 口～底部	口径 9.6 器高 底径 5.2	白色 微粒子	外底面には緑色スタンプによるTEPUCO USA CHINA の文字あり	て-106 5層
第28図 4 図版11の4	外国産 磁器	取手付き碗 口～底部	口径 9.8 器高 5.4 底径	白色 微粒子	外底面に緑色スタンプによるCOの文字。	て-106 5層
第28図 5 図版11の5	外国産 磁器	皿 口～底部	口径 14.4 器高 底径 8.8	白色 微粒子	外底面には黒色スタンプによるTEPUCO USA CHINA の文字あり	て-106 5層
第28図 6 図版11の6	ガラス 製品	小瓶	口径 1.4 器高 6.0 底径 3.3	—	口縁部に螺旋状の突起が施されているため ネジ切り式の蓋が施されていた。	つ-99 6～7層



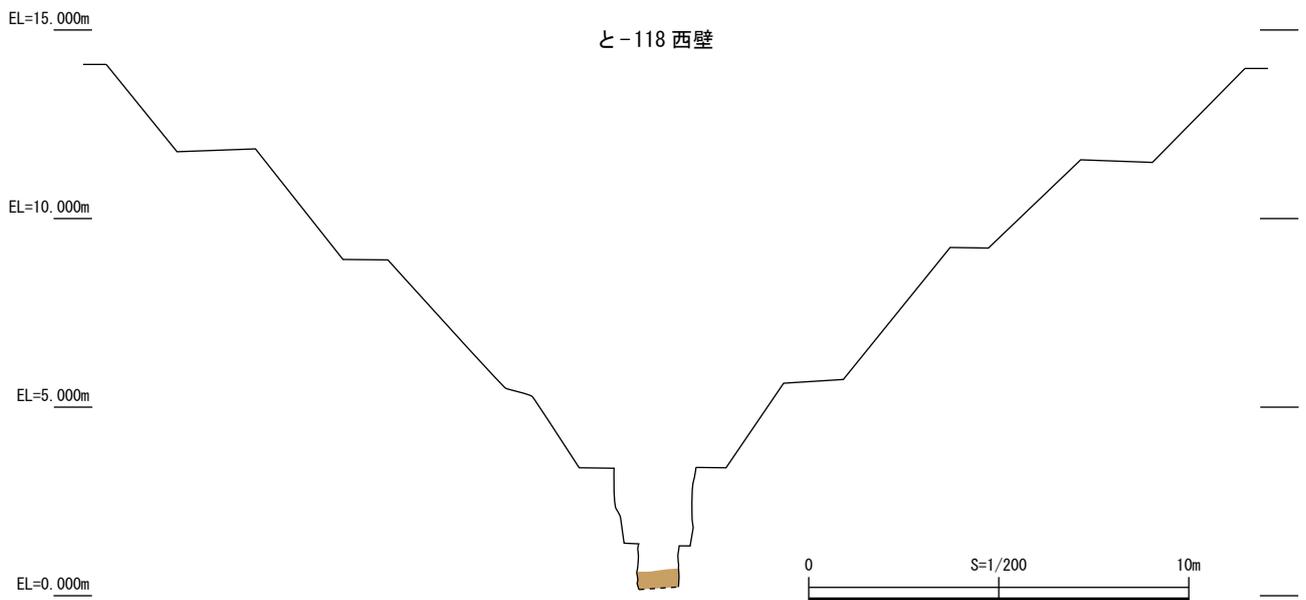
第 28 図 (図版 11) 那覇飛行場に係る出土遺物

と-118

今回の分布調査では盛土を高さ 15mから掘り下げ、試掘坑の設定を行う場合もあった。



と-118 掘削状況



第8表 調査成果一覧

グリッド名	座標(世界測地系)		標高(m)			基本層序				検出 基盤層	遺構 内容	遺物 有無	調査 年度	
	x	y	米軍造成土 上面標高	包含層上面	地山面	I	II	III	IV					
く	99	22022.495	13674.993	—	—	4.4	●	—	—	●	海砂	—	●	H19
け	99	22026.821	13708.311	—	—	—	●	—	—	—	—	—	—	H19
こ	96	22091.050	13748.513	—	—	0.65	●	—	—	●	海砂	—	—	H19
し	102	21914.113	13783.022	—	—	—	●	—	—	—	—	—	●	H21
し	100	21971.671	13808.234	0.8	—	—	●	●	—	●	海砂	—	●	H21
し	99	22015.114	13794.795	1.2	—	0.32	●	●	—	●	海砂	—	●	H19
し	97	22061.365	13808.250	1.2	0.3	0.25	●	●	●	●	海砂	遺物包含層	●	H21
す	105	21822.109	13838.588	—	—	1.02	●	—	—	●	海砂	—	—	H21
す	104	—	—	0.75	—	0.5	●	●	—	●	ニービ	—	—	H21
す	100	21973.202	13836.661	1.4	—	0.65	●	●	—	●	海砂	—	●	H21
す	99	22001.348	13837.971	1.4	—	0.72	●	●	●	●	海砂	—	●	H21
す	97	22060.677	13838.207	0.8	—	0.32	●	●	—	●	海砂	—	●	H21
す	96	22091.446	13838.028	0.6	0.5	0.35	●	●	●	●	岩盤	船着場・遺物包含層	●	H21
せ	96	22111.219	13846.908	0.31	0.25	0.25	●	●	●	—	—	船着場	●	H19
せ	106	21791.255	13851.713	—	—	0.6	●	—	—	●	海砂	—	—	H21
せ	105	21824.495	13868.582	—	—	1.06	●	—	—	●	ニービ	—	—	H21
せ	104	21851.019	13865.074	—	—	1.15	●	—	—	●	ニービ	—	●	H21
そ	101ハ	21948.966	13871.566	1.35	1.05	0.9	●	●	●	●	海砂	遺物包含層	●	H19
そ	101イ	21968.942	13871.426	1.3	—	0.9	●	●	—	●	海砂	—	●	H19
そ	100	21971.000	13898.500	—	1.9	1.65	●	—	—	●	海砂	旧表土	—	H19
そ	99イ	22029.210	13881.555	1.3	1.15	0.94	●	●	●	●	海砂	小祿海軍飛行場・遺物包含層	●	H19
そ	98	22058.965	13871.377	—	—	1.2	●	—	—	●	海砂	—	—	H19
そ	97	22087.953	13871.876	—	—	0.32	●	—	—	●	海砂	—	●	H19
そ	96	22119.354	13871.354	—	—	0.45	●	●	—	●	海砂	旧表土・遺物包含層	●	H19
た	111	21640.431	13908.648	1.0	—	0.7	●	●	—	●	海砂	—	●	H21
そ	109	21700.742	13898.067	1.0	—	0.35	●	●	—	●	クチャ	—	—	H21
そ	104	21851.197	13897.558	1.5	—	1.25	●	●	—	●	ニービ	—	●	H21
た	104	21881.059	13898.338	1.5	—	—	●	●	—	●	ニービ	—	—	H19
た	103	21908.400	13901.213	1.4	—	1.03	●	●	●	●	ニービ	那覇飛行場	—	H19
た	102	21939.200	13900.840	1.7	1.0	1.4	●	●	●	●	海砂	那覇飛行場	●	H21
そ	100	21999.063	13871.778	1.4	0.8	0.99	●	●	●	●	海砂	—	—	H22
そ	99	22001.500	13898.000	1.6	1.4	0.93	●	●	●	●	海砂	耕作痕?・遺物包含層	●	H22
そ	96	22091.500	13898.000	1.2	0.8	0.78	●	●	●	●	海砂	—	—	H22
そ	95	22121.500	13898.000	0.7	—	0.57	●	●	—	●	海砂	—	●	H22
た	95口	22143.500	13902.000	—	—	0.6	●	—	—	●	海砂	—	—	H22
ち	113	21582.374	13931.989	1.85	—	—	●	●	—	●	海砂	—	●	H21
た	105	21845.153	13926.220	1.7	—	0.77	●	●	—	●	クチャ	—	●	H21
た	103	21881.159	13928.159	1.4	—	1.8	●	●	—	●	ニービ	那覇飛行場	—	H21
た	102	21911.189	13927.742	1.7	—	1.35	●	●	—	●	クチャ	旧表土・遺物包含層	●	H19
た	101	21941.959	13928.072	1.2	—	1.1	●	●	—	●	海砂	—	—	H21
た	100	21971.388	13927.781	1.0	—	0.9	●	●	—	—	海砂	—	●	H21
た	99	22001.500	13928.000	1.6	—	1.07	●	●	—	—	海砂	遺物包含層	●	H22
た	96	22091.500	13928.000	1.6	1.0	1.0	●	●	●	—	海砂	耕作痕?	●	H22
た	95イ	22121.500	13928.000	—	—	0.37	●	—	—	●	海砂	—	—	H22
た	94	22151.500	13928.000	—	—	0.48	●	—	—	●	岩盤	—	●	H22
た	93	22181.000	13930.500	—	—	0.45	●	—	—	●	海砂	—	●	H22
ち	109	21701.037	13959.862	2.15	—	0.8	—	●	—	—	クチャ	—	●	H21
ち	105	21843.958	13951.794	1.7	—	0.9	—	●	—	●	海砂	—	●	H21
ち	103	21881.337	13958.084	1.5	—	1.1	●	●	—	●	海砂	—	●	H21
ち	102	21913.649	13958.182	2.0	1.7	1.65	●	●	●	●	海砂	那覇飛行場	●	H21
ち	101	21940.815	13958.388	1.8	1.7	1.25	●	●	●	●	海砂	遺物包含層	●	H21
ち	99	22001.500	13958.000	1.65	—	1.15	●	●	—	—	—	—	●	H22
ち	97	22081.497	13958.014	—	—	—	●	—	—	—	—	那覇飛行場	—	H22
ち	96	22111.432	13958.037	1.5	—	0.32	—	●	—	—	—	—	●	H22
ち	95	22141.484	13957.830	0.7	—	0.39	●	●	—	—	—	那覇飛行場	●	H22
ち	93	22181.500	13958.000	—	—	0.65	●	—	—	●	海砂	—	●	H22
て	113	21582.379	13989.792	—	—	0.9	●	—	—	●	ニービ	—	—	H21
て	111	21640.535	13997.189	1.4	—	0.75	●	●	—	●	海砂	—	●	H21
つ	109	21700.534	13984.176	1.8	—	0.95	●	●	—	●	クチャ	—	●	H21
て	106	21791.601	13991.320	1.5	—	0.98	●	●	—	●	海砂	那覇飛行場	●	H21
つ	105	21821.219	13987.349	1.5	—	1.1	—	●	—	●	海砂	—	●	H21
つ	103	21881.517	13987.747	2.25	1.7	1.6	●	●	●	●	海砂	遺物包含層	●	H21
つ	102	21911.483	13988.199	2.3	1.8	1.47	●	●	●	●	海砂	遺物包含層	●	H21

グリッド名	座標(世界測地系)		標高(m)			基本層序				検出 基盤層	遺構 内容	遺物 有無	調査 年度	
	x	y	米軍造成土 上面標高	包含層上面	地山面	I	II	III	IV					
つ	101	21940.854	13988.289	2.2	1.9	1.85	●	●	●	●	海砂	遺物包含層	—	H21
つ	99	22001.500	13988.000	2.1	1.5	0.86	●	●	●	—	—	那覇飛行場	●	H22
つ	98	22031.500	13988.000	—	—	—	●	—	—	—	—	那覇飛行場	—	H22
つ	97	22061.500	13988.000	—	—	—	●	—	—	—	—	那覇飛行場	—	H22
つ	96	22091.500	13987.000	2.1	—	1.11	—	●	—	●	海砂	—	●	H22
つ	95	22121.500	13987.000	2.1	1.1	0.75	—	●	●	●	海砂	遺物包含層	●	H22
つ	94	22151.500	13985.000	2.1	—	0.87	—	●	—	●	海砂	—	●	H22
つ	93	22181.500	13983.000	1.5	—	0.35	●	●	—	●	海砂	—	●	H22
て	121	21355.520	14015.853	0.9	—	0.64	●	●	—	●	海砂	—	●	H22
と	111	21641.000	14021.500	—	—	—	●	—	—	—	—	—	—	H22
て	108	21731.450	14018.925	1.7	—	—	●	●	—	—	—	—	—	H20
て	107	21761.525	14018.985	1.4	—	0.94	●	●	—	●	クチャ	—	—	H20
て	106イ	21791.500	14018.985	1.8	—	0.85	●	●	—	●	クチャ	—	●	H20
て	105・106ロ	21820.000	14017.000	2.0	1.9	1.32	●	●	●	●	—	ピット	●	H20
て	104	21851.500	14011.100	2.05	1.85	1.51	●	●	●	●	海砂	遺物包含層	●	H20
て	103	21881.650	14018.900	2.4	1.8	1.27	●	●	●	●	海砂	遺物包含層	●	H20
て	102	21911.500	14019.000	—	—	—	●	—	—	—	—	那覇飛行場	—	H20
て	100	21971.500	14019.000	—	—	—	●	—	—	—	—	那覇飛行場	—	H20
て	95	22124.065	14016.465	2.4	1.0	—	●	●	●	—	—	遺物包含層	●	H21
て	94	22169.743	14015.957	2.3	1.0	0.8	●	●	●	●	海砂	遺物包含層	●	H21
て	92	22213.640	14016.360	1.8	—	1.45	●	●	—	●	海砂	—	●	H21
と	122	21330.814	14038.104	0.5	—	0.1	●	●	—	●	海砂	—	●	H22
と	121	21339.000	14048.500	0.8	0.4	0.24	●	●	●	●	海砂	遺物包含層	●	H22
と	118	21431.000	14048.500	1.3	—	0.67	●	●	—	●	海砂	—	●	H22
な	111	21641.500	14052.550	2.05	—	1.3	●	●	—	—	—	—	—	H22
と	110	21671.695	14048.860	1.65	—	—	●	●	—	—	—	—	●	H20
と	109	21701.450	14049.050	1.85	—	—	●	●	—	—	—	—	●	H20
と	108ロ	21731.750	14048.840	1.65	—	—	●	●	—	—	—	—	●	H20
と	108イ	21758.525	14048.900	1.9	—	—	●	●	—	—	—	—	—	H20
と	107	21780.927	14046.468	2.2	—	1.95	●	●	—	●	海砂	—	—	H21
と	106	21806.023	14048.492	2.2	—	1.77	●	●	—	●	海砂	土坑	●	H21
と	104	21861.158	14048.139	2.2	1.7	0.76	●	●	●	●	海砂	湿地	●	H21
と	103	21881.500	14049.010	2.15	1.75	1.35	●	●	●	●	海砂	遺物包含層	●	H20
と	101	21941.500	14049.000	1.9	1.65	1.56	●	●	●	●	—	遺物包含層	●	H20
と	98	22039.425	14047.200	2.05	1.5	1.15	●	●	●	●	海砂	耕作痕・那覇飛行場	●	H20
と	97	22063.000	14047.500	1.9	1.4	1.17	—	●	●	●	海砂	遺物包含層	●	H20
と	95	22125.436	14046.023	1.9	1.3	1.07	●	●	●	●	海砂	耕作痕	●	H21
と	94	22169.320	14046.613	2.4	1.4	1.29	●	●	●	●	海砂	遺物包含層	●	H21
に	124	21267.170	14081.954	1.15	—	0.77	●	●	—	●	海砂	—	●	H22
な	123	21295.310	14062.502	—	—	—	●	—	—	●	海砂	—	—	H22
な	121	21341.000	14078.500	0.95	—	0.62	●	●	—	●	海砂	—	●	H22
に	120	21371.000	14090.750	1.0	0.5	0.56	●	●	●	●	海砂	石列	●	H22
な	118	21431.000	14078.500	1.9	—	1.76	●	●	—	●	海砂	—	—	H22
な	113	21581.000	14075.500	1.85	—	1.48	●	●	—	●	クチャ	—	—	H22
な	112	21611.000	14064.340	—	—	2.04	●	—	—	●	クチャ	—	—	H22
な	109ロ	21717.200	14078.990	2.7	—	2.21	●	●	—	●	クチャ	—	●	H20
な	108	21758.475	14078.900	—	—	1.82	●	—	—	●	クチャ	—	—	H20
な	107	21788.920	14078.462	2.4	—	2.05	—	●	—	●	海砂	遺物包含層	●	H21
な	106	21818.975	14078.518	2.3	—	2.02	●	●	—	●	海砂	—	●	H21
な	105	21848.989	14078.559	2.0	—	—	●	●	—	—	—	—	●	H21
な	104	21878.935	14078.400	—	1.5	1.02	●	—	●	●	海砂	耕作痕	●	H20
な	102	21912.500	14079.000	—	1.5	—	●	—	●	—	—	耕作痕	●	H20
な	100	21971.500	14079.000	—	1.4	1.2	●	—	●	●	海砂	遺物包含層	●	H20
に	98イ	22031.524	14103.969	1.4	—	1.52	●	●	—	●	海砂	—	—	H20
な	96	22093.000	14079.000	—	1.4	1.0	●	—	●	●	海砂	遺物包含層	●	H20
な	95	22124.630	14076.145	1.7	1.3	1.0	●	●	●	—	海砂	耕作痕	●	H21
な	94	22168.651	14076.193	2.0	1.3	0.91	●	●	●	●	海砂	遺物包含層	●	H21
に	89イ	22301.505	14083.636	2.65	—	1.675	●	●	—	●	海砂	—	—	H22
に	125	21235.233	14107.613	0.85	—	0.6	●	●	—	●	海砂	—	●	H22
に	121	21341.500	14106.830	0.85	—	0.57	●	●	—	●	海砂	—	●	H22
に	119	21401.000	14105.500	1.7	—	—	●	●	—	—	—	—	●	H22
に	117	21461.000	14108.500	1.4	—	—	●	●	—	—	—	—	●	H22
に	116	21491.000	14108.500	—	—	—	●	—	—	—	—	—	—	H22
に	115	21521.000	14100.630	—	—	—	●	—	—	—	—	—	—	H22
に	114	21551.000	14089.070	—	—	1.1	●	—	—	●	クチャ	—	●	H22

グリッド名	座標(世界測地系)		標高(m)			基本層序				検出 基盤層	遺構	遺物	調査 年度
	x	y	米軍造成土 上面標高	包含層上面	地山面	I	II	III	IV		内容	有無	
ぬ 109イ	21712.620	14110.940	—	—	2.69	●	—	—	●	クチャ	—	—	H20
に 109イ	21728.569	14108.960	2.3	—	1.875	●	●	—	●	クチャ	—	●	H20
に 108	21758.520	14108.850	2.6	—	2.2	●	●	—	●	クチャ	—	—	H20
に 100	21971.585	14107.102	1.7	1.55	1.84	●	●	●	●	海砂	小禄海軍飛行場	—	H21
に 99	22001.568	14104.960	1.7	—	1.57	●	●	—	●	海砂	—	—	H21
に 98口	22033.100	14084.550	1.9	—	1.5	●	●	—	●	海砂	那覇飛行場	—	H21
に 97	22061.484	14103.041	—	—	—	●	—	—	—	—	—	—	H21
に 96	22091.550	14107.945	1.9	1.8	1.17	●	●	●	●	海砂	ピット	●	H20
に 95	22121.500	14101.230	—	—	—	●	—	—	—	—	那覇飛行場	—	H22
に 94	22151.500	14100.070	1.65	—	0.87	●	●	—	●	海砂	—	—	H22
に 93	22180.460	14101.530	1.9	—	0.79	●	●	—	●	海砂	那覇飛行場	●	H22
に 91	22241.000	14108.500	2.0	—	0.53	●	●	—	●	海砂	—	●	H22
に 90	22271.000	14108.500	—	—	0.35	●	—	—	●	海砂	—	—	H22
に 89	22301.000	14138.500	1.7	—	1.2	●	●	—	●	海砂	—	—	H22
ぬ 126	21203.500	14138.960	—	—	0.83	●	—	—	●	海砂	—	—	H22
ね 123	21281.000	14144.500	1.65	—	0.87	●	●	—	●	クチャ	—	—	H22
ぬ 122	21312.695	14123.065	1.7	—	0.7	●	●	—	—	—	—	●	H22
ぬ 109口	21728.515	14138.990	2.0	—	1.74	●	●	—	●	クチャ	—	—	H20
ぬ 108	21758.540	14138.845	2.4	—	—	●	●	—	●	クチャ	—	●	H20
ぬ 90口	22270.970	14138.480	—	—	—	●	—	—	—	—	—	—	H22
ぬ 90イ	22297.030	14137.100	0.87	0.5	0.47	●	●	●	●	海砂	旧表土?	●	H22
ね 87イ	22368.315	14143.045	—	—	—	●	—	—	—	—	—	—	H22
の 127口	21187.110	14177.370	0.9	—	0.77	●	●	—	●	ニービ	—	●	H22
の 124	21251.000	14174.480	1.35	1.1	0.87	●	●	●	●	クチャ	耕作痕?	●	H22
ね 109口	21728.525	14169.040	2.25	—	2.0	●	●	●	●	クチャ	—	●	H20
ね 108	21758.475	14168.755	2.45	1.95	1.7	●	●	●	●	海砂	遺物包含層	●	H20
ね 90	22271.500	14153.000	2.3	—	0.97	●	●	●	●	海砂	遺物包含層	●	H22
ね 87口	22361.000	14168.500	1.0	—	0.1	●	●	—	●	海砂	—	●	H22
ね 86口	22394.072	14168.502	—	—	—	●	—	—	—	—	—	—	H22
ね 86イ	22419.000	14168.500	0.15	—	-0.25	●	●	—	●	海砂	—	—	H22
ね 84	22451.000	14168.500	1.1	—	0.87	●	●	—	●	海砂	—	●	H22
ね 83	22481.422	14167.841	—	—	—	●	—	—	—	—	—	—	H22
は 131	21059.720	14202.930	—	—	-0.37	●	—	—	●	海砂	—	●	H22
の 127イ	21161.050	14197.420	—	—	1.39	●	—	—	●	海砂	—	—	H22
は 127	21188.340	14204.960	1.2	—	0.85	●	●	—	●	海砂	—	●	H22
は 125	21221.500	14201.000	1.45	0.9	—	●	●	●	—	—	シミ(遺構?)	●	H22
の 108	21758.540	14187.780	2.4	1.65	1.35	●	●	—	●	海砂	遺物包含層	●	H22
の 87イ	22361.000	14198.500	2.15	—	0.97	●	●	—	●	岩盤	—	●	H22
の 87口	22388.500	14194.120	1.35	—	0.75	●	●	—	●	岩盤	—	—	H22
は 85イ	22421.000	14201.500	1.9	—	0.52	●	●	—	●	海砂	—	●	H22
は 84ハ	22451.000	14203.600	1.8	—	0.48	●	●	—	●	海砂	—	●	H22
は 84口	22479.000	14201.500	1.35	—	0	●	●	—	●	海砂	—	—	H22
の 81	22540.480	14200.000	0.35	—	0.28	●	●	—	●	海砂	—	—	H22
の 80	22571.500	14199.000	—	-0.7	-0.44	●	—	●	●	海砂	旧表土	—	H22
は 132	21026.410	14226.765	—	—	-0.1	●	—	—	●	海砂	—	—	H22
は 85口	22421.000	14228.500	0.85	—	0.67	●	●	—	●	海砂	—	●	H22
ひ 84	22451.500	14234.000	—	—	0.53	●	—	—	●	海砂	—	—	H22
は 84イ	22479.000	14225.500	1.6	—	—	●	●	—	—	—	—	—	H22
は 81	22541.000	14226.500	—	—	0.37	●	—	—	●	海砂	—	—	H22
は 80	22571.000	14223.000	—	—	0.28	●	—	—	●	海砂	—	●	H22
は 79	22601.000	14224.000	—	—	0.35	●	—	—	●	海砂	—	—	H22
は 78	22631.000	14223.500	—	—	0.15	●	—	—	●	海砂	—	—	H22
は 77	22661.500	14219.720	—	—	0.22	●	—	—	●	海砂	—	●	H22
ひ 125	21241.550	14239.050	—	1.85	1.61	●	—	●	●	石灰岩	遺物包含層	●	H20
ひ 124	21256.695	14239.030	2.15	—	—	●	●	—	—	—	—	—	H20
ひ 123口	21284.000	14238.500	1.95	—	—	●	●	—	—	—	—	—	H20
ひ 122	21311.500	14259.000	1.9	1.4	1.1	●	●	●	●	海砂	遺物包含層	●	H20
ひ 117イ	21461.640	14258.990	—	—	—	●	—	—	—	—	—	—	H20
ひ 116	21491.500	14259.000	—	—	1.37	●	—	—	●	クチャ	—	—	H20
ふ 114	21552.975	14261.500	—	—	—	●	—	—	—	—	—	—	H20
ふ 120口	21371.500	14271.900	—	—	1.0	●	—	—	●	クチャ	—	—	H20
ふ 119	21402.505	14270.975	—	—	1.34	●	—	—	●	クチャ	—	—	H20

製品 名	外観										ガラス製品										鉄製品			銅製品		その他										
	形状		色		材質		用途		備考		不明		水注		蓋		急須		鉢		茶		鉢		火鉢		火鉢		火鉢		不明		不明		不明	
	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	
ガラス 製品	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	
鉄製品	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
銅製品	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
その他	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
小計	664	1	18	2	9	17	4	1	2	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
小計	664	1	18	2	9	17	4	1	2	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	

：遺物包含層

製作年代の推定できる遺物としては青磁片、青花片、本土産磁器、沖縄産施釉陶器、銭貨が得られた。本土産磁器のうち瀬戸美濃系の銅版転写は明治22年(1889)から、吹絵は明治27年(1894)から、印文(ゴム印判)は大正5年(1872)から導入された事が知られている。製作年代を一概に使用年代に当てはめる事はできないが、大嶺村は島嶼村町制により明治40年から小嶺村字大嶺となるので、字大嶺で使用されたものが多く残っているのではないかと推測される。中国産磁器、本土産陶磁器、沖縄産施釉陶器の碗・小碗・皿に限定して産地別で出土した割合をみると、中国産磁器：3%、本土産陶磁器：58%、沖縄産施釉陶器：39%で、中国産磁器が非常に少なかった。なお、今回の発掘調査で完形となる資料は得られていない。概ね器種の判別できる資料を図示した。個々の詳細については観察表に譲る。

中国産陶磁器は総数35点で青花・瑠璃釉・彩釉陶器・褐釉陶器が出土した。確認できた器種は碗・小杯・皿の3種で、碗が全体の78%と多くを占めた。

本土産陶磁器は総数544点を数え、本土産磁器と本土産陶器の割合では本土産磁器が94%と圧倒的に多かった。器種は碗・小碗・皿・小皿・角皿・杯・小杯・湯呑み・鉢・瓶・小壺・急須・水注・香炉・蓋・把手の16種が得られた。碗が一番多く全体の52%を占めた。次いで皿が16%、小碗が5%であった。技法別にみると染付が一番多く半数以上を占めた。次に型紙刷りが14%、印文、銅版転写、クロム青磁、などが続く。小破片のため実測は控えたが、クロム青磁染付が2点出土した。産地としては瀬戸美濃系が多かったが、砥部や肥前系も確認できた。本土産陶器は少量の出土で、いずれも小破片のため詳細は不明であったが、珉平焼(淡路島)かと思われる資料もあった。第32図31は把手かとも思われたが、類似資料を探すことができなかったため、情報収集のため掲載する。

沖縄産施釉陶器は総数452点で、碗・皿・小碗・鉢・壺・瓶・急須・鍋・小壺・火取・土瓶・水注の12種が確認できた。碗は全体の51%を占め、次に鉢の13%、その次に壺と急須が多かった。技法としては内外面ともに白化粧を施すものが多いようであった。

第17表 中国産磁器観察一覧

挿図番号 図版番号	器種 部位	口径 器高 底径 (cm)	器形	胎土	施釉範囲/発色	文様等の特徴	出土地点
第29図 1 図版12の1	碗 口縁部	13.4 - -	端反り	白色 微粒子	内外面ともに呉須による絵付け	外面：胴部に牡丹唐草文を配す。 内面：口縁部に一重、見込に二重の圏線を引く。 18c末～19c中葉	そ-99 2層(I)
第29図 2 図版12の2	皿 胴部	- - -	-	やや青味がかった白色 微粒子	内外面ともに呉須による絵付け	内外面ともに牡丹唐草文を描く。 18c後半～19c	ひ-122 6層(III)

第18表 中国産褐釉陶器観察一覧

挿図番号 図版番号	器種 部位	口径 器高 底径 (cm)	器形	胎土	施釉範囲/発色	特徴	出土地点
第29図 3 図版12の3	不明 胴部	- - -	-	にぶい橙 (5YR7/4)	残存釉はまだらで明褐灰、褐、 暗褐色を呈する。	内外面に明瞭なるくろ痕。器壁 7.5mmで薄い。胎土には赤色粒、白 色粒が混ざる。	と-97 4層(III)

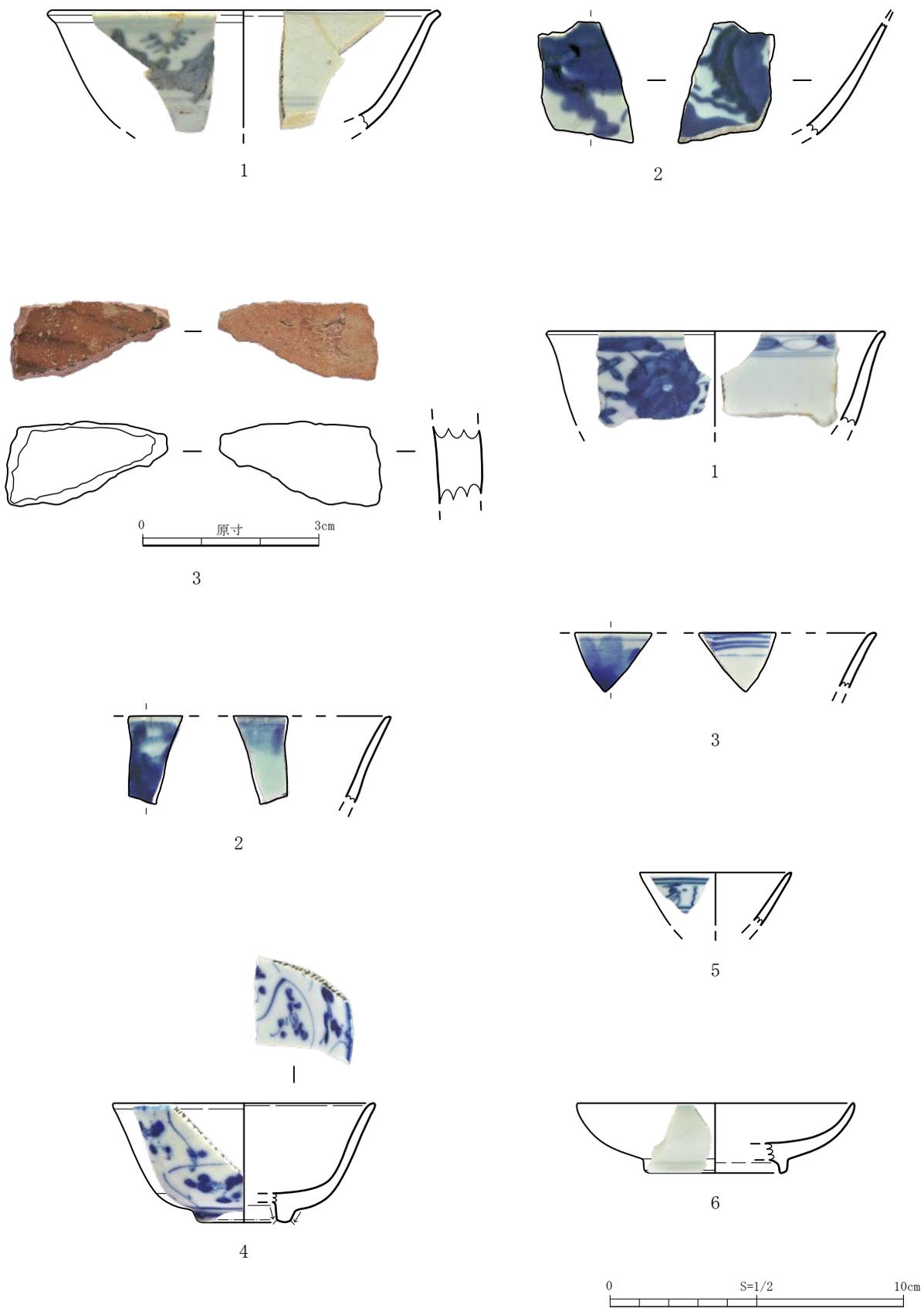
第19表 本土産磁器観察一覧

挿図番号 図版番号	器種 部位	器形	口径 器高 底径 (cm)	胎土	技法	発色/状態	文様等の特徴	産地	出土地点
第29図 1 図版12の1	碗 口縁部	やや 端反り	11.6 — —	青白色 微粒子	手描きに よる染付	呉須/鮮明	外面：牡丹唐草文 内面：花文帯	瀬戸 美濃系	大嶺海岸 表面踏査
第29図 2 図版12の2	碗 口縁部	直口	— — —	灰白色 微粒子	手描きに よる染付	呉須/鮮明	—	肥前系	と-103 7層(Ⅲ)
第29図 3 図版12の3	小碗 口縁部	直口	— — —	青白色 微粒子	手描きに よる染付	呉須/鮮明	—	瀬戸 美濃系	と-97 2層(Ⅱ)
第29図 4 図版12の4	小碗 口～底部	直口	8.8 5.1 4.2	青白色 微粒子	手描きに よる染付	呉須/鮮明	口藍を施す。内外面に仙芝祝寿 文を描く。高台脇に3本圈線。 畳付のみ釉を掻き取る。	瀬戸 美濃系	そ-99イ 4層(Ⅱ)
第29図 5 図版12の5	小杯 口縁部	直口	5.4 — —	白色 微粒子	手描きに よる染付	コバルト/鮮明	口縁に沿って2本の圈線の間に 「寿し」?	瀬戸 美濃系	そ-99イ 6層(Ⅲ)
第29図 6 図版12の6	皿 口～底部	直口	9.6 2.4 4.6	白色 微粒子	不明	コバルト/ 不鮮明	型による成形。口藍を施す。高 台内に白土の付着。	瀬戸 美濃系	そ-99ロ 攪乱層 (Ⅰ)
第30図 7 図版13の7	皿 口縁部	—	— — —	灰白色 微粒子	手描きに よる染付	呉須/鮮明	波状口縁。外面：唐草文を描 く。	肥前系	と-97 2層(Ⅱ)
第30図 8 図版13の8	皿 口縁部	直口	— — —	青白色 微粒子	手描きに よる染付	コバルト/鮮明	波状口縁。外面：唐草文を描 く。	瀬戸 美濃系	と-97 4層(Ⅲ)
第30図 9 図版13の9	大皿 鉢型?	直口	21.6 — —	灰白色 微粒子	手描きに よる染付	呉須/鮮明	口鏽。内面：文様あり	肥前系	そ-99ロ 攪乱層 (Ⅰ)
第30図 10 図版13の10	皿 底部	不明	— — 6.0	青白色 微粒子	不明	コバルト/鮮明	文様を彫り込んだ後にコバルト を掛けている。	瀬戸 美濃系	そ-100 2層(Ⅰ)
第30図 11 図版13の11	急須 蓋	—	8.4 — 7.2	青白色 微粒子	手描きに よる染付	コバルト/鮮明	菊花文を描く。6mm幅のかかり を持つ。	瀬戸 美濃系	と-97 4層(Ⅲ)
第30図 12 図版13の12	急須 胴部	—	— — —	灰白色 微粒子	手描きに よる染付	呉須/鮮明	ろくろ痕残る。	肥前系	そ-99ロ 攪乱層 (Ⅰ)
第30図 13 図版13の13	碗 口縁部	直口	—	青白色 微粒子	型紙刷り	呉須/鮮明	外面：花文 内面：口縁部に沿って花文を並 べる	瀬戸 美濃系	そ-99ロ 攪乱層 (Ⅰ)
第30図 14 図版13の14	碗 底部	—	— — 5.0	黄白色 微粒子	型紙刷り	呉須/鮮明	外面：胴部中央に8個の三角 形で円を作った中に菊花を描く。 その周囲を点描の三角形と逆三 角形で囲う。高台周辺も同様に 三角形を組み合わせた花を配す る。畳付けのみ釉を剥ぎ取る。 内面：胴部に一条の圈線、見込 みに松竹梅を円形に配す。ハマ 痕あり。	砥部	て-103 5層(Ⅲ)
第31図 15 図版14の15	皿 底部	—	— — 7.8	灰白色 微粒子	型紙刷り	呉須/やや鮮明	外面：蛇の目凹高台、高台脇に 1本圈線 内面：七宝文で区画し、窓内に 草花文、その下に青海波と草花 文を配し、見込みに草花文。	肥前系	そ-100 2層(Ⅰ)
第31図 16 図版14の16	皿 底部	—	— — 6.4	青白色 微粒子	銅版転写	コバルト/鮮明	内面：七宝文で区画し、窓内に 草花文、その下に青海波と草花 文を配し、見込みに草花文。	瀬戸 美濃系	の-108 5層(Ⅲ)
第31図 17 図版14の17	香炉 底部	—	— — 10.5	灰白色 微粒子	銅版転写	呉須/やや鮮明	外面には蓮弁文	肥前系	は-85ロ 1～3層 (Ⅰ～Ⅱ)
第31図 18 図版14の18	小碗 口縁部	直口	8.4 — —	白色 微粒子	銅版転写	呉須/やや鮮明 緑色/鮮明	染付けの中に植物の葉	肥前系	な-96 3層(Ⅲ)

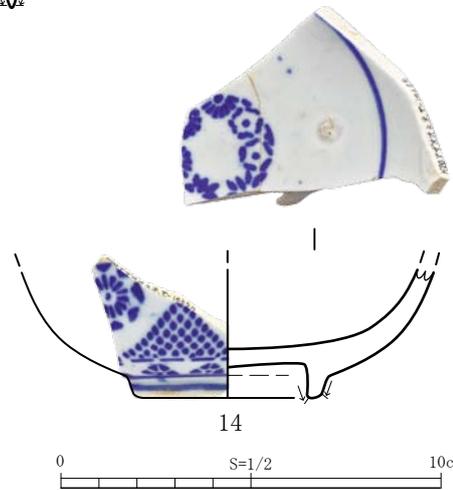
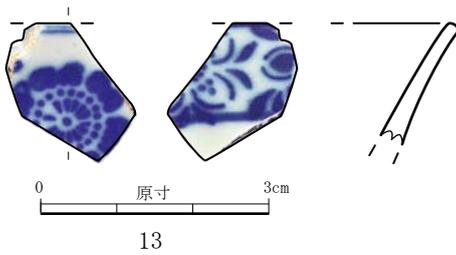
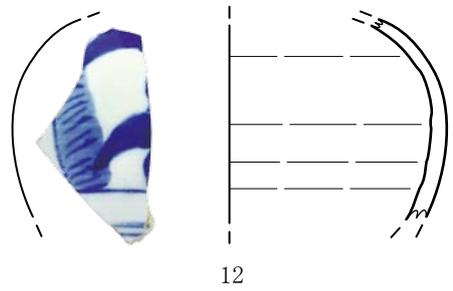
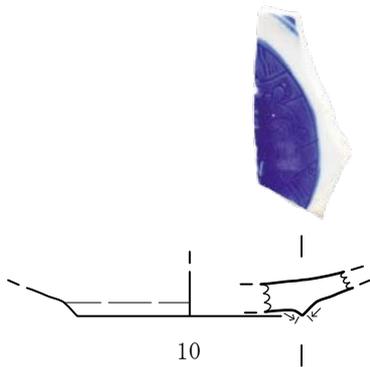
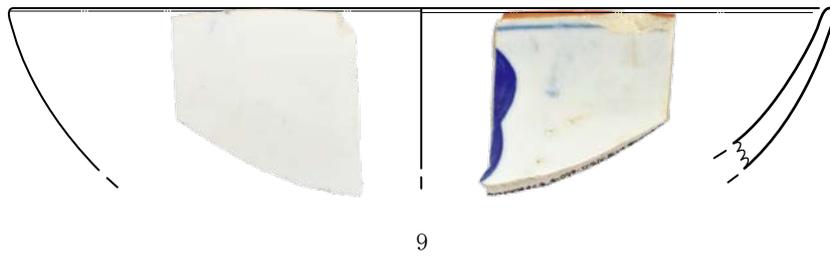
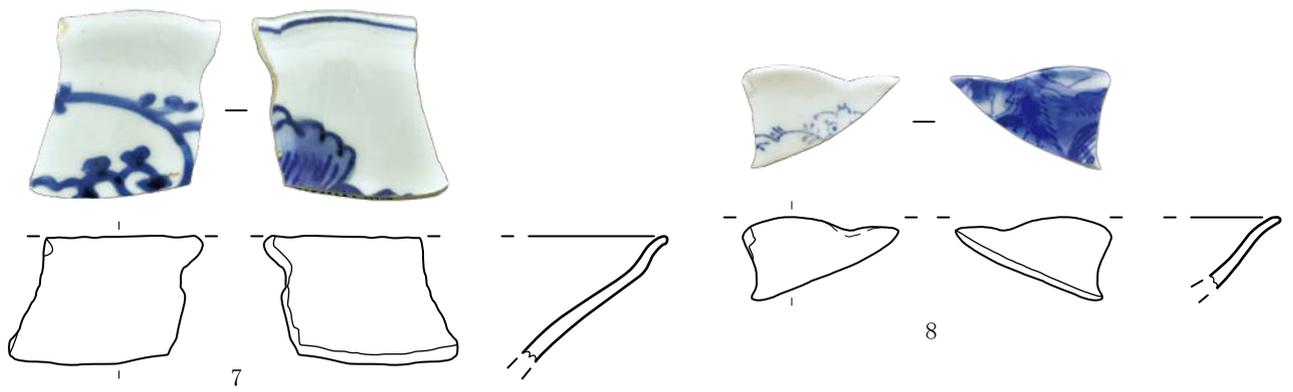
挿図番号 図版番号	器種 部位	器形	口径 器高 底径 (cm)	胎土	技法	発色/状態	文様等の特徴	産地	出土地点
第31図 19 図版14の19	小碗 口～底	直口	8.0 - 3.6	白色 微粒子	銅版転写	緑色/鮮明	草花を描く	瀬戸 美濃系	ひ-122 6層(Ⅲ)
第31図 20 図版14の20	皿 口～底	-	11.0 - -	白色 微粒子	銅版転写	緑色/鮮明	内面：口鏝を施す。図柄は富士 山と三河湾か。 外面：畳付けのみ釉を掻き取 る。	瀬戸 美濃系	ち-96 3～6層 (Ⅱ)
第31図 21 図版14の21	碗 口縁部	直口	10.4 - -	白色 微粒子	印文	コバルト/やや 鮮明	外面：口縁近くに1条の圏線	瀬戸 美濃系	と-101 4層(Ⅱ)
第31図 22 図版14の22	小碗 口縁部	端反り	8.4 - -	白色 微粒子	印文	コバルト/やや 鮮明	型による成形。文様あり	瀬戸 美濃系	そ-99口 攪乱層
第31図 23 図版14の23	皿 口～底部	-	11.4 2.6 5.6	白色 微粒子	印文	コバルト/鮮明	型による成形。 内面：見込みに漢文を押印。 外面：高台脇には一条の圏線	瀬戸 美濃系	と-97 2層(Ⅱ)
第32図 24 図版15の24	小杯 口～底	端反り	6.2 - -	白色 微粒子	クロム青磁	良好	型による成形。内面には釉垂れ が見られる。	瀬戸 美濃系	つ-96 6層(Ⅱ)
第32図 25 図版15の25	急須 胴部	-	- - -	白色 微粒子	手描きに よる染付	良好	-	瀬戸 美濃系	と-101 排土
第32図 26 図版15の26	皿 底部	-	- 7.7	白色 微粒子	クロム青磁	良好	型による成形。	瀬戸 美濃系	そ-99イ 6層(Ⅲ)
第32図 27 図版15の27	碗 口縁部	直口	10.4 - -	白色 微粒子	吹き付	良好	型による成形。外面のみ芭蕉の 葉を描く。	瀬戸 美濃系	と-97 2層(Ⅱ)
第32図 28 図版15の28	小碗 口縁部	直口	9.4 - -	白色 細粒子	-	緑色/鮮明	外面口縁部下に緑色二重圏線	瀬戸 美濃系	そ-99口 攪乱層 (Ⅰ)

第20表 本土産陶器観察一覧

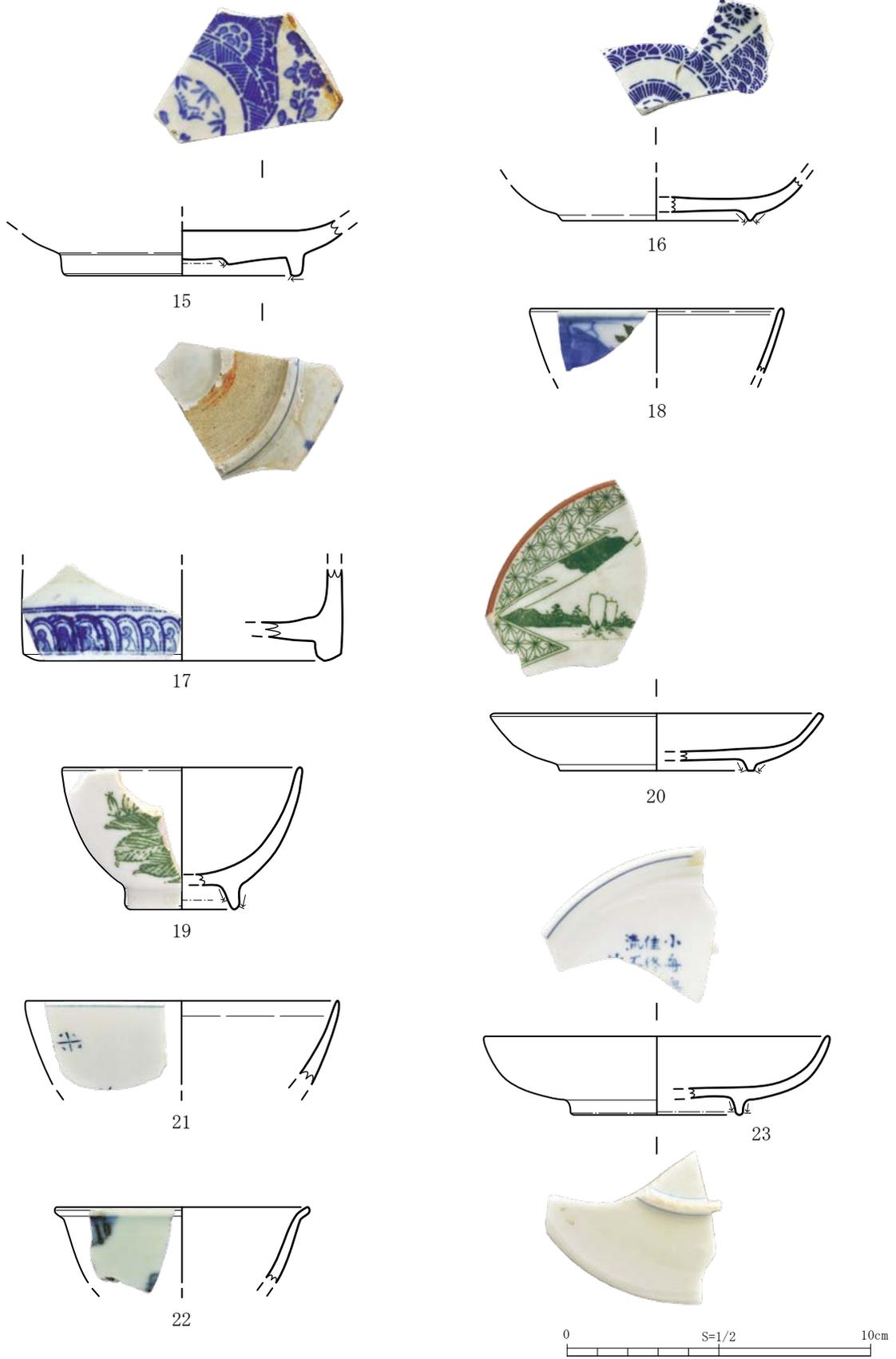
挿図番号 図版番号	種別	器形	口径 器高 底径 (cm)	胎土	施釉範囲/発色	技法・文様等の特徴	出土地点
第32図 29 図版15の29	碗 口縁部	外反	- - -	灰色 粗粒子	内外面ともに白化粧後、透明 釉を掛ける	内外面ともに貫入が入る	そ-99イ 2層(Ⅰ)
第32図 30 図版15の30	不明 口縁部	-	- - -	白色 粗粒子	内外面ともに緑釉と黄釉を掛 ける	三彩	そ-99口 攪乱層(Ⅰ)
第32図 31 図版15の31	不明	-	長さ：4.5 幅：2.0	白色 粗粒子	外面に緑釉を掛ける。釉の厚 みによって発色が変わる。	-	ち-96 8～10層 (Ⅱ～Ⅳ)



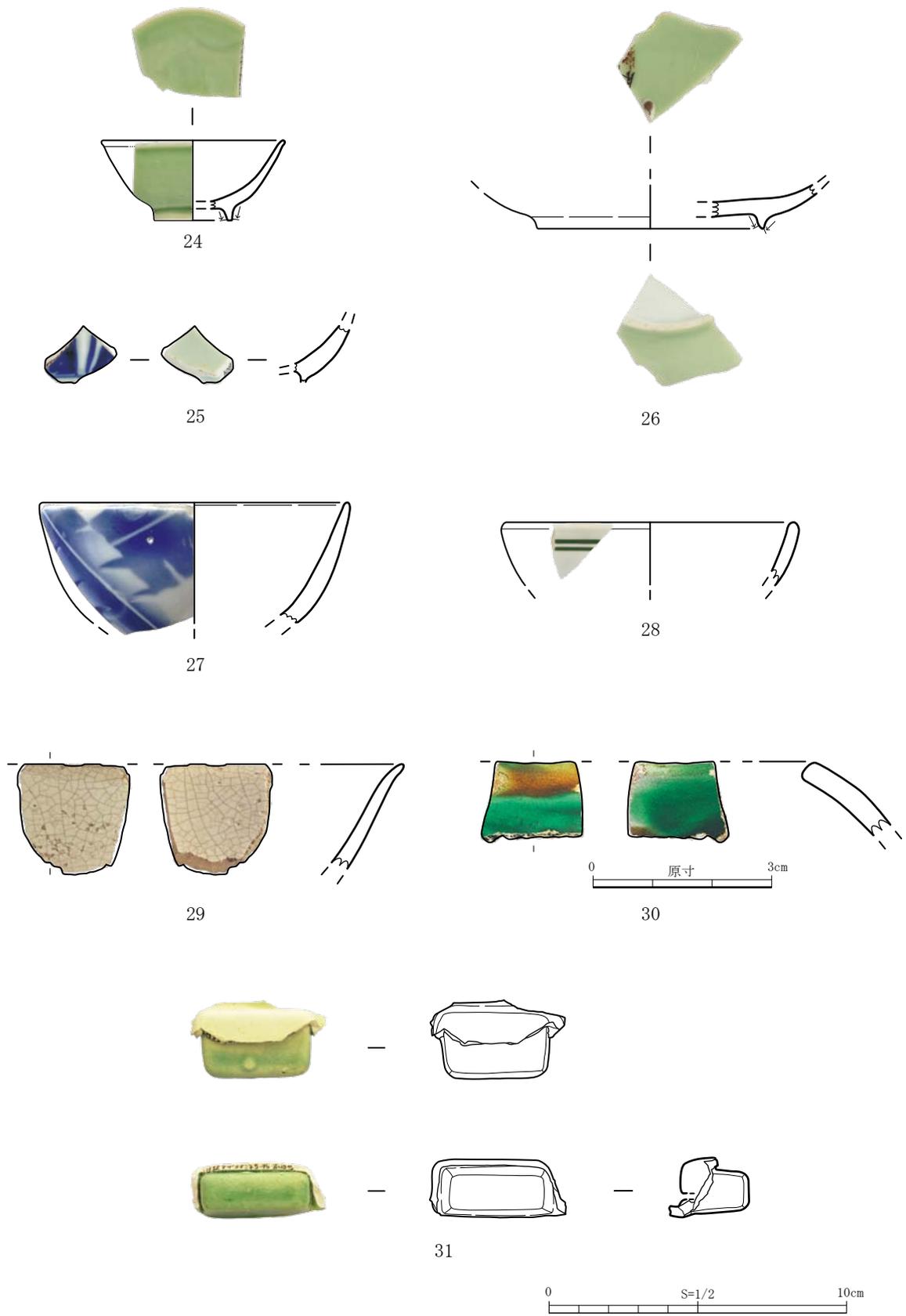
第 29 图 (图版 12) 中国産磁器・褐釉陶器・本土産磁器 (1)



第 30 图 (图版 13) 本土産磁器 (2)



第 31 图 (图版 14) 本土産磁器 (3)

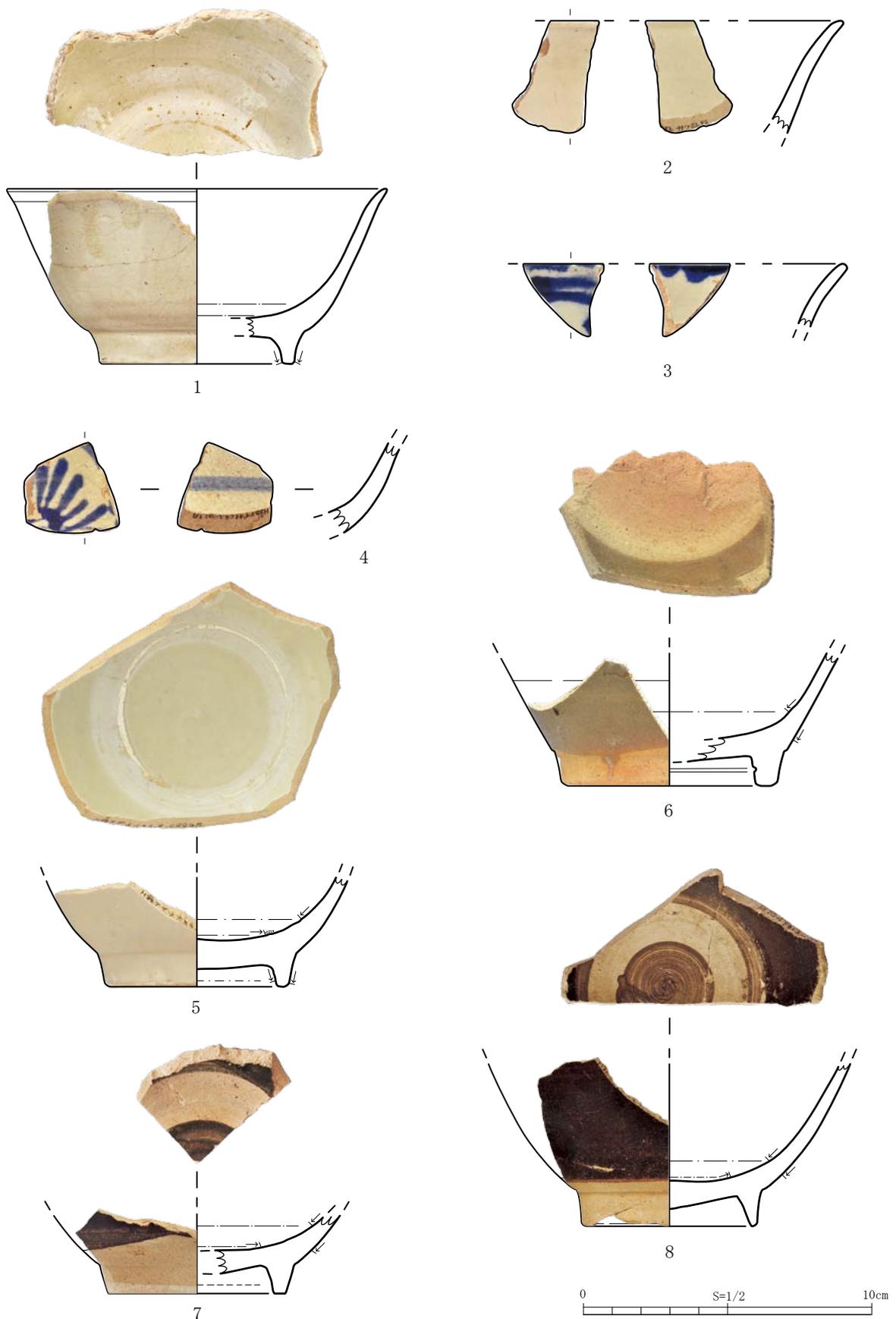


第 32 図 (図版 15) 本土産磁器 (4)・本土産陶器

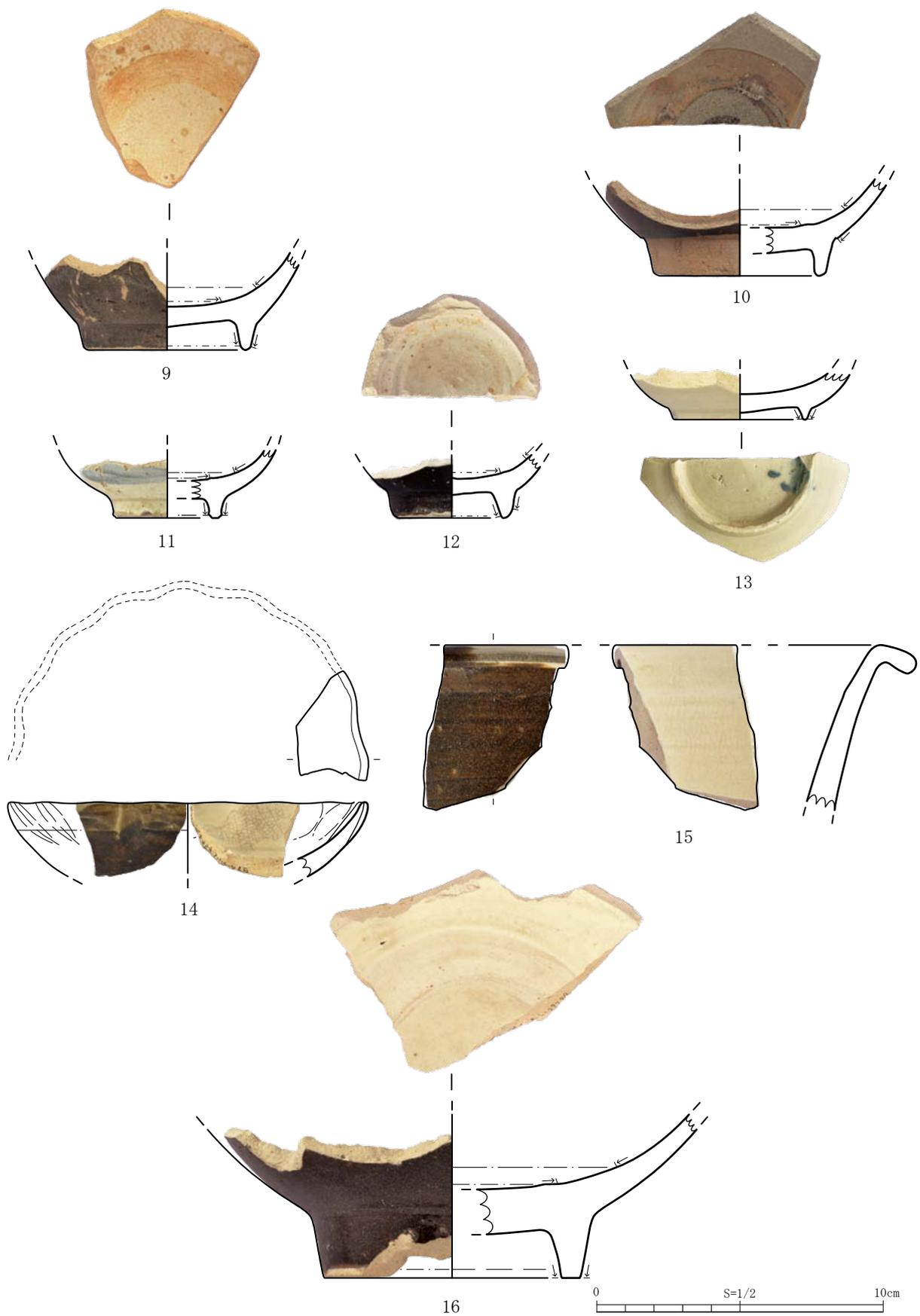
第 21 表 沖縄産施釉陶器観察一覧

挿図番号 図版番号	器種 部位	口径 器高 底径 (cm)	胎土	釉の状態	施釉範囲	備考	出土地点
第33図 1 図版16の1	碗 口～底	13.2 6.15 6.8	淡黄 (2.5Y8/3) 細粒子	白化粧土+透明釉 内外面に貫入あり	見込は蛇の目釉剥ぎ。 畳付けは白化粧土から 掻き取る	外面：口縁部か ら釉垂れあり	の-108 5層(Ⅲ)
第33図 2 図版16の2	碗 口縁部	- - -	浅黄 (2.5Y7/4) 細粒子	白化粧土+透明釉 内外面に貫入あり	-	コバルトの付着が見 られるため、絵付け されていたかもしれ ない	そ-99口 攪乱層 (Ⅰ)
第33図 3 図版16の3	碗 口縁部	- - -	淡黄 (2.5Y8/3) 細粒子	白化粧土+透明釉 コバルトによる草花文	-	-	つ-95 5層(Ⅱ)
第33図 4 図版16の4	碗 胴部	- - -	淡黄橙 (10YR8/3) 細粒子	白化粧土+透明釉 コバルトによる草花文	-	-	し-102 1層(Ⅰ)
第33図 5 図版16の5	碗 底部	- - 6.0	淡黄橙 (10YR8/4) 細粒子	白化粧土+透明釉 内外面に貫入あり	見込：蛇の目釉剥ぎ。 アルミナの付着。 畳付け：白化粧土から 掻き取る	-	す-99 4層(Ⅲ)
第33図 6 図版16の6	碗 底部	- - 6.2	淡黄橙 (10YR8/4) 細粒子	灰釉	内面：見込みまで 外面：高台脇まで	外面には焼はぜ あり	そ-101 7層(Ⅳ)
第33図 7 図版16の7	碗 胴～底	- - 6.2	淡黄 (2.5Y8/3) 細粒子	鉄釉	見込：蛇の目釉剥ぎ。 外面：高台脇まで	畳付けには白土 を塗る	そ-100 2層(Ⅰ)
第33図 8 図版16の8	碗 底部	- - 7.0	淡黄 (2.5Y8/4) 細粒子	鉄釉	見込：蛇の目釉剥ぎ。 外面：高台脇まで	-	ひ-122 3層(Ⅱ)
第34図 9 図版17の9	碗 底部	- - 5.6	淡黄 (2.5Y8/4) 微粒子	外面鉄釉、内面白化粧 土+透明釉の掛け分 け。 内面に貫入あり	見込は蛇の目釉剥ぎ。 畳付けは白化粧土から 掻き取る	-	は-131 1層(Ⅰ)
第34図 10 図版17の10	碗 底部	- - 5.8	灰白 (2.5Y7/1) 微粒子	外面鉄釉、内面灰釉の 掛け分け	見込：蛇の目釉剥ぎ。 アルミナの付着。 外面：高台脇まで	-	と-104 14層(Ⅲ)
第34図 11 図版17の11	小碗 底部	- - 3.8	灰白 (2.5Y8/2) 微粒子	白化粧土+透明釉 コバルトによる草花文	見込：蛇の目釉剥ぎ。 アルミナの付着。 畳付け：白化粧土から 掻き取る	-	と-97 2層(Ⅱ)
第34図 12 図版17の12	小碗 底部	- - 3.8	灰白 (2.5Y8/1) 微粒子	外面鉄釉、内面白化粧 土+透明釉の掛け分 け。 内面に貫入あり	見込は蛇の目釉剥ぎ。 畳付けには白土を塗 る	円盤状製品を意 識したかのような 割れ方	と-94 6層(Ⅲ)
第34図 13 図版17の13	皿 底部	- - 4.6	灰白 (5Y8/1) 微粒子	外面透明釉、内面白化粧 土+透明釉の掛け分 け	総釉で畳付けのみ露胎	底面にコバルト の付着あり	の-108 6層(Ⅲ)
第34図 14 図版17の14	皿 口縁	12.6 - -	灰白 (2.5Y8/1) 微粒子	外面鉄釉、内面白化粧 土+透明釉の掛け分 け。 内面に貫入あり	-	波状口縁	て-106口 6層(Ⅲ)

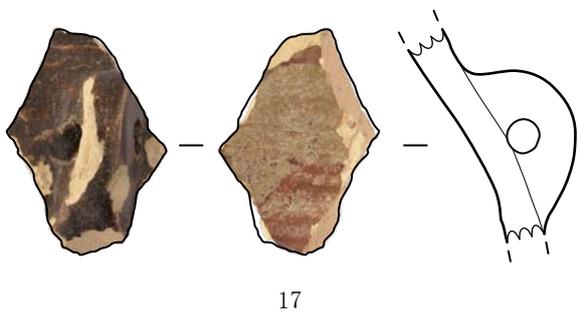
挿図番号 図版番号	器種 部位	口径 器高 底径 (cm)	胎土	釉の状態	施釉範囲	備考	出土地点
第34図 15 図版17の15	鉢 口縁	- - -	灰白 (5Y7/1) 微粒子	外面鉄釉、内面白化粧 土+透明釉の掛け分け。 内面に貫入あり	-	-	な-94 8層(Ⅲ)
第34図 16 図版17の16	鉢 底部	- - 9.0	淡黄 (2.5Y8/3) 細粒子	外面鉄釉、内面白化粧 土+透明釉の掛け分け。 内面に貫入あり	見込は蛇の目釉剥ぎ。 畳付けは釉を掻き取 る。	胴部の割れは細 かく打ち欠かれ ている	し-97 9層(Ⅲ)
第35図 17 図版18の17	壺 耳	- - -	淡黄 (2.5Y8/3) 細粒子	外面には鉄釉を施す	-	内面にはろくろ 痕が明瞭に残る	ち-96 8~10層 (Ⅱ~Ⅳ)
第35図 18 図版18の18	壺 底部	- - 10.4	灰白 (5Y7/1) 微粒子	鉄釉	内面：見込みまで 外面：高台脇まで 高台内には鉄釉の指描 き	見込みにはアル ミナの付着。高 台内には鉄釉の 指描き	と-101 2層(Ⅱ)
第35図 19 図版18の19	急須 蓋	7.5 3.7 5.6	灰白 (2.5Y7/1) 微粒子	鉄釉	外面のみ鉄釉を掛ける	かかりは1.2cmの 幅を持つ	ひ-122 6層(Ⅲ)
第35図 20 図版18の20	急須 蓋	6.0 - 4.6	灰白 (10Y8/1) 微粒子	鉄釉	外面のみ鉄釉を掛ける	かかりは1.0cmの 幅を持つ	ね-108 6層(Ⅲ)
第35図 21 図版18の21	按瓶 胴部	- - -	灰白 (5Y8/2) 微粒子	コバルトと鉄釉で文様 を描く	外面のみ	内面に釉垂れあ り	は-125 5層(Ⅱ)
第35図 22 図版18の22	按瓶 取手	- - -	灰白 (5Y7/1) 細粒子	鉄釉 内外面に貫入あり	全面	-	ち-96 6~7層 (Ⅱ)
第35図 23 図版18の23	急須 注口	- - -	淡黄 (2.5Y8/3) 細粒子	白化粧土+透明釉 外面に貫入あり	外面のみ透明釉を掛け る	-	し-102 1層(Ⅰ)
第35図 24 図版18の24	急須 底部	- - 7.0	灰黄 (2.5Y7/2) 細粒子	白化粧土+透明釉 外面に貫入あり	底面のみ透明釉を掻き 取る	-	は-131 1層(Ⅰ)



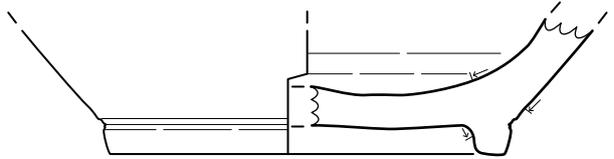
第 33 图 (图版 16) 沖縄産施釉陶器 (1)



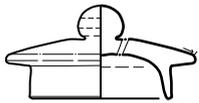
第 34 図 (図版 17) 沖縄産施釉陶器 (2)



17



18



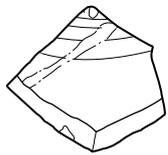
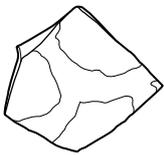
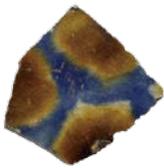
19



20



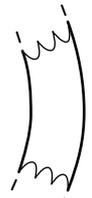
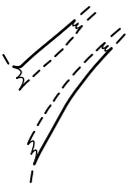
0 S=1/3 10cm



21



23



22



24

0 S=1/2 10cm

第 35 图 (图版 18) 沖縄産施釉陶器 (3)

陶質土器は総数 331 点で鍋・鍋蓋・急須・水注・土瓶・土瓶蓋・火炉・皿・鉢・水鉢・人形・灰落としての 12 種が確認できた。鍋が多く全体の 55%を占める。次に火炉、あとは数点ずつであった。人形が 1 点出土しているが、小破片のため実測は控えた。詳細は不明だが、赤く彩色されている。

沖縄産無釉陶器は総数 415 点で鉢・挿鉢・水鉢・小鉢・壺・小壺・鍋・甕・徳利・花生・瓶・灯明皿・皿・火炉・火取等が確認できた。壺が多く全体の33%を占める。次は甕で24%、鉢13%、挿鉢11%と続く。他は数点である。

今回の分布調査で底部に資生堂のマークのある瓶が出土した。ちょうど半分で割れていたため、製作年代を探るために調べたところ、資生堂マークは「花椿」を模したもので、大正 4 年 (1915 年) に誕生したことがわかった。大正 7 年には、ほぼ現在と同じマークが完成したとのことであった。

参考までにマークを掲載する。



現在



大正 5 年看板

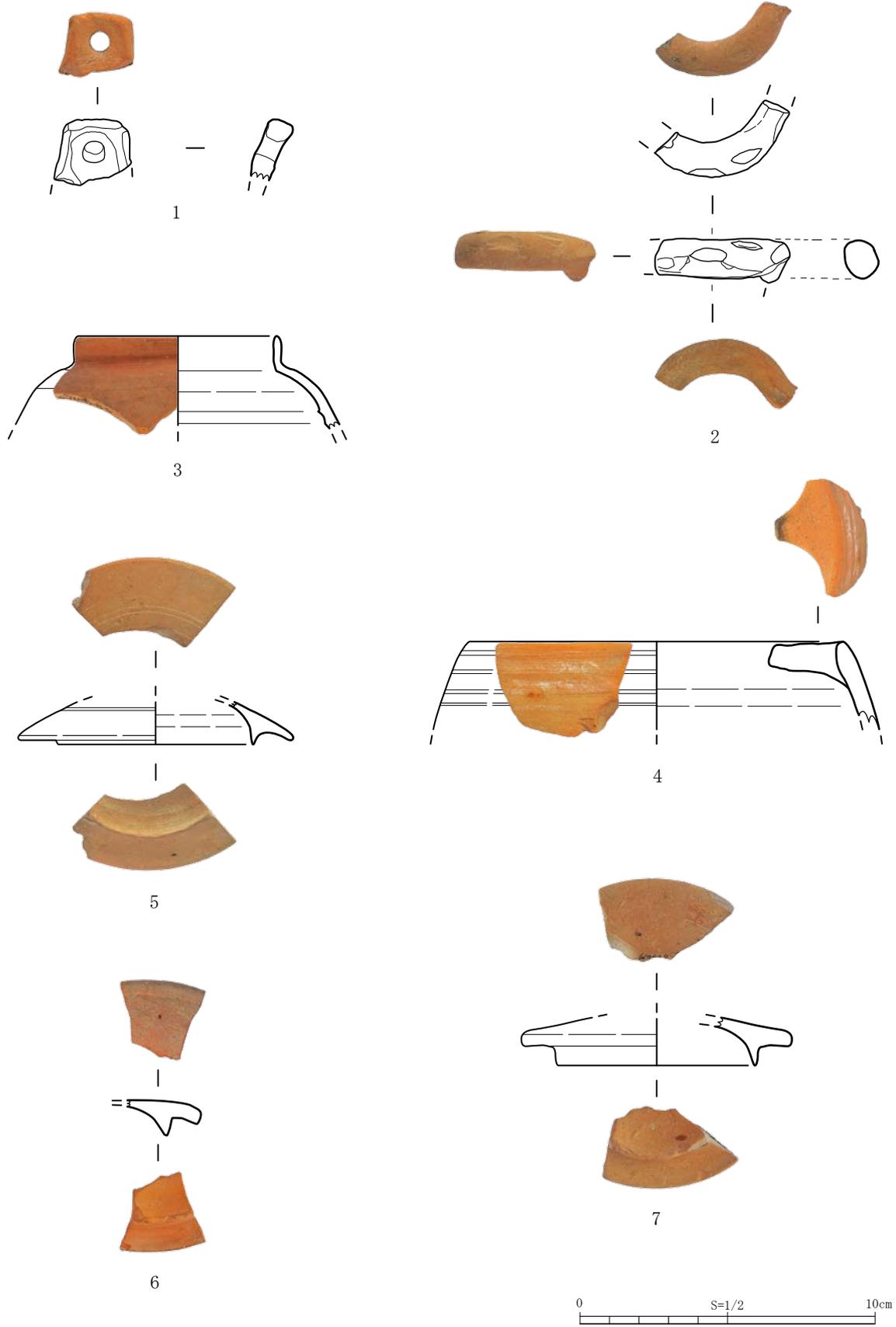


大正 5 年社用便箋

円盤状製品は総数 15 点が出土した。利用した種類・器形等、また、製作されたサイズなど、様々であった。

第 22 表 陶質土器観察一覧

挿図番号 図版番号	器種 部位	口径 器高 底径 (cm)	胎土	色調	備考	出土地点
第36図 1 図版19の1	水注 耳	- - -	橙 (5YR7/8) 微粒子	内外面：橙 (5YR7/6)	混入物に極小の雲母・黒色粒・赤色粒が確認できる。 胎土からやや還元の様子が窺える。	そ-99イ 6層(Ⅲ)
第36図 2 図版19の2	鍋 取手	- - -	にぶい橙 (5YR6/3) 微粒子	内外面：橙 (7.5YR6/6)	混入物に極々少量の雲母・白色粒・赤色粒が確認できる。	の-108 5層(Ⅲ)
第36図 3 図版19の3	土瓶 口縁部	6.8 - -	橙 (2.5YR6/6) 微粒子	内外面：橙 (2.5YR6/8)	混入物に極々少量の白色粒・赤色粒が確認できる。 内外面ともろくろ痕が明瞭に残る。	つ-95 7層(Ⅲ)
第36図 4 図版19の4	火炉 口縁部	12.8 - -	橙 (5YR6/6) 微粒子	内面：橙 (5YR7/8) 外面：にぶい橙 (7.5YR7/4)	混入物に極々少量の白色粒・黒色粒・赤色粒が確認できる。 外面のみろくろ痕が明瞭に残る。	そ-99イ 6層(Ⅲ)
第36図 5 図版19の5	土瓶 蓋	9.4 - 6.6	明褐灰 (7.5YR7/2) 微粒子	内外面：にぶい橙 (7.5YR7/4)	混入物に少量の雲母・白色粒・黒色粒・赤色粒が確認できる。 胎土から還元の様子が窺える。	ち-93 1層(Ⅰ)
第36図 6 図版19の6	土瓶 蓋	9.2 - 6.8	にぶい橙 (7.5YR6/4) 微粒子	内面：橙 (7.5YR7/6) 外面：にぶい橙 (7.5YR6/4)	混入物に極々少量の雲母・黒色粒・赤色粒が確認できる。 胎土から還元の様子が窺える。	と-97 4層(Ⅲ)
第36図 7 図版19の7	土瓶 蓋	- - -	橙 (2.5YR6/8) 微粒子	内面：橙 (2.5YR6/8) 外面：にぶい橙 (2.5YR6/3)	混入物に極々少量の雲母・赤色粒が確認できる。 外面は灰味がかかるが胎土は還元されていない。	の-108 6層(Ⅲ)



第 36 图 (图版 19) 陶質土器

第 23 表 沖縄産無釉陶器観察一覧

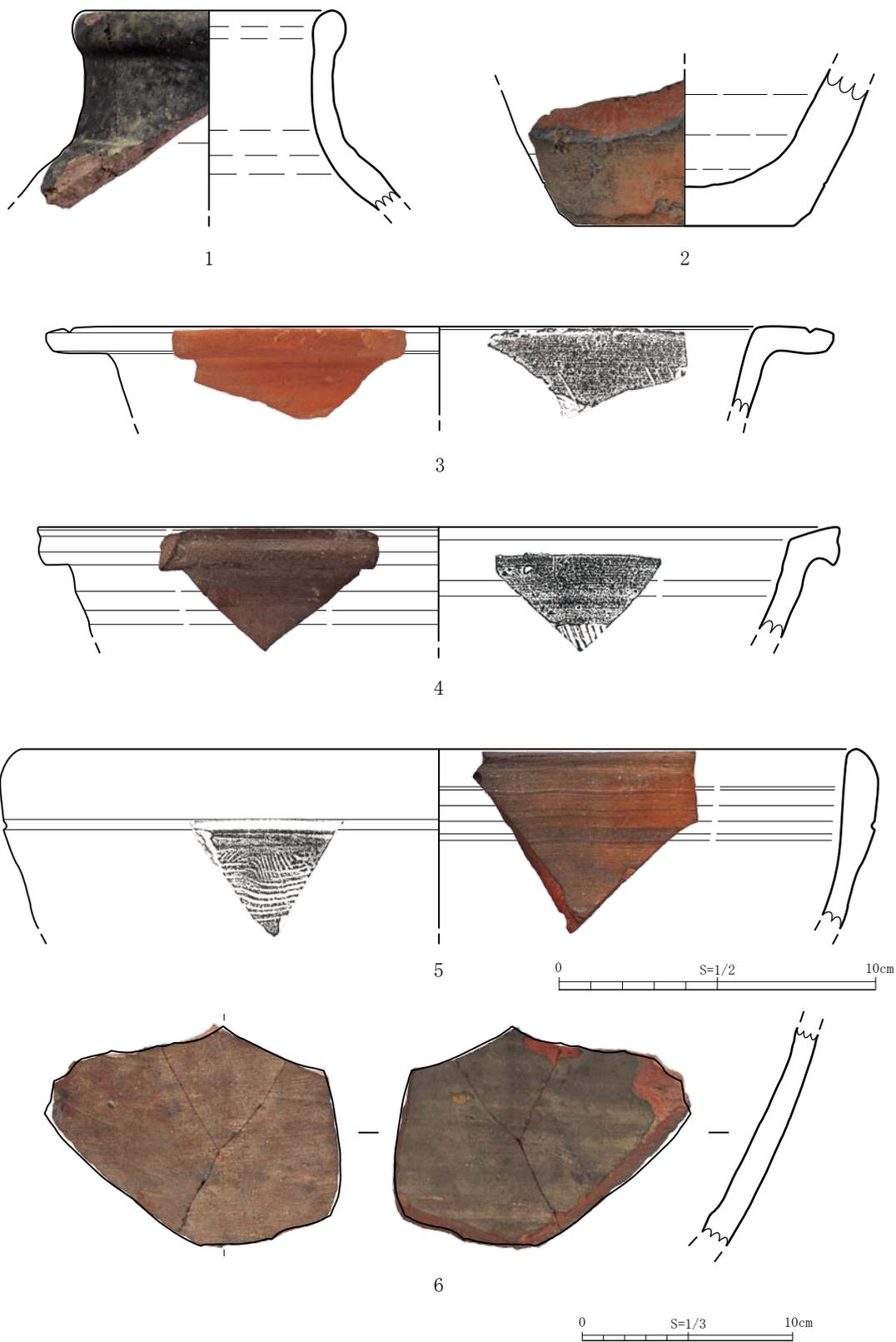
挿図番号 図版番号	器種 部位	口径 器高 底径 (cm)	胎土	色調	備考	出土地点
第37図 1 図版20の1	壺 口縁部	8.0 - -	赤褐 (10R4/3)	内外面：暗赤灰 (7.5R3/1)	喜名焼と思われる。	は-85イ 1層(I)
第37図 2 図版20の2	壺 底部	- - 6.8	赤(10R4/6)	内面：暗青灰 (5PB3/1) 外面：褐灰 (5YR4/1)	内面：ろくろ痕が明瞭 外面：ヘラによる器面調整痕あり	の-108 5層(III)
第37図 3 図版20の3	播鉢 口縁部	25.0 - -	橙(2.5YR6/8)	内外面：橙 (5YR6/6)	内表面には混入物多い。	の-108 6層(III)
第37図 4 図版20の4	播鉢 口縁部	25.4 - -	暗赤褐 (10R3/3)	内面：赤 (10R4/6) 外面：暗赤褐 (10R3/2)	-	と-97 2層(II)
第37図 5 図版20の5	水鉢 口縁部	27.0 - -	赤(10R8/4) やや還元状態で焼 かれたようであ る。	内面：赤褐 (2.5YR4/6) 外面：暗赤褐 (5YR3/3)	内外面ともろくろ痕が明瞭。	と-98 3層(II)
第37図 6 図版20の6	甕 胴部	- - -	赤褐 (10R4/4)	内外面：暗赤褐 (2.5YR3/2)	内外面ともろくろ痕とヘラによる器面調整痕が明瞭に残る。	ね-108 6層(III)
第38図 7 図版21の7	播鉢 口縁部	30.7 - -	明赤褐 (2.5YR5/8)	内外面：橙 (2.5YR6/8)	外面：調整痕明瞭。 オロシ目は5本を一組とする。	ひ-122 3層(II)
第38図 8 図版21の8	播鉢 底部	- - 10.0	赤褐 (10R4/4)	内外面：赤 (10R45/8)	外面：調整痕明瞭。 オロシ目は9本を一組とする。	と-97 2層(II)

第 24 表 容器観察一覧

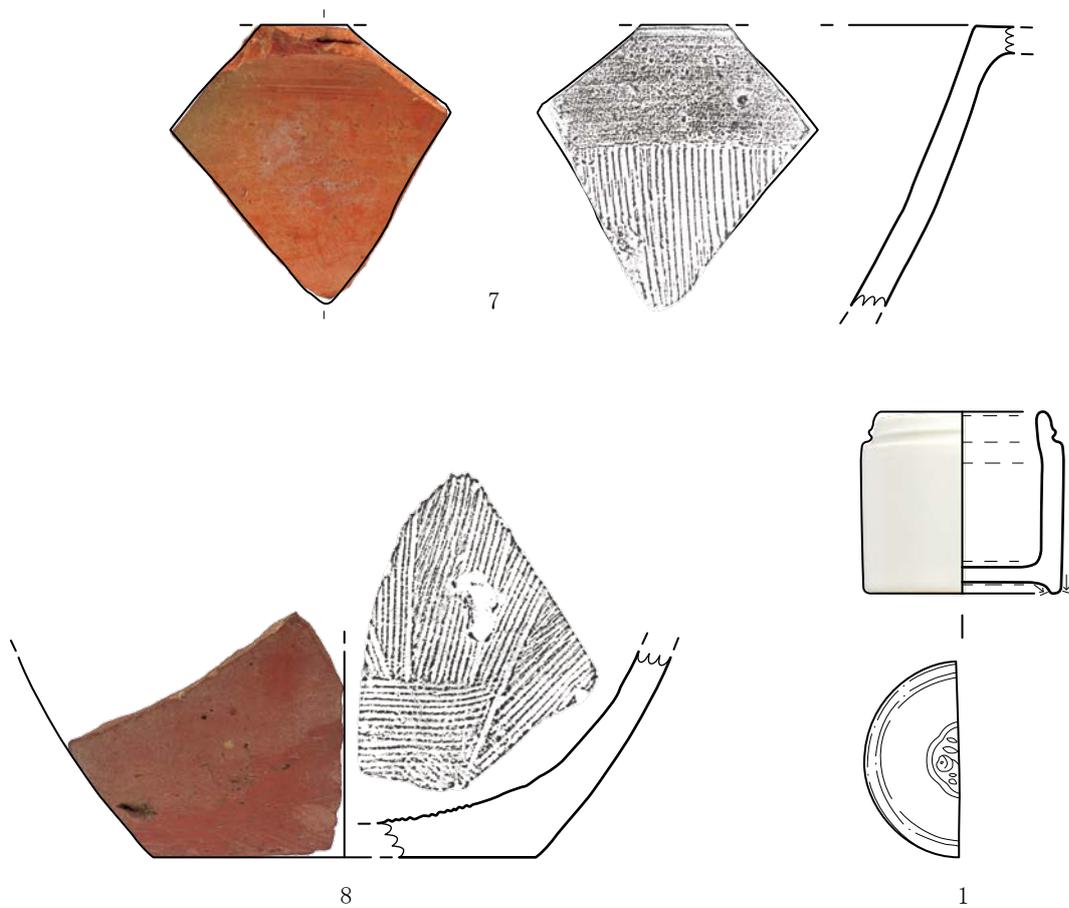
挿図番号 図版番号	種類	器種/部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項	出土地点
第38図 1 図版21の1	本土産磁器	瓶/ 口～底	4.4 5.2 4.8	底部に資生堂のマークが見られる。	そ-101 3層(I)
第38図 2 図版21の2	ガラス製品	小瓶	1.1 2.9 1.5	口縁部に螺旋状の突起が施されているためネジ切り式の蓋が施されていた。底部には「W86 (もしくはM98)」の文字が見られる。薬瓶の可能性が考えられる。	は-131 1層(I)

第 25 表 銭貨観察一覧

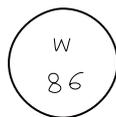
挿図番号 図版番号	貨幣名	時代	材質	法量 (cm/g)			周囲 ギザ	文様		出土地点
				外径	厚さ	重さ		表	裏	
第38図 3 図版21の3	一銭	明治	銅	2.8	0.12	5.7	無	中央に一線、菊と桐の枝菊花文を配す。輪郭内側は点の圏線。	中央に龍。大日本・明治〇〇を配す。輪郭内側は点の圏線	て-94 6層(II)



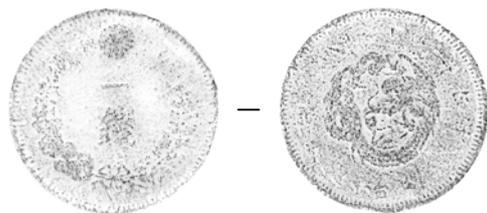
第 37 図 (図版 20) 沖縄産無釉陶器 (1)



0 S=1/2 10cm



2



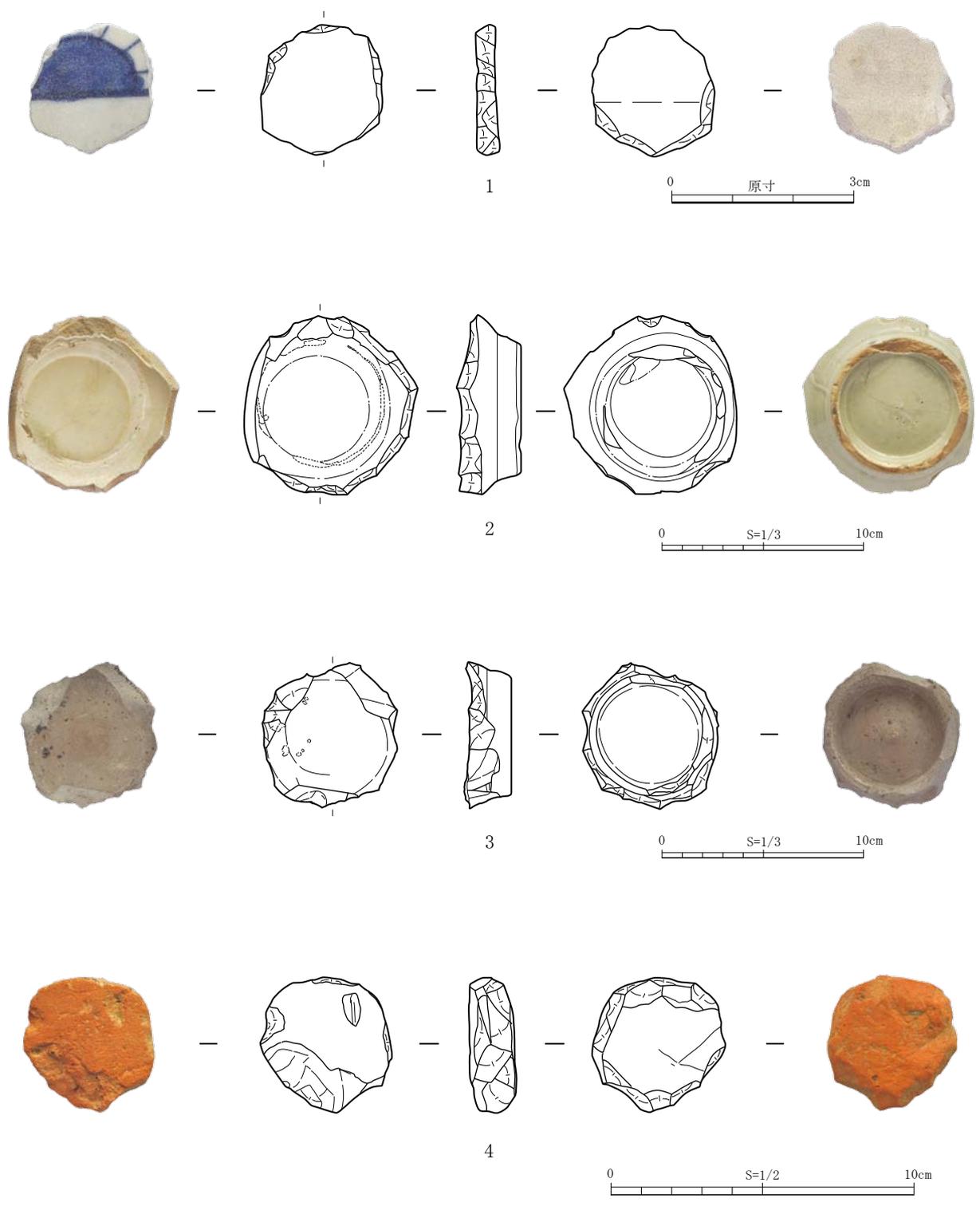
3

0 原寸 3cm

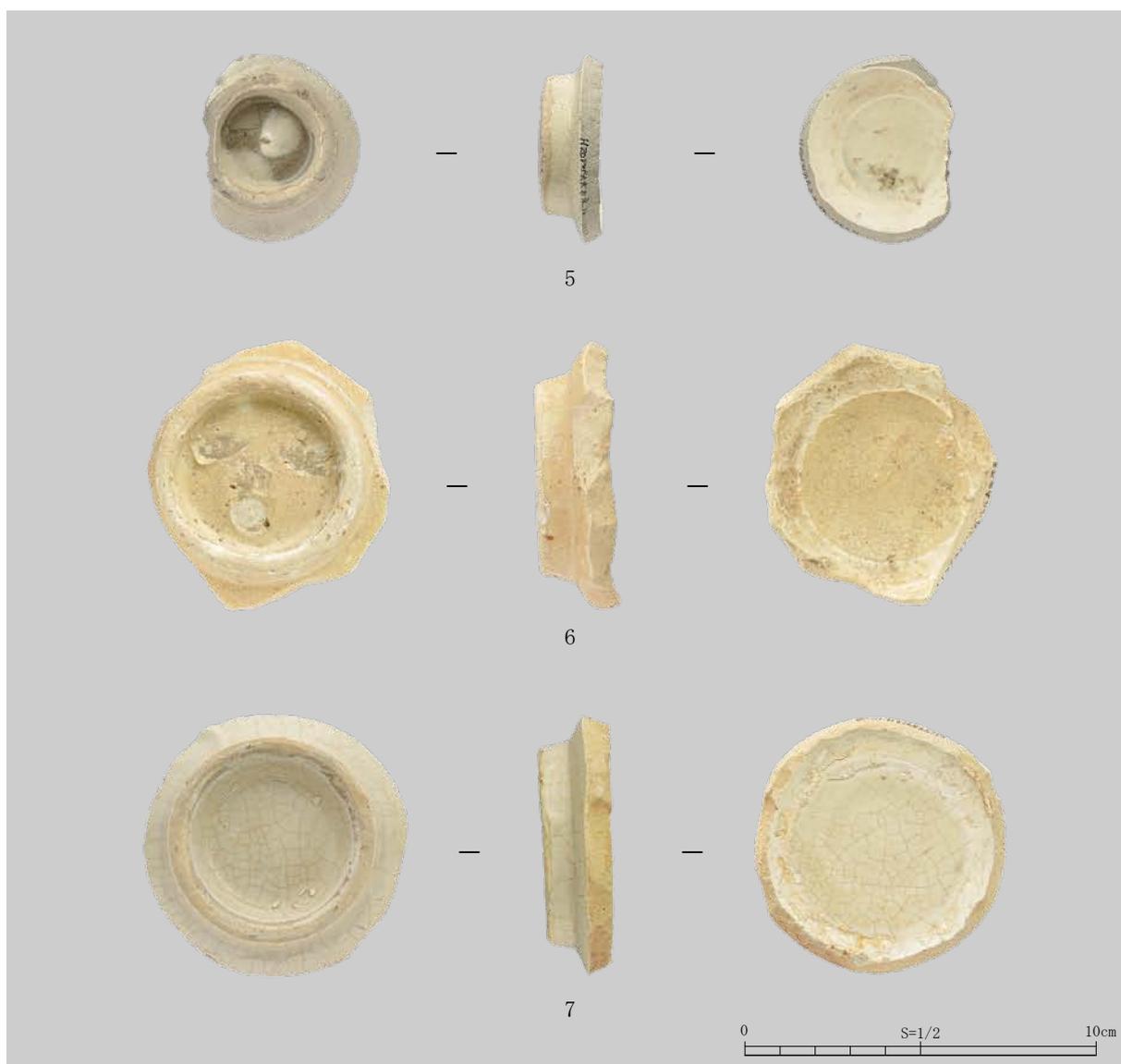
第 38 図 (図版 21) 沖縄産無釉陶器 (2)・容器・銭貨

第 26 表 円盤状製品観察一覧

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	残存 状況	計測値 (mm/g)				備考	出土地点
					最大径	最小径	最大厚	現存重量		
第39図 1 図版22の1	本土産染付	小碗	胴部	完	23	19.5	4	2.38	上部では細かい調整が見られるが、下部は粗い。	と-97 2層(Ⅱ)
第39図 2 図版22の2	沖縄産 施釉陶器	碗	底部	完	88	81	32	138	輪郭の凸凹が目立ち、成形は粗い。打割回数も少ない。	の-108 5層(Ⅲ)
第39図 3 図版22の3	沖縄産 施釉陶器	碗	底部	完	70	62	21	80.7	輪郭の凸凹が目立ち、成形は粗い。打割回数も少ない。	ね-108 6層(Ⅲ)
第39図 4 図版22の4	瓦	平瓦	胴部	完	46	41	15	28.36	輪郭の凸凹が目立ち、成形は粗い。打割回数も少ない。	な-96 埋土(Ⅰ)
図版23の5	沖縄産 施釉陶器	小碗	底部	破	54	44	15	36.8	非常に細かく打割され、内外面ともに円形を呈する。	ね-108 6層(Ⅲ)
図版23の6	沖縄産 施釉陶器	碗	底部	完	80	66	18	79.9	輪郭の凸凹が目立ち、成形は粗い。打割回数も少ない。	大嶺海岸 表面踏査
図版23の7	沖縄産 施釉陶器	碗	底部	破	76	72	18	90.5	非常に細かく打割され、内外面ともに円形を呈する。	は-131 1層(Ⅰ)
図版23の8	沖縄産 施釉陶器	碗	底部	破	134	121	45	560	細かく打割され円形を呈する。外面の輪郭は内面よりも整っている。	ち-113 4層(Ⅱ)
図版24の9	沖縄産 無釉陶器	-	-	破	30	18	4	3	細かく打割され円形を呈する。外面の輪郭は内面よりも整っている。	な-95 5層(Ⅲ)
図版24の10	沖縄産 施釉陶器	碗	底部	破	62	32	8.5	25.2	細かく打割され円形を呈する。外面の輪郭は内面よりも整っている。	せ-96 4層(Ⅱ)
図版24の11	沖縄産 施釉陶器	壺	胴部	完	52	47	11.5	38	全体に摩耗が進む。	大嶺海岸 表面踏査
図版24の12	瓦	平瓦	胴部	破	40	34	12	16.7	打割回数は多くないが円形を呈する。外面の輪郭は内面よりも整っている。	ち-99 4~6層(Ⅱ)
図版24の13	瓦	平瓦	胴部	完	60	51	13.5	46.1	平瓦の端を利用。摩耗が進む。	は-131 1層(Ⅰ)
図版24の14	本土産磁器	碗	底部	完	78	60	35	80	打割回数は少なく、成形途中か思われる。	大嶺海岸 表面踏査
図版24の15	沖縄産 無釉陶器	壺	胴部	完	84	66	14.5	106	打割回数は少ない。方形を呈する。	と-95 9層(Ⅲ)



第 39 図 (図版 22) 円盤状製品 (1)



图版 23 円盤状製品 (2)



图版 24 円盤状製品 (3)

第 27 表 プラスチック製品観察一覧

挿図番号 図版番号	種類		法量 (cm/g)	観察事項	出土地点
第40図 1 図版25の1	プラスチック製品	人形	全長 6.1 重さ 4.6	中に粒状のものが入っており、振ると音がする。 首から下へ繋る物があったようである。 乳児用の玩具かもしれない。	た-99 5層(Ⅱ)
第40図 2 図版25の2	プラスチック製品	歯ブラシ	最長 16.5 最厚 6.5 最幅 11.0	ブラシ部の植毛孔は4列で、楕円形を呈する。 柄部上面に「大学歯刷子9号」の文字と眼鏡と髭のある男性の顔が見られる。べっ甲の黄色を呈する。	そ-99イ 6層(Ⅲ)

第 28 表 木製品観察一覧

挿図番号 図版番号	種類	法量 (cm/g)	観察事項	出土地点
第40図 3 図版25の3	下駄	全長 22.0 幅 8.7 厚さ 1.0	無歯の下駄だと思われる。 緒穴の形状は整正な円形を呈する。	ね-84 3層(Ⅳ)
第40図 4 図版25の4	楔?	全長 23.8 横幅 13.6 厚さ 5.8 重さ 620	一側面にのみ径1.5cmの円形痕が6ヶ見られる。 穴を穿つ作業台として使用されていたのかも しれない。	す-96表採

第 29 表 青銅製品観察一覧

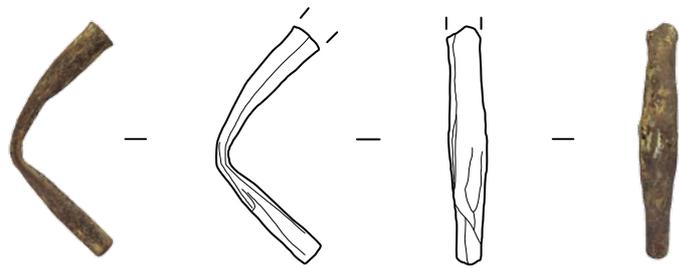
挿図番号 図版番号	種類	部位	法量 (cm/g)	出土地点
第41図 5 図版26の5	煙管	雁首	全長 8.0 火皿径 0.9 接続部径 0.6 重量 8.8	な-96 埋土(Ⅰ)

第 30 表 貝製品観察一覧

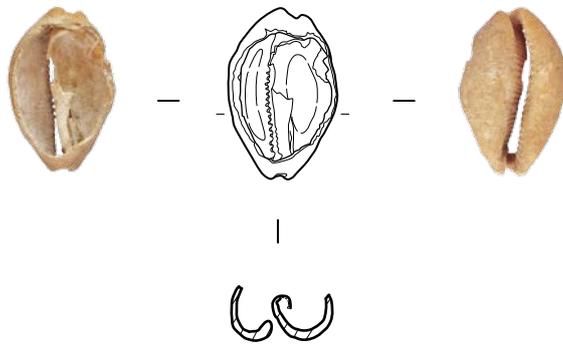
挿図番号 図版番号	用途	科	名称	孔長径 (cm)	孔短径 (cm)	殻長 (cm)	殻径 (cm)	観察事項	出土地点
第41図 6 図版26の6	貝錘	タカラガイ	ハナマルユキ	3.4	2.7	1.6	4.5	背面を除去し、扁平状にしている。 穿孔面は研磨されている。 水管溝周辺に摩耗が見られる。	と-97 4層(Ⅲ)
第41図 7 図版26の7	貝錘	タカラガイ	ホンダカラ	5.8	5	9.5	6.55	多重の打割と若干の摩耗が見られる。	ね-108 5層(Ⅱ)



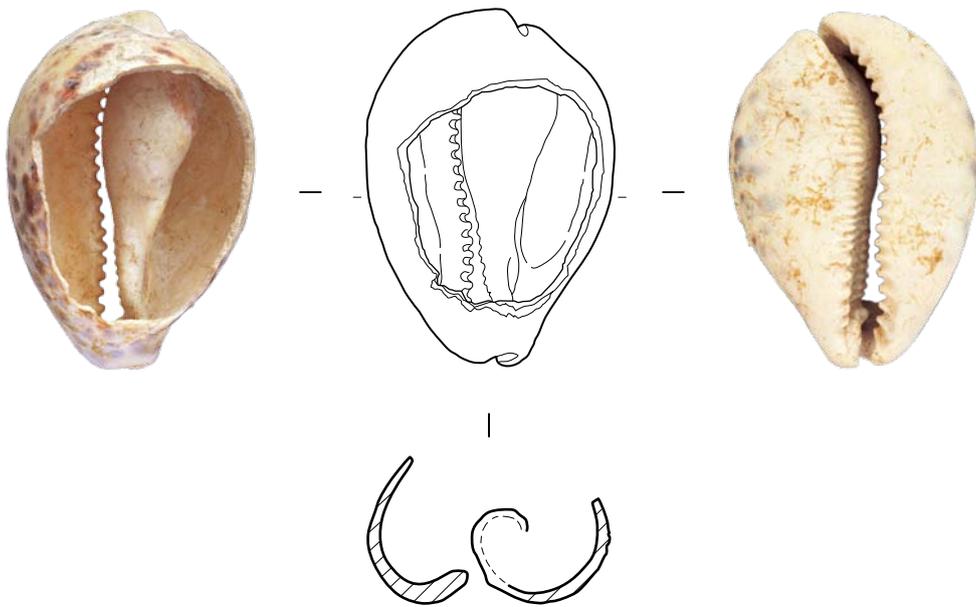
第 40 図 (図版 25) プラスチック製品・木製品



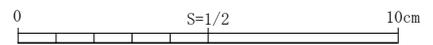
5



6



7



第 41 图 (图版 26) 青铜製品・貝製品

第VI章 大嶺海岸踏査

埋蔵文化財分布調査に並行して、平成20（2008）年1月23日に大嶺海岸の踏査を行った。民俗地図に記載されている旧護岸や竜宮神が確認できた。また、海岸では磨石もしくは敲石類と考えられる石器や中国産・本土産磁器の破片等が表採できた。同時に海岸南側では大礫群、北側では魚垣かと思われる石列も確認したが、詳細は不明である。今後、地質学や民俗学等の専門的な調査が行われることが望まれる。

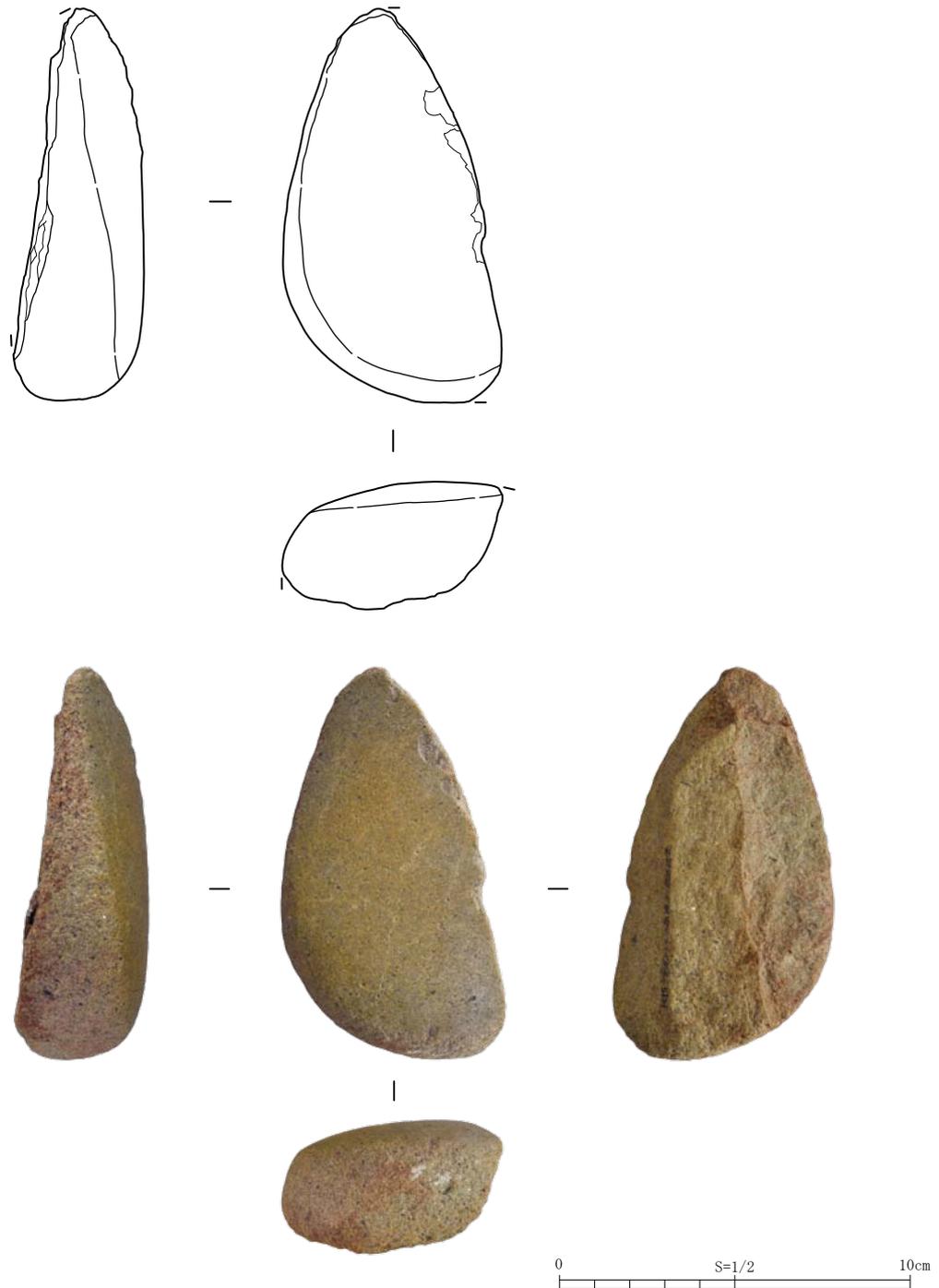


図版 27 大嶺海岸のようす



第 42 図 大嶺海岸踏査に伴う遺構・遺物等プロット図

大嶺海岸の踏査中に、敲石・磨石類を採取した。石質は緑色岩と推測され、大嶺海岸周辺では産出されないものである。表面は磨面として、側面を敲打に利用したようである。残存部は1/2程度であるが、本来は平面形が楕円形を呈すると思われる。使用時に破損したのか、遺棄後破損したのかは不明である。最大長：113mm、最大幅：63mm、最大厚：37mm、現存重量27.9gを測る。



第43図(図版28) 大嶺海岸表採敲石・磨石類

第Ⅶ章 まとめ

以上、平成 19 年度から 22 年度にかけて実施した、那覇空港大嶺地区の埋蔵文化財分布調査の成果について述べてきた。4 年度で 204 か所の試掘調査を実施し、そのうち大嶺村～字大嶺の遺構や遺物包含層（大嶺村跡）に係る試掘坑：50、小禄海軍飛行場に係る試掘坑：3、那覇飛行場に係る試掘坑：18 を確認できたことにより那覇空港大嶺地区における埋蔵文化財の分布状況、性格やその範囲について、大まかには把握することができたといえる。大嶺村跡に残っている可能性のある範囲は、現在のところ、大嶺地区の中心部より北側に広がっており、昭和 16 年の民俗地図と重ねることで、今回の分布調査で検出された耕作痕及び植栽痕は畑跡に伴うものである事が確認できた。狭小ではあるが集落内にも遺構の残る範囲はあり、今回検出した石列や柱穴の広がり気になるところである。また、土層の堆積状況より、大嶺村～字大嶺の遺物包含層を埋めて、小禄海軍飛行場滑走路が建設されたことが窺え、対照的に那覇飛行場の建設の際には、地山まで削平したことが窺えた。しかしながら、今回の分布調査の前提である 30m 間隔での試掘坑（底面 3×2m）の設定においては、隣り合った試掘坑であっても全く違う様相を見ることもあり、土層堆積状況の解釈、検出された遺構の性格や範囲、時期について判断することは非常に難しかった。今後、遺跡の範囲確認調査が行われることで、詳細な情報を収集し、資料が蓄積されることを期待する。なお、今回の分布調査において、事前の調査計画で想定していた盛土の高さが実際は 10m を越しており、その掘削には膨大な時間と経費がかかるため、今回は調査を行わないこととなった。今後の開発計画の中で、盛土が撤去された後に試掘坑を設定し、調査を行う必要がある。

ここでは、これまでの調査成果を整理して若干のまとめとしたい。

層序について

今回は大きく 4 枚に分層して報告した。

第Ⅰ層は現代の盛土・造成土・表土である。那覇空港拡張時や新ターミナル建設当時の盛土等でニービとクチャの混成土にコンクリートやアスファルトの瓦礫が多く混じっていた。建築現場の方からも新ターミナル建設に伴い大量の土砂が大嶺地区に運搬された旨の話聞くことができた。

第Ⅱ層は復帰以前的那覇飛行場の建設及び整備に伴う表土、路盤材、埋土等である。コンクリート建築物の下からは大嶺村に伴う耕作痕と思われる遺構が確認できた箇所もあった。

第Ⅲ層は大嶺村～字大嶺に伴う堆積層である。小禄海軍飛行場に伴う遺構も含む。もともと集落内には白砂が広がっていたようであるが、有機物により黒っぽく変色しているのが特徴である。

第Ⅳ層は地山である。試掘坑により海浜砂、岩盤（石灰岩）、ビーチロック、ニービ、クチャ等様々であった。なお、大嶺崎で地表より 20m 下までボーリング調査を行った（図版 29 参照）。海砂層の下はシルト質砂（クチャ）であった。

多くの試掘坑では、那覇空港拡張や那覇飛行場の建設・整備等でⅣ層（地山）まで削られている様子が確認できたが、場所によっては那覇飛行場の下層に小禄海軍飛行場や大嶺村～字大嶺の遺構や遺物包含層を確認することができた。那覇飛行場に伴うコンクリート建築物やアスファルトは厚く、掘削は容易ではないが、今後、確認していく必要があると思われる。

遺構について

遺構は基本層序に準じて報告した。確認できたのは大嶺村～字大嶺に係る遺構（石列、柱穴、耕作痕等）及び遺物包含層、小禄海軍飛行場跡、那覇飛行場跡である。

遺物について

遺物は中国産陶磁器・本土産陶磁器・沖縄産陶器・陶質土器・銭貨等をはじめ瓦など生活全般にかかる遺物が多数出土した。本土産磁器の生産地としては瀬戸美濃系が多かったが、砥部産や肥前系も確認できた。数点ではあるが、子供用の玩具も出土した。また、今回の遺物1点ではあるが後期土器の胴部片が確認できた事と、大嶺海岸の踏査で敲石・磨石類が表採できたことから、大嶺地区には文献に登場する以前の古い遺跡があった可能性も否めない。

今回の分布調査にて検出された遺構や多くの出土遺物また土層の堆積状況から、近世から現代までの大嶺地区一帯に関する変遷過程を窺う事が出来た。

今後、那覇空港大嶺地区において開発が行われる際には、同地区に所在する埋蔵文化財に対して、今回の分布調査成果や平成21年度に行われた那覇空港消防車庫新築工事に伴う緊急発掘調査成果をもとに、十分な配慮がなされることを願う。

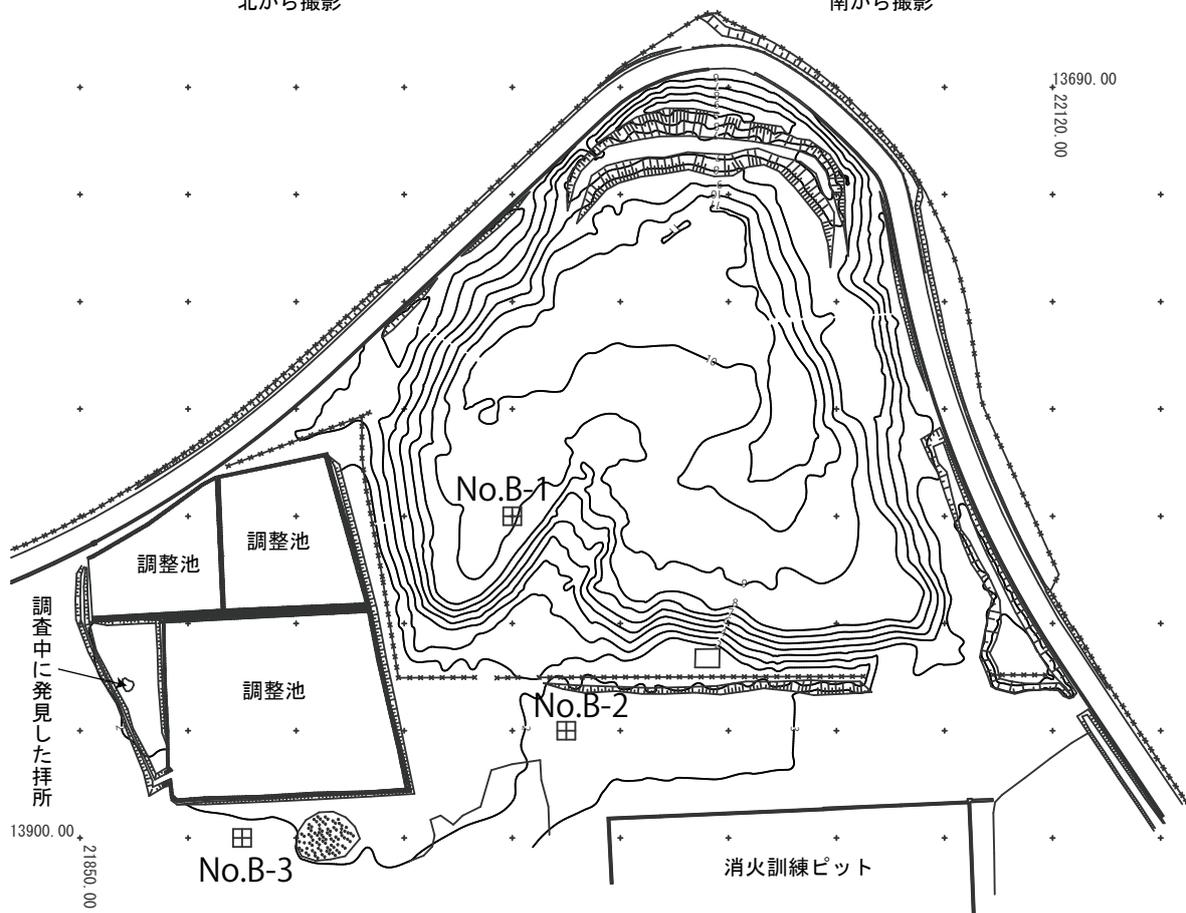
最後に大嶺崎に所在する調整池の側で確認された拝所を紹介する。石灰岩下には土質の堆積層を確認した。民俗資料等、聞き取り調査でも情報が得られなかった。何か情報が得られることを望む。



北から撮影

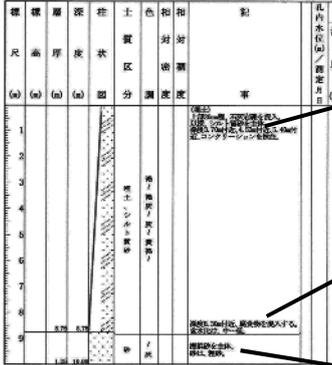


南から撮影



第 44 図 ボーリング位置図

ボーリング名	No.B-1	調査位置
発注機関	那覇市教育委員会 文化財課	
調査業者名	株式会社 那覇地質調査 主任技師	
ボーリング径	φ100mm	深度
総掘進長さ	10.00m	



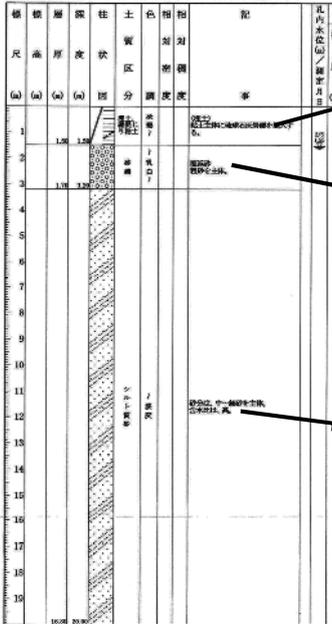
(埋土・シルト質砂)
上部20cm程、石灰岩礫を混入。
以深、シルト質砂を主体。
深度3.7m付近、4.53m付近、
5.40m付近、
コンクリーションを挟在。

深度8.3m付近、腐食物を混入する。
含水比は、中～低。

(砂)
海浜砂を主体。
砂は粗砂。



ボーリング名	No.B-2	調査位置
発注機関	那覇市教育委員会 文化財課	
調査業者名	株式会社 那覇地質調査 主任技師	
ボーリング径	φ100mm	深度
総掘進長さ	20.00m	



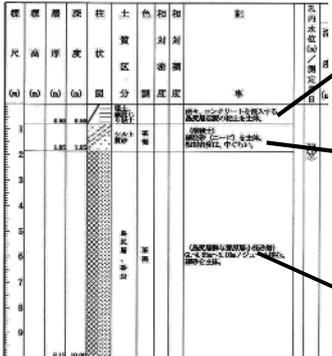
(埋土、礫混じり粘土)
粘土主体に琉球石灰岩礫を混入する。

(砂礫)
海浜砂。
粗砂を主体。

(シルト質砂)
砂分は、中～細砂を主体。
含水比は、高



ボーリング名	No.B-3	調査位置
発注機関	那覇市教育委員会 文化財課	
調査業者名	株式会社 那覇地質調査 主任技師	
ボーリング径	φ100mm	深度
総掘進長さ	10.00m	



(埋土、礫混じり粘土)
所々、コンクリートを混入する。
島尻層起源の粘土を主体。

(シルト質砂(崩落土))
細砂粒(ニービ)を主体

(島尻層群与那原層小礫砂岩)
GL-4.85m～5.00mノジュール挟む。
細砂を主体。



図版29 ボーリング成果

《参考文献》

- | | | | |
|------------------|------|--|--------------|
| 秋田裕毅 | 2002 | 下駄 | 財団法人 法政大学出版局 |
| 浅川範之 | 2007 | 「飯茶碗の考古学」『近世・近現代考古学入門「新しい時代の考古学」の方法と実践』 | 慶應義塾大学出版株式会社 |
| 字大嶺向上会 | 2008 | 大嶺の今昔 | |
| 石井謙治 | 2002 | 日本の船を復元する | 株式会社 学習研究社 |
| 衣生活研究会 村野 圭市 | 1975 | 手織りのすべて | |
| 片多雅樹 | 2008 | 中世都市博多を掘る | 海島社 |
| 加藤嘉太郎著 | 1991 | 家畜比較解剖図説 一上巻一 | 養賢堂発行 |
| 「角川日本地名大辞典」編纂委員会 | 1986 | 角川日本地名大辞典 47 沖縄県 | 角川書店 |
| 岸本孝 | 2000 | 靴の辞典 | 文園社 |
| 庄司邦昭 | 2010 | 船の歴史 | 本河出書房新社 |
| 聖教新聞社沖縄支局 | 1972 | 沖縄の民具 | 新星図書 |
| 丸山茂樹 | 1978 | 日本のはきもの博物館 | (財)日本はきもの博物館 |
| 山田佑平 | 1994 | 船大工考 | 財団法人 相馬報恩会 |
| 浦添市教育委員会 | 1992 | 城間遺跡－牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査報告書Ⅲ－ | |
| 浦添市教育委員会 | 2007 | 浦添ようどれⅢ 金属工房跡編
－史跡浦添城跡復元整備事業に伴う発掘調査報告－ | |
| 沖縄県教育委員会 | 1993 | 湧田古窯跡（Ⅰ）－県庁舎行政棟建設に係る発掘調査－ | |
| 沖縄県教育委員会 | 1995 | 湧田古窯跡（Ⅱ）－県庁舎行政棟建設に係る発掘調査－ | |
| 沖縄県教育委員会 | 1999 | 喜友名貝塚・喜友名グスク
－宜野湾北中城線（伊佐～普天間）道路改築事業に伴う
緊急発掘調査報告書（Ⅰ）－ | |
| 沖縄県立埋蔵文化財センター | 2001 | 天界寺跡（Ⅰ）
－首里杜館地下駐車場入り口建設工事に伴う緊急発掘調査－ | |
| 沖縄県立埋蔵文化財センター | 2004 | 首里城跡 一城の下地区発掘調査報告書一 | |
| 沖縄県立埋蔵文化財センター | 2007 | 渡地村跡 一臨港道路那覇1号線整備に伴う緊急発掘調査報告一 | |
| 汐留地区遺跡調査会 | 1996 | 汐留遺跡 汐留遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書 | |
| 那覇市教育委員会 | 2005 | 首里旧真和志村跡 一個人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査一 | |
| 那覇市教育委員会 | 2006 | 住吉遺跡 一電線布設工事に係る緊急発掘調査報告書一 | |
| 那覇市教育委員会 | 2009 | 那覇市内遺跡Ⅱ 一個人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査一 | |
| 那覇市教育委員会 | 2009 | 首里内金城村跡石畳道
－首里金城町下水道整備事業に伴う緊急発掘調査報告一 | |
| 那覇市教育委員会 | 2009 | 垣花村跡
－那覇港湾施設管理棟整備工事に伴う緊急発掘調査報告書一 | |
| 那覇市教育委員会 | 2010 | 鏡水土砂場原A遺跡
－陸上自衛隊那覇駐屯地整備場建設工事に伴う緊急発掘調査報告一 | |
| 福岡市教育委員会 | 1999 | 博多 68 福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第 605 集 | |

報 告 書 抄 録

ふりがな	なはくこうないおおみねちくまいぞうぶんかざいぶんぶちようさほうこくしょ
書名	那覇空港内大嶺地区埋蔵文化財分布調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	那覇市文化財調査報告書
シリーズ番号	第92集
編著者名	北條 真子
編集機関	那覇市教育委員会 文化財課
所在地	〒 900-8553 沖縄県那覇市前島3-25-1 TEL 098-891-3501
発行年月日	2012 (平成24)年 3月 30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なはくこうないおおみねちく 那覇空港内大嶺地区 まいぞうぶんかざいぶんぶちようさ 埋蔵文化財分布調査	なはし 那覇市 おおあざ おおみね 大字 大嶺	47201		26度 12分 16.9秒	127度 38分 32.6秒	平成19年度 2007 11 2008 2 平成20年度 2008 5 2008 12 平成21年度 2009 5 2010 1 平成22年度 2010 8 2011 2	平成19年度 約 262 m ² 平成20年度 約 401 m ² 平成21年度 約 374 m ² 平成22年度 約 391 m ²	那覇空港の総合的な調査における埋蔵文化財分布調査(204箇所)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
那覇空港内大嶺地区 埋蔵文化財分布調査	集落 (畑)	近世～近代	柱穴 耕作痕・植栽痕	青磁・青花 本土産陶磁器 沖縄産施釉陶器 沖縄産無釉陶器 陶質土器 赤色系瓦片 貝製品 獣骨等	分布調査によって大嶺村～字大嶺の存在を確認できた。
	遺物包含層	近世～近代			
	小禄海軍飛行場	近代(沖縄戦)	滑走路	外国製磁器	

要 約	<p>本報告書は、那覇空港の総合的な調査の一環として、那覇空港大嶺地区における埋蔵文化財の分布状況を明らかにするために実施した試掘調査結果をまとめたものである。現地調査は4年度をかけ、当該地に30m間隔で試掘坑を設定し、重機と人力による掘削にて埋蔵文化財の有無を確認した。204箇所の試掘調査の結果、大嶺村～字大嶺に伴うと考えられる遺構としては石列、柱穴、耕作痕等が確認できた。また、中国産、本土産、沖縄産の陶磁器類を含む層を確認した。小禄海軍飛行場跡は2箇所を確認できた。戦後～復帰まで使用された那覇飛行場の下層には大嶺村～字大嶺に伴うと考えられる遺構が残っている可能性も確認できた。調査初年度に行った、大嶺海岸の踏査では本土産磁器や円盤状製品とともに敲石・磨石類の石器を表採した。</p>
-----	--

那覇市文化財調査報告書 第 92 集

那覇空港内大嶺地区
埋蔵文化財分布調査報告書

発行 2012 (平成24) 年 3月 30日
那覇市教育委員会
〒900-8553 沖縄県那覇市前島3-25-1

編集 那覇市教育委員会 文化財課
TEL 098-891-3501
FAX 098-891-3523

印刷 株式会社 尚生堂
〒900-0016 沖縄県那覇市前島1-6-1喜瀬ビル1階
TEL 098-869-0568
FAX 098-869-0578
